
狐と鬼と私の妖怪学園

ゲレゲレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐と鬼と私の妖怪学園

【NZコード】

N9446U

【作者名】

ゲレゲレ

【あらすじ】

人が妖怪の存在を認めた時、妖怪たちは、自分達を危険と判断し、排除しようとする人間達との徹底抗戦を決めた……また、人は、それまで絶対とされていた兵器の火力が、妖怪たちには通じないと見ると、これまでインチキと罵り、時には見世物にしていたオカルトに可能性を見出した。

当初は未知の勢力であった妖怪が押していた戦況も、オカルト……とりわけ、陰陽師やエクソシスト、ヴァンパイア・ハンターなど

の活躍によつて、互角の状況へと持ち直していく。

しかし、そこである事件が起きた

これは、それから一世紀以上の時が経つた現代のお話。

人と妖怪が、ある事件を切欠に、一世紀以上の交流を深めた、現代のお話……。

プロローグ（前書き）

この小説に登場する全てのものはフィクションです、実際の人物・団体・事件等とは一切関係がありません。

プロローグ

廃都市東京

夕闇に染まる夜空を、赤いランプが鉄の腹に焚かれた軍用輸送機『R-01（レイシズム）』が、両翼の先端に着けられている、巨大なドラム缶の様な飛行装置を駆使して、大気を切り裂くように飛行している。その無骨で、ましてや輸送機だということで、通常の航空機よりも腹の大きな機体は、まるで空を駆けるバファローを彷彿とさせるが、機体を安定させるために着けられているスタビライザーや、先ほどから、微妙な操縦をする度に、巨大なドラム缶の底の向きを変えている飛行装置が、そのイメージを地上動物から飛行動物へと払拭させていた。

『そろそろ新宿上空に到着する。学園序列一位と二位は、各自の装備をチェックした後、ハッチの前まで移動しろ。繰り返す
もはや植物が生えるぐらいに古く、破壊し尽くされたビルが寂しく立ち並ぶ、廃都市東京上空を飛ぶ輸送機内で。そんな機内放送が流れただ……。

「だそうだぞ童子」

すると、輸送機のキャビンで偉そうにふんぞり返りながら、座席に座っていた一人の女性が立ち上がり。何とも面倒くさそうに後ろにいる人物へと告げた。

「分かった」

女性に童子と呼ばれた男は、短い返事を返すと。そのまま背筋を伸ばしながら座っていた座席から“のそり”と立ち上がり。視線をきめ細かく、それでいてどこか透明感がある長い金髪が特徴的な女性へと向けた。

「ならば、気は進まんが行くとするかの。遅れても面倒なだけだし

「ああ」

ロングストレートの金髪の前髪を搔き揚げながら、視線を向けられた女性は身を翻し。そのまま輸送機のキャビンから、スラリと伸びた優美な脚線を描く足で出て行く……また童子といつ男も女性の後に着いて行つた。

『R - 01』機内の最後尾……そこにはハッチを開放する際に、コンテナに積まれた物資が外へと飛び出ないため地面に厳重に固定され。更には確りと通路を確保するために、等間隔で並べられていた。

そこを、先ほどキャビンを出た一人が。カンカンと、鉄の地面を叩く足音を鳴らしながら歩いている。

前を歩くのは、流れる様に艶やかな長い金髪を揺らす、白面の女性……。

身長は女性にしては高い175?。スラリと伸びた長い足に、確りとクビレと臀部でんぶにメリハリが出来ていい腰は、柳腰と称しても良いくらいに細くしなやかで。均整の取れたプロポーションの割りに存在を強調する形の良い胸は、ウエストのサイズも相まって、通常のサイズよりも大きく見える。肌は白く、細く整った輪郭や優美な曲線を描く眉毛。それでいて、少しだけ吊り上った切れ長の美しい瞳は、同性の者ですら眼を奪わせる魅力を持っていた。一言で言えば、モデルの様な女性だ。

そして、そんなモデルの様な女性の後ろを歩くのは、先ほど童子と呼ばれた男性だ……。

彼を一言で表すのなら、正に筋肉という芸術的な鎧を身に纏つた男だ。

身長は190cmと大柄で。まるで岩石の様に鍛え上げられた腕周りに、何者も貫くことを許さない、膨らみを持つた鉄板が

並べられていくと錯覚しそうな大胸筋郡。太い首をサポートするために、それ相応に丸みを帯びた僧帽筋に、理想的な逆三角形を体現している、分厚い背中。胸囲とは反比例したサイズを持つウエストには、鉄球を並べたかのような六角筋が存在を強調している。臀部はキュッと引き締まり、太ももは太木の様に頑丈そうで、脹脛は短距離が非常に早そうな、アキレス腱が細くダイヤモンドを思わせるカットを浮き彫りにさせている。ザンバラで眼にかかる程度に伸ばされた白い前髪に、刈上げたように短い、それ以外の黒髪……瞳は眠そうにしているが、眉毛は少し太く、鼻もそれなりに筋が通っているため、それほどだらしのない顔には見えない。輪郭は、体格が大きいために頑丈そうに出来ているが、基本的に引き締まつているために、あまり太くは見えず、むしろ普通の輪郭に見える。男の顔が、普通な整い方をしているために。二人が一緒に歩く姿を『美女と野獣』と名づけるには厳しいものがあるが、体格的に見れば、まあ名づけても良いだろうと思える構図だ。

そんな二人は現在、体にフィットした『パワーセーブ』という、所々露出した着衣を身に纏っている。

「しつかし……毎度毎度。この“お勤め”の度に着せられる服には馴れんのう

「だが、これが無ければ。俺は安易に妖力を使う事を許されていい……」

「知つておる。だが、それは碌に妖力の制御が出来ない、おぬしだけの話しだろうに。それがなぜ、私にも着せられるのだ？」

女性が今、自身が身に纏つている体のラインがハッキリと分かつてしまふ。引っ張ろうが何しようが破ける気配のない、ラバーに似た素材で出来た、やたら頑丈なフィットスーツを触りながら、うんざりとした表情で文句を垂れる。それに、同調はするが、仕方が無いといつた表情で続く童子と呼ばれる男。

広い空間を誇る、このコンテナが並べられた場所を歩く一人は、そろそろ輸送機最後尾のハッチ扉前に到達するところであった。

すると、そんな時だつた……。

『ハツチの前まで来たな。では、お前達の横に設置されているコンテナを開ける。そこに、今日お前達が使用する武器が入っている……ああ、それと。パワーセーブのチェックはしたのか？ しなければ、そこに入っている武器のセキュリティが認証を出さず、使えないからな』

「そんなもんは来る途中で済ませたわ……いちいち指図をするな」機内放送から聞こえてきた男の声に従いつつも、少々苛立たしげに言う女性……。

『口を慎め序列三位。お前たちは、この“お勤め”によって社会の信頼を得ていてる事を忘れるな』

「得ているのは、貴様らの様な腐った水を啜る汚物どもからである？ それと、私の名前は九尾妖狐くわいゆうしょくだ。偉そうに番号で呼ぶな」九尾妖狐と名乗った女性は、機内放送から聞こえてくる男の声に対し、少しだけ口調を強めた。

『ふん……まあいい。我々は、お前達にとりあえず働いてもらえば良いだけなのだからな。何とでも言つていれば良い』

しかし、妖狐の口調を強めた言葉は、男に軽く流されてしまった。それに「ちつ！」と悪々しげに舌打する妖狐。だが、これに反応する者は誰一人としていなかつた。

「妖狐。コンテナを開けるぞ」

「……分かつた、そうしてくれ」

機内放送の男と、妖狐のやり取りを何事も無かつたかのように聞いていた童子が。男の指示通り、ハツチ扉のすぐ手前に設置された、一際横に長いコンテナの一つの取っ手に手をかけた。

そして、妖狐の言葉と同時に、一つの取っ手を手前に引いた……。すると

バシュウウウ……。

棺桶の様に開いたコンテナの中から、何やらヒアの抜ける音がする同時に、一種類の武器が姿を表した……。

「ほつ……」

一際横に長いコンテナから姿を表した武器に、妖狐が思わず感心の声を漏らしてしまった。

そこにあつたのは、一本の扇と……やたらデカイ、破城槌の様な、長く太い武器だ。

「大きさ的に見て当然、私がこれだろつな」

そう言いながら、コンテナを開けた童子の横から。妖狐が一本の扇の方と手に取つた。

この一本の扇は、あくまで“形だけを扇つぼくした”と言つ様なデザインをしており。基本的な材質を、“妖力変化金属”と呼ばれる、妖怪が発する妖気の伝導によつて、形などを様々なものへと変える特殊な合成金属で作られており。持ち手の部分以外。全てがシンプルな白色のデザインで統一されている。

妖狐は、これを何度か開いたり閉じたりした後。扇を閉じた状態の持ち手部分を右手で握り、マジマジと不思議そうな視線を送り始めた。

「……どう使うのだ、これは？」

『一度、自分が使いたいと思う武器を想像しながら。それに妖気を送つてみる』

使い方の分からぬ武器を見ている最中に、機内放送から男の声が割り込んでくると。妖狐は不機嫌な表情を隠そつともせずに、再び先ほど同様「ちつ！」という舌打を発した……が、従わねば、この武器の特性も理解できないので。渋々といった形で、言われたとおりの事を実行した。

妖狐の体から、青い炎の様な妖気が不気味に揺らめきながら。自身の右手を通して、手に持つていい武器へと流れ込んでいく……するど。

「おおつー？」

所有者の妖氣を感じ、全体へと伝達させた、もともとは扇の様な形をしていた武器が。一瞬にして、一振りの刀に姿を変えた。

「これには驚きの声を隠せなかつた妖狐……。

「ほお～～これは奇怪な武器だのう」

一振りの刀へと姿を変えた、白色のシンプルなデザインをした武器に、興味津々な視線を向ける。

刀……というよりも、刀の様な長さを誇るカッターとでも表した方が良い様な、その刀は。まるで、妖狐のために予め設計されたかの様に、自然と手に馴染んだ。

『その武器は、まだ試作段階の物なのだ。今回の簡単な任務、もとい“お勤め”の内容を考慮して。上から直々に試験運用を言い渡された物だ。あまり手荒く使つてくれるなよ?』

「知つたことか、好きに使わせてもらつ」

機内放送の男の注意を一蹴した妖狐は。そのまま右手で持つていた刀を、軽く左から右に払うように振つてみる。……。
ヒュン！　　という空氣を切り裂く、鋭い音を発した刀。

「なるほどのう……やはり軽い」

一度振つてみた感触を確かめながら、妖狐は持つていた刀を気に入つたという表情で見つめる。

「ところで童子、おぬしの方はどうなのだ？」

自身に送られた武器を気に入り、それを肩に担ぐようにして持つた妖狐は。そのまま相方である童子に目をやつた。
「使い方が分からない」

すると、ロンテナの前で、いまだやたら“力”、破城槌の様な長く太い武器と睨めっこをしていた童子が。素直に答えた。

『序列一位の武器は、まあ簡単に言つてしまえば。一世紀半以上前に、架空の武器として創作された“パイルバンカー”という物だ』

「“パイルバンカー”だと？ 何だ、それは？」

機内放送の声に、童子の代わりに反応する妖狐。
どうやら、いくら声を聞いただけで機嫌を損ねる相手でも、気に

なるものは氣になる様であつた。

『私個人は、よく分からんのだが……どうやら資料によれば。所有者が手に持つた瞬間、内蔵された空砲（ブランク弾）に向かつて自動的に所有者の妖力が流れ込み。計三発の空砲が満タンになると使用可能になるらしい。明確な発射過程は……あ～あつた。その満タンになつた空砲を内部で爆発させ、その反動を利用して、先端から特殊金属製の“杭”を射出させるみたいだ。そして射出された杭は、再び内部へと戻り、次弾に備えて待機状態に戻る』

男の説明に、妖狐が“何を馬鹿な事を言つているのだ”と言外に語るかのように「はあ～」と深いため息をついた。

「童子よ、悪いことは言わぬ……それを使うのは止めておけ。どう考へても、役に立つとは思えぬ」

刀^{ブレード}を肩に担ぎながら、“パイルバンカー”と呼ばれる武器を見つめる童子に、諭す様な声音で、やんわりと止めるように言う妖狐。“いや、これも“お勧め”の一環だ。ありがたく使わせてもらう事にする

だが、妖狐の諭も。どうやら眞面目^{モロココ}そうな彼には効果を成さなかつたみたいだ。

「知らんぞ、どうなつても
「構わない」

そう言つて、童子は己と同じぐらいの大きさを誇る、パイルバンカーと呼ばれる武器を手に取ろうと。コントナの中に手を近づけた。童子の大きな掌が、パイルバンカーの表面にゆっくりと接触する……すると。

「つ！？」

「童子！」

突然、パイルバンカーの表面が、童子の頑強に鍛え上げられた右腕を“取り込む”様に液体状に変化する。

「おい！！ これは一体何のまねだ！！」

相方が、手に取ろうとした武器に取り込まれようとしている光景

に、機内放送の男に妖狐が声を荒げる。しかし、それは「待つてくれ、妖狐」童子自身によつて止められる。

見れば、童子を取り込もうとしていた武器が、太く鍛え上げられた右前腕の肘関節辺りで、液体化させた部分の進行を止めていた。

「どうやら、これが、この武器の装備の仕方だつたみたいだ」

「……何とも理解し難い武器だの、そのパイルバンカーとやらは」

「ああ、だが俺には丁度良いみたいだ」

そう言いながら、童子がコントナの中から、自身の右前腕に取り付いた巨大な武器を取り出す……。

“ズモ……”と、重量感のありそうな雰囲気を持たせる、その巨大な武器は、まさに体が大きく筋骨隆々な童子には御譲えの武器であった。

「うん？ 体から妖力が抜かれていく様な感じがするな……」

『どうやら、それが空砲（ブランク弾）に妖力を送り込んでいる作業みたいだな。しかし……やはり凄いな、妖怪という“もの”は。そのパイルバンカーという武器自体、総重量が0.5tは超えているというのに。何ともまあ軽々と……』

「童子は妖怪の中でも特別な存在だ、これぐらいは当然の事。それと、おぬし今、我ら妖怪の事を“もの”と言つたか？」

機内放送の男の言葉に、妖狐が少し吊り上つた切れ長の眼を、更に鋭いものへと変えながら反応する。

『まで、勘違いはするな。今のは言葉のあやといつやつだ……いちいち反応をするな』

「ふん……どうだかな」

先ほどから続く、二人の険悪なやり取りの中、童子は己の右腕に取り付いた武器を眺めている……。

「うん？ 形が変わるのが？」

ぱつと眺めていると突然、手に取り付いた武器が先ほどの同様。その円柱のシリエットを液状化して崩し始めた……。

みるみるうちに形を変化させていくそれは、最終的に、長さは半

分ぐらいまで縮まるが、その代わり、“杭”が射出されるであろう先端付近に四本の爪の様な存在が現れ。武器の中に取り込まれた右手には、何やらストックが握らされる感触が伝わってきた。

そして童子は、それらの新たに現れた存在の役割を瞬時に理解できた……。

この現象は、童子や妖狐が現在着用している『パワーセーブ』と呼ばれる着衣がもたらした恩恵で。肌に密着させている素材に埋め込まれた、電気信号を生成または読み取り送信できる装置をつて。童子が装備した武器から様々なデータを読み取り、それを記号として変換し、筋肉や細胞に流れる微弱な電流に乗せて送信する。これを脳が情報として処理し、自動的に一つの知識として認識できるのだ。だが、これにはまだ微妙な障害も残つており。現段階では、今回のような童子が装着した大掛かりな武器や、セキュリティ登録した装置以外からは、情報は読み取れない事になっている。原因は、いまだ不明だ。

童子が己の武器の使用方法を理解すると同時に、突然、これまで廃都市東京の上空を飛行していた『R-01』が飛行をやめ、滞空状態へと運行状況を移行した。

『うん？ どうやら新宿上空に到着したみたいだな……』

輸送機の変化に気付いた機内放送の男が、そのような事を呟いた。しかし、そんな事を呟かれたとしても、この空間にいる一人には状況を確かめようがない……なぜなら、ここには窓という外を確認できる媒体は無いからだ。あるとすれば、妙に明るく照らしてくれる無数の証明ぐらいいなものか。

だが一人は、そんな事など気にしてないかのように、機内放送の男の言葉を待つ。

『よし。これから学園序列一位と三位の二人は、開いたコンテナを閉じたあと、すぐに廃棄地区“新宿”へと降りてもらう。ハツチの前まで進め』

機内放送の男の声を妖狐は無視……童子は従い、開いていたコン

テナを閉じ、取つ手の部分を元に戻した。ちなみにパイルバンカーの着いていない左手のみだ。

『コンテナを閉じたな？ なら、ハツチを開くぞ。馴れていると思うが、開いた瞬間の風に足を取られるなよ？ その分、任務もとい

“お勤め”の時間が延びると思え』

すると、二人のいる空間に、何やらブザーの様な喧しい音が響き始める……もう何度も経験した、目の前の巨大なハツチが、下へと倒れるように開く合図だ。それを確認すると、二人は各自スーツのプロテクターが着けられた胸元から小型のインカムを引っ張り出し、手馴れた手つきで左耳へと入れた。

それと同時に、ついに目の前のハツチが、まるで鯨の口が動くようにして、上から下へとゆっくりと倒れこむ形で開かれた……瞬間。ブオッ！！　これまで遮断していた外の大気が、一斉に機内へと入り込む。

これに、別段体勢を崩すこと無く、ただ頭髪を流れ込んでくる大気に揺らしながら、悠々と佇む一人。童子はただ単純な筋力で体の軸を固定し……妖狐は、足元に青い炎の様な妖気が揺らめいている事から、何らかの術を用いていることが見て取れる。

完全にハツチが下へと開くと、まずは妖狐が前へと出た。

『その武器は信用できんからの。“わらわ”から降りさせてもらうぞ？』

流れ込んでくる大気のせいで、通常の会話がしづらいために、耳に入れているインカムから声が聞こえてくる……見れば、前に出た妖狐の頭から、一対の狐耳が生えていて。また、一人称や口調すらも、どことなく変化が見られていた

『もう“先祖帰り”をしたのか？』

そんな妖狐に、意外そうな表情をする童子。

狐耳の生えた妖狐は、それに振り向かずに答えた。

『今日はすぐに帰りたい気分じゃからのう、だから飛ばす事にした……まあ、相手の数は伝わっている限り人3に妖5。丁度いい数字

じ
か

『そ、うか……なら、俺も早く終わらせるよ』と努めよ。

『やつしてくれ

一通りの会話を終えると、妖狐が斜めに開かれたハツチに向かつて、突然走り出す……。

その体重を感じさせない、軽快かつ歩幅の広い走りは。彼女のしなやかな動きも相まって、まるで風の流れを彷彿とさせる走りで……そして、そのまま何のためらいも無く、パラシューートも無しに身一つで、開放されたハツチから飛び出した。

高度3000mからのダイビング。

おそらく、これがオーストラリアなどで行なわれるスカイダイビングなら、さぞ気持ちのいい事であろう。だが今、妖狐が行なっているのは、身一つでの降下だ。つまり、パラシユートなしのダイビングである。しかし、形状を刀に変化させたままの試作武器を右手に持つ、妖狐の白面とも言える表情には、焦りの色は全く伺えない……むしろ、大気の壁を全身に感じるのすら意に介していない、静かな雰囲気を醸し出しながら、じっと眼を瞑っている。

きめ細かでガラス細工の様な長い金髪が、落下する際に生じている突風に煽られ上方へと立ち上がついても、じつと眼を瞑つた妖狐には、何の感情の起伏も起こらない。

「バババババ！」と、大気の壁を突き抜けていく音。
確りと握つていなければ、すぐに放してしまいそうになる右手の
刀。

しかし、それでも妖狐には意に介するものが何も無い。

そういうふうしてみると、禍々しく荒廃した新宿の町並みが、ハッキリと伺える距離まで近づいてきた。

すると、妖狐がゆっくりと瞼を開ける。

視線の先には、荒廃した新宿のひび割れたアスファルトの地面が広がっていた。

それを確認すると、妖狐は降下中だった身を翻し、全身で感じていた大気の壁を貫くような、直下降の姿勢を取る。

みるみるうちに上がっていく速度……もはや線で流れしていく周りの景色。

瞬間

ドンッ！――！

地上で待ち構えていた、ひび割れたアスファルトの地面の上に。妖狐が破片や、土ぼこりなどを巻き上げながら衝突する。

パラパラと巻き上がった破片や土ぼこりが、ゆっくりと晴れていく中……妖狐は、落下したことで作つた、ちょっとしたクレーターの中心で、何の問題もなく着地していた。

そして、まずは周囲の確認をする。

破壊しつぶされた建物が目立ち、紫がかつた霧……“瘴氣”が漂う廃棄地区新宿の情景。

「ふむ……いつ見ても、酷い有様じや のう

人と妖怪の戦争が終わつて、既に一世紀半以上の時が経つた今ですら。この主戦場となつた廢都市東京の景色は、どこも似たようなものなのだ。

背の高かつた筈のビルは、見るも無残に破壊され無くなつているか、穴だらけになつてゐるかの二つで。他の商店だった場所や、何らかの娯楽施設だった場所も、大抵が瓦礫の山と化している。

加えて、この紫がかつた禍々しい霧……これは、通常の人間では吸うことすら出来ない、非常に特殊な毒ガスの様なもので。この主戦場となつた場所で死んだ人間の靈や怨靈、または妖怪の魂が發しているのだという噂がある。だが噂は噂……真相は、最先端の技術を持つ人自身が立ち入れない場所となつてしまつてゐるせいで、謎

のまだ。

しかし、こうもガスが出ていると、視界が制限されて仕方が無い。先ほど妖狐が落下した事で、一瞬だけ霧が散ったのだが、それもすぐ元通りになってしまった始末。ここまで“瘴氣”が酷いのは、新宿だけだと言われている。

「他の場所と違つて、植物すら生えぬ土地……」
自身が作り出したクレーターから、いつも通りの悠然とした歩みで出る。

「更には訓練された人間や、わらわの様な“混血”^{ハーフ}、もしくは妖怪でなければ立ち入れぬと来たものだ……」

右手に持っている刀を、歩きながらもゆっくりと“腰”だめに構える

「だからこそ、なのであろうな……」

瞬間、紫の霧を搔き分けて、一人の男性と思われる影が、妖狐の後ろから飛び掛ってきた。

「ツ！？」

妖狐に飛び掛けた一人の男は、そのまま持っていた錫杖を振り上げ、相手の脳天に打ち付けようと真垂直に振り下ろす……が。

「このような下賤な輩が集まつてくるのは……！」

いつの間にか左回りで後ろへと振り向いていた妖狐が。相手が錫杖を振り下ろすよりも先に、腰ために構えていた刀の刃を、男の両手で錫杖を振り上げていたためにがら空きとなつていていた腹部に向けて薙ぎ払った。

瞬間、相手の着ている白装束の着衣を切り裂き、内部の肉体を切り裂く生々しい感触と音が、妖狐の触覚と聴覚、そして視覚に飛び込んできた

「……ツ！？」

胴体を背骨」と切り裂かれた男は、“糸で塞がれた口”が思わず開いてしまいそうになるぐらいの絶叫を、口内で響かせる……が、しかし。胴体の半分以上を切り裂かれ、残り左脇腹の筋肉や皮膚だ

けで下半身と繋がっている男には、これ以上の行動は起こすことは出来ない。

故に、大量の鮮血と、生々しい内臓を周囲に撒き散らしながら。飛び込んできた勢いそのまま、男はアスファルトの地面に落下してしまう。

「まずは人1……」

そんな切り捨てた男など見向きもせずに、妖狐は刀にこびり付いた血を払うと。再び、歩を前方へと進めようとする。

しかし、今度は前方の紫色の霧が爆ぜる様にして搔き分けられてきた……。

現れたのは、ハイエナの様な頭部をした巨大な人型の妖怪。全身を“瘴氣”と同じ紫色の体毛に覆われ、腕や足の関節は、四足歩行の動物のそれと一緒に逆に向いていた。獣臭がしそうな涎塗れの口元には鋭い牙が何本も並べられ、手や足の爪には引っかいた相手をズタズタにしてしまいそうな黒光りした鉤爪が生えていた。

「そうか……なるほどのう」

そんな身の丈2mは超えていそうな妖怪が目の前に現れたとしても、妖狐には何の危機感も感じられない。むしろ腰に手を当て、相手が間合いに入つてくるのを待つているぐらいの余裕がある。その立ち姿は、場違いにも女性としての美しさと妖艶さを演出していた。間合いに、霧を搔き分けて出てきた妖怪が、無用心にも走りこんできた

刹那

妖狐と、ハイエナの頭部が特徴的な妖怪が衝突したと見られた瞬間。突然、妖狐の体が“すり抜けた”様に相手の後ろへと、悠然と前を歩く姿で現れ。同時に、ハイエナの頭部が特徴的な妖怪の“頭部”が、ゴロンとアスファルトの地面に転がり落ちた……。

首を落された妖怪の胴体を伝つて、大量の赤い血が滝の様に流れアスファルトを赤に染め上げる。

その様子を、また見向きもしないで、刀に付いた血液を確認する

妖狐。

ブレード

「よくスパスパと切れるのう、この武器は。奴等からの物というの
が気に喰わんが、気に入つた」

刃の部分に付着した少量の血液を確認した後。妖狐は返り血一つ
浴びていらない綺麗な白面で嬉しそうに笑みを作る。

すると、後ろの方から“ドサリ”と、先ほど首を落した妖怪の胴
体が倒れる音が聞こえてきた。

同時に、何やら燃やされている音も、妖狐の耳に届いた。

そこで初めて、妖狐が後ろを振り向けば。そこには、今さつき切
り捨てたハイエナの頭部をしていた妖怪の体が、緑色の炎に焼かれ、
身を灰に変えている光景が見られた。

「妖怪と人の融合か、まるで狂氣の沙汰じゃのう。姿もどっち付か
ず、知能もどっち付かず……ただ力のみが底上げされる研究」
もつとも、わらわも人と妖怪との“混血”^{ハーフ}じゃがのう……。

誰とも付かない咳きを漏らしながら。完全に灰となってしまった
人と妖怪の融合体を見送る妖狐。

出来上がった灰の塊が、ここ廃棄地区新宿に、少しだけ吹いてい
る風に巻き上げられれば。そこから何やら一枚の札の様な物が現れ
た。

それを確認した妖狐は……。

「しかも即興と来たか……馬鹿な連中じやな。まあ、これで残り人
1、妖4となつたわけじやが」

呆れたように、今回の相手の思考を疑つた。

すると突然、妖狐が左耳に入っていたインカムに通信が入つた。
「なんじや？」

『こちらで今、お前が計三対の目標を排除したのを確認した。どう
やら、妖怪と人の融合体がいるようだな』
「別に、その程度の事、わらわには特に問題にもならぬ。何の用も
無いのなら、わらわに話し掛けるな。耳障りだ」

入ってきた通信は、さきほど機内放送で妖狐と険悪な空気を醸し
出していた男からのものだつた。

それに、嫌悪を隠そつともしない声音で対応する妖狐。だが、男の方は事情が違つたようだ。

『お前がどう思おつが勝手だが。しかしもそつ余裕を持てる状況じやなくてね』

「どうじつことだ？」

周囲の気配を、頭に生えた狐耳で確認しつつ。インカムから聞こえてくる声に耳を傾ける。ちなみに、刀は右手に持つたまま、ぶらぶらと揺らしている。

『融合体がいたといづことは。そこから100m先に固まっている、残りの目標が全員“くつじて”いる』可能性が出てきた。一旦、お前はそこで待機したまま。今しがた降下した序列一位の到着を待て』くつじて”いる……つまり、端的に言えば、全員が融合している可能性があるという事だ。

その光景を想像したのか、妖狐が「うげえ」と露骨に気持ち悪いといった顔をした。

『これから、こちらの赤外線カメラで地上を見てみるが。相手がどれ程のものか確認できたとしても、お前を単体で出す気は無い。だから、そこで絶対に待機している』

「面倒な事を……だつたら、わらわに科せられている“封印札”と、このステッキを外せば良いだろに」

『それは出来ない。まだ、お前が社会の秩序を乱さないとは判断出来ないからな。それに、そこでステッキを脱いだら、お前は全裸だぞ？』

「別に構わん。里ではほぼ全裸で過ぐしてきたからのう……まあ、その気になれば、お前達の信頼などいらぬからの。自分で取り外す事も出来る」

『ふん、実際にやつてみろ。お前は、その瞬間に社会から危険と見なされ、追われる身か、最低でも一生監視が付く身になるぞ？』

『軽々しく、貴様の様なやつが“社会”と口にするな』

『現に、今は“我々の社会”だ。言つて何が悪い』

「……切るぞ」

妖狐は、静かにそう告げると。相手の答えも待たずに、一方的に通信を切った。

相手に対する憤りや憎悪が膨らむのを感じるも、それを「ふん」といった短い鼻での溜息で抑えると。妖狐は、そのまま紫色の霧がかかった前方に視線を向けた。

「気持ち悪いのう……これは」

先ほど通信を受けた地点から、100mほど進んだ場所で。妖狐は右手に持つた刀を肩に担ぎながら、思わずそう呟いてしまった。前方に見えるのは おそらく、一世紀半以上前は皆がワイワイと騒ぐ場所だったのだろう 横に長い広場の中心で、もはや人の形すらしていない、醜悪で巨大な何かが蠢いている姿であつた。

「即興の融合体は、様々な過程を省略して出来たもの。それらを無視した結果、何が起こるかわからない……と、聞いてはいたが。これは酷いのう……まるで甲殻類じや」

妖狐の言つとおり、広場の中心で蠢いていた何かの姿は、どこか蟹……いや、鋏のデカイ海老の様にも見え。その体色は、やはり、先ほどの融合体同様、紫色の霧と同じ色をしていた。これは多分、融合する際に、周りの大気もある程度取り入れてしまうのが原因であろう。

「じゃがまあ取り合えずは、一度切り結んでみて……ツ！？」

妖狐が、余裕綽々といった様子で、肩に刀を担いだまま、相手へと歩を進めようとすると。突然、その甲殻類にしか見えない巨大な融合体の口元から、細く鋭いオレンジ色の発光体が発射された。瞬間

“ド、ド、ド、ド、ド、ド……”

もともとひび割れや、地盤沈下の酷かつた広場の地面を一直線に切り裂く様に。そのオレンジ色の発光体が、下から上へと振り上げられた……。

このオレンジ色の発光体が通り過ぎた箇所からは、老朽化してしまったコンクリートやアスファルトの地面が赤い熱を持つて、信じられないぐらいにドロドロに熔解していた。

しかし、そのオレンジ色の発光体を放たれた当の妖狐は、難無く回避に成功しており。既に近くにあつた、五階建ての建物の屋上に移動していた。

「ふむ……狙いを着けられるぐらいには。一応の思考は残っているようじやが……あれでは無差別と変わらんな。視界の中に入つた瞬間にぶつ放しあつた」

五階建ての建物の屋上から、甲殻類に似た融合体の右横の姿を観察する妖狐。

やはり、蟹といつよりは海老……それも、微妙に尻尾が細い事からザリガニに見えなくも無い、その姿は“どうすれば、この様な融合体が生まれるのか?”という疑問を見るものに持たせた。

『おい！ 何を勝手に交戦しているんだ！！ 聞いてるのか！？

フツン

待機と命令された時から、ここに向かつている間、ずっと偉そうに通信を入れてくる相手を一方的にあしらいつつ、妖狐は、どう倒すかの対策を練る事にした。

(一度切り結ぶにしても、相手の硬そうな表面に傷をつけられるのか？ それとも、微妙に存在している関節部分に狙いを絞るか？ いや、まだあるな。“五行妖術”の“火氣”で焼き殺したり、“土氣”の雷で感電死させたり……)

挙げれば切が無いのう……と、胸中で疲れた様に呟きを漏らす。

実際、目の前で広場の中央を陣取っている融合体は、妖狐の敵で

はない……しかし、融合体というのは、不確定な要素がいまだ強いために。さつきから顎で自分達を使っている上の連中が、妖狐の交戦を許そとしない。

何なのだ、この状況は、面倒にも程がある。

ある意味であり過ぎる選択肢に、妖狐は、今日何度も分からない溜息を、胸中で吐いた。

(……あ～もう面倒になつてきたのう。武器は氣に入つたが他が詰まらんのでは、面白くもなければ早く終わらそつといふ氣にもなれん)

最初の『早く帰りたい』といつ考へはどににいつたのか？

もはや、五階建ての建物の屋上で、胡坐すらかく始末……。

目の前では、いまだザリガニの様な融合体が、獲物を探そうと蠢いているが、一向に歩き出す気配が無い。どうやら、体に存在している六本の足は、まだ上手く動いてくれない……もしくは、融合する際に失敗して、動かなくなつてしまつたのかのどちらかだ。

張り詰めていた空気が、どんどんと緩んでいくのを妖狐が感じた

……その時だつた。

「うん？ この感じは……そうか、やつと降りてきたか」

言いながら、妖狐は上空に視線を向ける。

だが、上空の大気には、やはり紫色の霧がかかつていて……いや、突然、その霧が波紋を広げるようにして、円形に霧散していった、そして。

ドオン！――！

融合体の正面から、少しだけ離れた地点を中心にして、凄まじい衝撃波に似た突風が吹き荒れた。

視界の殆どを支配していた紫色の霧が、一気に霧散し、晴れ渡つていく。

その衝撃波に似た突風を生み出した地点を見てみれば、そこには、

先ほど妖狐が作り出したクレーターよりも、更に大きな蜘蛛の巣状にひびを入れたクレーターを作り出した男がしゃがんでいた。

あまりの出来事に、いまだ狙いをつけるぐらいの思考があつた融合体は驚いた様であつたが。すぐに本能の赴くまま。再び口元からオレンジ色の鋭い発光体を発射する。

— — — — —

「ドードードードー！！！」　と、下から上に振り上げられる発光体。しかし、それは上へと振り上げられる途中……空から落ちてきた男に衝突すると同時に、三股ぐらいに枝分かれして、周辺に破壊をばら撒いた。……が、当の命中した本人には、何の障害も見られない。

(相も変わらず、あの特性は便利じやのう。自分が普段身に纏つて
いる妖力に馴染んだ肉体が、それ以下の妖力による攻撃を弾くとは
……)

妖狐の言つとおり。空から落ちてきた男……童子は、甲殻類に似た融合体のオレンジ色の発光体を。まるで蛇口から出でくる水の様に弾きながら、ゆっくりと立ち上がり、歩を進めていく。

右前腕には、『R-01』で取り付けられた“パイルバンカー”

卷之二

「なんじや?」

すると、砲撃に似た攻撃を、いまだ何食わぬ顔で受け続けながら歩を進めている本人から。ノイズ交じりの通信が入った。

「余の心はあなたに。」

ちょっとした苦笑交じりに返すと、通信は何事もなかつたかの様に切られた……。

「本当に、滅茶苦茶な奴じやな、あやつは！」

その呆れたという聲音で発せられた呴きは、相手には届かない。

オレンジ色の発光体を肉体の真正面で受け止め続ける童子……しかし、感じるのは多少の衝撃と痛み、そして熱だけだ。また周りの老朽化したアスファルトやコンクリートおも溶かす、この攻撃を受け続けてなお、身に纏っているスーツや、右前腕に取り付いている武器には、一切の損傷は見られない。

これだけで、相当な高性能を誇っているのが頷けるのだが……それにしても、この蛇口から流れ出る水を、少しずつせき止めしていくような、この行進は、誰が見ても馬鹿げていると感じるであろう。ゆっくりと、一步ずつ目標へと近づいていく。

田標との距離が、残り10mを切ったのと同時に、田の前の甲殻類の口から、更なる威力と勢いを持つたオレンジ色の発光体が噴出す……が、結果は一切の変動が見えない。

ゆっくりと、また一步ずつ歩みを進めていく。

すると、田標が砲撃での攻撃を諦めたのか、急に口から出していたオレンジ色の発光体を収めた。

「つー？」

これまで前から来る衝撃に耐えるために、微妙な前傾姿勢で進んでいた童子が、突然前から衝撃が消えてしまったために、一瞬だけバランスを崩してしまつ。

そこに、目の前の甲殻類が、巨大な右の鍔を振り上げ、一直線に童子の頭上へと落下させる。

しかし……。

ドンッ！　短くも鈍い衝突音を周囲に響かせながら。その振り落とされた鍔は、童子空いている“左腕”一本によつて受け止められてしまった。

だが、受け止めた童子の左腕に手首の関節を圧迫される痛みや。下半身にまで内臓が降りたのではないかと錯覚するぐらいの重い衝撃を与え。踏みしめていた地面には、空から落下してきたとき同様。蜘蛛の巣状のひびを作りながら、ちょっとしたくぼみを作り出して

いた……両の足が、老朽化したコンクリートの地面にめり込む。

「なるほど……確かに融合体だ。妖力よりも、単純な力の方が強い

……」

グラグラと震わせながらも、確りと相手がこちらを押し潰そうとしている右の鍔を、鍛え上げられた左腕一本で押さえる童子…………しかし、地面にめり込ませていた両の足が、さらに周りのコンクリートをせり上げながら、深く沈んでいく。

流石に、これでは拙いと感じた童子は、ある行動に出る。上から来る圧力を押させていた左の掌から、今度は前腕の外側へと押さえる箇所を移動させる。すると、巨大な鍔が、更に童子の頭部へと迫る。

しかし、ここからが童子がやろうとしていた事であった。

「す……」

深く、体内に空気を取り込むために。鼻で空気を吸い込む…………。すると、童子の胸が、腹が、次第に一回りほど膨らみを持ち始めた。

そして、動きはまさに一瞬であつた。

「ふんッ！！」

これまで溜めていた空気を、一息で鼻から噴出すると。童子は左前腕の外側で押させていた相手の鍔を、自身から見て左の外側へと振り払うのと同時に。めり込ませていた左足から、右斜めへと踏み込み、そのままの勢いで、この状況を突破した。

童子に右の鍔を振り払われてしまつた事で、甲殻類に似た融合体は、右の鍔を標的よりも少し後ろ側の地面に振り落としてしまい、前のめりにバランスを崩した。

その大きな隙を、振り払うと同時に踏み込んだ童子が逃すはずは無かつた。

踏み込みの勢いで、突貫する速度も得られた童子は。巨大な相手の懷へと、一瞬で侵入すると。そのまま足の回転数を上げて、遂には融合体の腹の部分へと到達した。

同時に、右腕に取り付いた“パイルバンカー”を後ろへと振りかぶる……先端付近に存在する、四本の爪が、まるで蜘蛛の足が開いたかのように口を開ける。そして

「ふつ……」

ガーンツ！！

前進の勢いと、腰や肩甲骨を上手く使い、童子は“パイルバンカー”的先端を、融合体の腹に打ち付ける……瞬間、蜘蛛の足の様に開いていた四本の爪が、相手を放すまいと、融合体の硬い甲羅の様な腹に爪を突き立てる。たったこれだけで、相手の腹の甲殻にはひびが入つたが、この“パイルバンカー”的真価は、ここからであった。

「すまないな、これも“社会に貢献するための勤め”なんだ」

童子が、取り付いている“パイルバンカー”的内部で、右手に握られているストックを捻るように回転させる……刹那、内部で空砲（ブランク弾）に込められていた童子の妖力が爆発を起こし、その反動で、先端の穴から人の足ぐらいの太さがありそうな鋭い“杭”が、相手の腹の甲殻を打ち貫いた。

ガアアアアアン！！！　　と、これまで聞いた事も無いような重量感のある音と、硬い何かを、同じ硬いもので打ち碎いた轟音が、辺りに響き渡る。

そのあまりの威力に、融合体の腹の甲殻は粉々に砕け。突出された“杭”的威力の余波に、射線上にあつた他の部位も、貫かれるようになに“風穴を空けていった”。

「……」

童子にとつても驚くほどの反動を感じた“パイルバンカー”的“杭”が、何の問題も無かつたかのように元の場所へと戻る……すると、それに連動して、相手を固定するために突き立てていた爪が、ゆっくりと閉じ始めた。

一通りの待機状態へと戻ると、“パイルバンカー”的後ろにある排熱口から、余剰妖力も混じつた熱が、ものすごい勢いで吐き出され。外側に備え付けられていた排莢口エジエクション・ポートからは、バケツぐらいの大き

さの空薬莢が外へと吐き出された。同時に、次弾を装填する機械的な音が、童子の耳に入った。

しかし……すでに目の前の標的は、腹から真後ろにまで“風穴”を空けていて、とても再び動き出すとは思えなかつた。

「はあ……とんでもない威力じやのう」

頭に生えた耳を逆立てながら、五階建ての屋上で高みの見物を決め込んでいた妖狐は、あまりの非常識な威力に、驚嘆を覚えるしかなかつた。

確かに、あの武器が無くとも、童子は敵を一蹴できた……しかし、それにしたつて、作つた人間の頭を疑うレベルの威力であつた。

実際、あの“パイルバンカー”が真価を發揮した瞬間。童子の後ろでは紫色の霧が一瞬で吹き飛び、その威力を誇示するかのように、風穴を空けた先の建物にまで、“杭”を突出させた余波だけで、ちよつとした破壊をもたらしていた。

“杭”は出れば戻ると言つていた……ということは、インパクトの最大を迎える地点では、どれだけの衝撃がもたらされたのか想像すら出来ない。

「妖力を使うということは、あやつの馬鹿みたいな妖力も関係しているんじやろうが……まあ、考えても仕方が無いしの。これで帰れるというもののじや！」

もはや考えるのも馬鹿らしくなつてきたと感じた妖狐は、胡坐をかけていた体勢から立ち上がると、そのまま五階建ての屋上から、ゆつくりと飛び降りた。

その嬉しそうな表情には、もつ帰つた後の事しか考えていないといつた考えが見て取れた。

明日は学校……新しく第一学年に上がつて、初めて迎える授業の

曰。

いや顔にも、ちょっとした楽しみを『えてくれる、その事は。自然と、妖狐が童子の下へと向かつ足取りを軽くしていた。

プロローグ（後書き）

次回から本編です。

ちなみに、妖狐のイメージ絵です。

> i 2 9 2 3 0 — 2 3 7 9 <

それぞれの朝（前書き）

この小説に登場する全てのものはフィクションです、実際の人物・団体・事件等とは一切関係がありません。

それぞれの朝

まだ四円も初めといつた、月曜の早朝……。

おそらく、まだ外には新聞配達員が駆るカブのエンジン音と、野良の動物たちの鳴き声や「ゴリ」置き場を漁る音以外、何も聞こえてこないだらうと言つ時間……。

私、九尾妖狐くわいきつねは、月曜の早朝といつ、前日の休みの余韻に浸りながら、そろそろ朝の目覚めを迎えようとしている浅い眠りの時間帯に、出来るだけ瞼を閉じきつて、学校の準備をする時間、ギリギリまで眠りきつてやうと、無意識下のもと、密かに決意していた。

前日に丁寧にシーツや布団の温もりに包まれながら、ベットの上で寝返りをうつ……すると、私の体と布の生地から、朝の頭には少しだけ鬱陶しい衣擦れ音が聞こえた。

「うー……」

その鬱陶しい音に、つい、私はいやそつな瞼りをあげてしまつ……まずい、あまりにも浅い眠りだつたために、一生懸命に閉じていた瞼が開いてしまいそうだ。

私は、それを防ぐために、寝返りをうつたために横寝になつていた体を、すかさずベットにうつ伏せる形に移行した……ああ、胸の重みが消えていく。

しかし、そんな安心を得たのも束の間

ジリリリリ！……！

どこからか、けたたましく非常に耳に障る騒音が聞こえて来た。

田覚まし時計……そう当たりをつけた私は、とりあえず、横を見たら目の前にあつた“壁”を、なるべく壊さぬよう、絶妙な足加減を加えながら蹴飛ばした。

「ドン！」　　といつ“壁”を蹴飛ばす音と共に、田覚まし時計の音も鳴り続ける。

しばらくの様子見……だが、いまだ、どこからか聞こえてくる、といつより、壁を跨いだ向こう側から聞こえてくる田覚ましの音は、消える気配が無い。

すると新たに、壁の向こう側から“ダダダダダダダッ！！”といつ、よく映画などで聞ける、自動小銃による発砲音が連續して聞こえて来た。

これも、とてもうるさく、非常に耳に来る音なのが……初めに鳴った、田覚ましと同時に鳴らされると、もはや鈍器で破壊したくなるほどに鬱陶しい。

「…………」

私は、早朝の早い時間帯だといつのに、大声を出しながら、再び目の前にあつた壁を蹴飛ばす……すると、また新たに『I w i l l P · T · y o u a l l u n t i l y o u f u c k i n g d i e !』という、とてもじゃないが、和訳したくない程の下劣な英語の田覚ましが唸りを上げた……もつ、我慢の限界だ。

瞬間、私は床に着いていたベットから、布団を放り投げるようにして飛び起きながら、早朝の時間帯だといつのに、下の階に住む住人など気にしない、ズカズカというよりドカドカといつ、力の籠つた歩みで、部屋の窓扉を“バン！”と開けた……下手をすれば、ガラスが割れていたかもしれないが、その時はその時だ。この寮の管理人である“ぬらりひょん”的坊主にでも、請求すればいい。

ともかくにも、自分の部屋の窓扉を開けた私は、段差の下に置いてあつたサンダルに足を入れながらベランダに出た……同時に、寝起きの寝癖が目立つ、私の長髪を揺らしながら、ベランダの右に顔を向ける。

そこには、私の部屋のベランダと、隣りの部屋のベランダを仕切る、何とも現代的だが脆そうな、白い仕切りが存在していた。

それを見た私は、寝起きでまだ開ききれない眼つきを、鋭利なも

のへと変えながら

もともと、眼つきが悪いと言われるのだが

ベランダとベランダを仕切る壁に、ゆっくりと、静かに右の人差し指を当てた。

「邪魔ッ！！」

瞬間

私が苛立たしげに叫ぶと同時に、壁に当てていた右の人差し指の先っぽで、紅色とも見間違えるほど美しい、大量の“炎”が“爆発”した。

その炎が爆発した瞬間、辺りに暴風とも呼べる衝撃を生み出し、私の寝癖が目立つ長髪を後ろに吹かせ、洗濯物をかけるために吊るしてあつた竿竹がどこかに吹き飛び、窓ガラスは衝撃に揺れ“ピシ！”と嫌な音を発しながらひび割れを起こした……だがそれは、私側の被害状況で、爆発を発生させた向こう側の状況は、もつと悲惨だ。

先程まで、そこにあつた箸の現代的な仕切りは、周りに黒い炭を残しながら消し飛び。爆発の熱で黒くこげたコンクリートが、衝撃や熱が流れた方向を示すようにして、前方に広がっている……うむ、流石は私、今日も“五行妖術”的冴えはバツチリの様だ！！

多少汚れはしたが、風通しの良くなつたお隣さんのベランダに、私は遠慮などせずに入つていく。

そして、再び右を振り向くと、そこには先程の爆発で全てのガラスを吹き飛ばした窓扉が、無残にも存在していた……。

しかし、それでも尚、私にこの様な行動を決起させた目覚まし時計の騒音は鳴り止まない。

眉間に皺が寄るのを感じた……米神がピクピクと引き攣つたのを感じた。

ああ、私は今、本当に頭きてるのだ……。

現在の心境を再確認すると同時に、私は一気に、そのガラスが全て吹き飛んだ窓扉を開けた。

ガシャン！

と、脆い音を発しながら、ボロボロの窓扉は

開かれる。

そして、窓扉の向こう側……つまり、お隣さんの部屋へと踏み入つた私はまず、ある一点に向つて素早く歩を進めた。

ベランダは原型は残しているが、無残にも黒焦げになり、外と中を仕切るはずの窓扉も、もはや役割をなせない姿となつてしまつた……。

そして、部屋の中にも、吹き飛んだ窓ガラスの破片が散らばり、一種の襲撃を受けた情景をなしていた……だが、それでも尚、部屋の所々に置いてある目覚まし時計は、騒がしくなり続ける。

しかし、そんな状況下になつていたとしても、この部屋の主は、窓際と壁の角に設置されたベットで布団に包まつたまま、起きる気配を見せない。

とんでもなく神経が図太い人物なのだらつ。

「毎度毎度……」

すると、そこに、寝巻きを着崩した、寝起き姿の女性といつ欲情的な格好をした九尾妖狐が、長い髪で俯かせた顔を隠しながら近づいて來た。

しかし、妖狐は部屋の主の枕元に立つ前に、先程から「うるさい」といふるさいのだ!!」この糞時計どもがッ!!」
部屋の目覚まし時計たちに“キツ!!”という鋭い視線を向けた瞬間。

同時に、妖狐の足元を中心として、部屋の床全体に、枝分かれした無数の紫電が走つた。

その紫電に目覚まし時計たちが接触すると、デジタル表記の時計はデジタルの画面を吹き飛ばし、針時計は、中から黒い嫌な煙を漏らしながら、目覚ましの機能を停止させた。

すると、とたんに静かになる、お隣さんの部屋……しかし、中は既に滅茶苦茶である。

妖狐は、その様子を不機嫌そうに一瞥すると、再び、この部屋の主である、ベットの布団に包まっている男に視線を落とした。

「たく……隣りに住んでるだけだというのに、どうしてこいつ、毎朝起こしに来なくてはならんのだ」

面倒臭そうに、朝の白光を反射する、きめ細かな金髪の前髪をかきあげる妖狐……すると、そこから白面と言つても過言ではないほどに白い肌をした、細く整つた顔立ちが露となつた。

細く、それでいて優美な曲線を描いた眉毛に、少しだけ吊り上つた、切れ長の美しい瞳、口元は不機嫌そうに“への字”に今はなつているが、普段は可愛らしく、少しだけ膨れた唇が印象的な口をしている。スタイルはモデルを思わせる、スマートなラインを誇つているが、着崩れた寝巻きから見える胸元は、ウエストと比較すると、とても大きな部類に入り、形も美乳といつても差し支えない理想的な造型をしている。そして、腰の位置は高く、足もスラリと長い……更に言えば身長は175cmと、非の打ち所が無い、まさに完璧と言つて違わない容姿をしている。

そんな完璧な容姿をした妖子に、不機嫌そうに見下ろされている人物はと言つと……。

「ええい！ 起きぬか、この馬鹿者！！」

妖狐が、見下ろしていた人物が包まっていた青いシーツの掛け布団を、勢いよくひっぺがした。

そしてそのまま、ひっぺがした布団を、後ろへと投げ捨てる。

「走るのだろう！？ だから、朝早くから、こんな大量の目覚まし時計を用意したのだろう！？ 起きろ！」

掛け布団が無くなり、その体が露となつた人物を、妖狐はユサユサと揺する。

どうでもよいが、相手を揺するたびに揺れる妖狐の胸が、妙に艶めかしい……これは多分、寝る時にブラを着けなかつたのだろう。

「う、うう……」

「ほれ、起きろ！ 木偶の坊！！ 起きろ！」

しかし、どんなに妖狐が、その厚く彫刻を思わせるような相手の胸を揺すつたとしても、一向に起きる気配がない……このとき、妖狐は心底面倒くさいと感じた。

故に

「いい加減に起きろ、この馬鹿“鬼”……」

瞬間、妖狐が地面につけていた足から、相手の胸に置いていた両手にかけて、瞬く紫電が走る。

バリバリバリ！　　という、無数の破裂音が、今まで起きてこなかつた相手の人物を中心に響き渡つた。

土氣という五行の要素のうちの一つを使つた、地熱のエネルギーを紫電という電力に変換させた、軽い“五行妖術”なのだが、明らかに、その紫電の光量は、人が直接浴びせられて良いものではなかつた。証拠に、無数の紫電を浴びせられているベットのシーツやマットなどが、化学繊維を燃やしたときの煙を発生させながら、その焦げ目を広げていた……が。

「ぐぬぬぬぬッ！…！」

「……」

「のおおおおりやあ……」

「……」

どんなに妖狐が歯を食いしばつても、気合の叫びを上げ、紫電の威力を上げたとしても。

ベットで寝ている、筋肉の鎧とでも表すよつな、屈強な肉体をした男を起こすことはできない……。

次第に、妖狐が発生させる紫電の量が、どんどんと減つていき……。

「ハア……ハア……クソつたれめ

仕舞いには、額に汗を浮かべながら、妖狐は息を切らせてしまつた……。

既に、この部屋には様々な物が焼け焦げた臭いと、そこから発生した黒い煙が充満していた……が、それでも男は、起きる気配を見

せない。

「無駄に打たれ強い肉体をしおつてからに……」

言いながら、妖狐が、そのガラス細工の様にきめ細かな長い金髪を、ベットで寝ている男にしなだれかける……。というより、完全に朝一番の寝起きで全力を出したせいか、疲れたように、額を前かがみで、寝ている男の胸板に預けた。

すると、今まで寝ていた男に変化が起きた……。

「う……あ？ ああ、妖狐か……おはよう」

なんと、これまで、大量の目覚まし時計や。

ハートマン軍曹のありがたい『I will P·T· you all until you fucking die!』のお言葉。

さらには、妖狐の“五行妖術”ですら目を覚まさなかつた男が、言葉を発したではないか。

その様子に、額を男の胸元に預けていた妖狐は、顔を赤くするのではなく。

「毎度毎度、どれだけ寝起きが悪いのだ！！ おぬしは……」
再び、大量の紫電と共に、寝起きの男の視界が、真っ白に染まつた……。

もはや迫撃砲をぶち込まれたのか？

室内で爆薬でも使つたのかと思うくらいに、荒れかえつている浴室の惨状に、男は特に反応を見せず。

寝起きから、すぐにトイレに行き、早朝のロードワークへと出かけるため。ランニング用のTシャツに、軽い素材を使った短パンに着替えた男は、男の体格には、いささか狭い玄関で、陸上用の軽量化されたシューーズを履きながら、わざわざ朝早くから起こしに来てくれた妖狐に振り返った。

「じゃあ、行つて来る」

「おお、途中で一度寝をかますでないぞ？」

おやうく、寝るときに下着は着けない派の、パジャマ姿の妖狐は。シユーズの靴紐を結び終え、厚い鉄製の扉のドアノブに手をかけた男に、面倒くさげに“ いらっしゃい ” の言葉をかけた。

男は、そのまま妖狐から振り返り、ドアノブを開け、寮の廊下へと出て行つた。

その様子を見送った妖狐は、自身が荒らじに荒らした男の自室を、あぐびをしながら歩きつつ、台所の近くの台に設置されていた、部屋の電話の子機を手に取つた。

そして、手馴れた手つきで、頭に記憶されていた番号を押す……。番号を押し終わると、妖狐は、子機に耳を当てながら、ホールの音を、眠そうな瞳のまま聞き続けた。

しばらぐすると、向こうが電話に出た。

『 もしもし？ どうしましたか、こんな朝早くから…………』

「 ねりひょんか？ すまぬな、朝早くから。とりあえず、 “ 今日も ” 賴むだ 』

子機から聞こえてきた、相手方の声は、どこか、少年のようなあどけなさを感じさせながらも、それでいて、朝早くといふことで、眠そうな声であつた。

妖狐は、そんな相手のコンディションなど気にするのも億劫といった様に、一方的に相手に向けて言いつける。

『 またですか……これで何度目ですか？ 』

「 うるさい。寮長とは名ばかりで、碌に仕事をせん貴様に、私が自ら仕事を与えてやつているのだぞ？ 感謝しきれ、咎められる覚えは無いわ 』

『 別に咎めてませんよ。ただ、新学期が始まつて、部屋が隣同士になつた日から、もう四日連続ですよ？ 每朝、所要する妖力を半分くらい使わされる身にもなつてくださいよ 』

「 知らん。だいたい、貴様が部屋割りをしたのである？ だつた

ら、貴様が最後まで面倒を見ぬか」

『童子さんの隣になりたいって「コネたのは、妖狐さんじゃないです
か……』

「私は「コネてなどいない！！ むしろ、皆のために思つて、あやつ
の隣になつてやつただけだ！！」

『はいはい……はあ～。これは本氣で、もう一度部屋割りを考えな
いと黙目かなあ』

「な、何を言つておるか！！ 私以外の者が、あやつの隣で住むこ
とになつてみろ！！ あやつが夜な夜な無意識に発する大量の妖気
に当たられて、最悪死人が出るのだぞ！？」

『そんな事を言つたら、上の階や下の階の人だつて、も「う」臨終し
てますよ……けど、してないでしょ？ 見苦しい嘘を付くのはやめ
て下さい。“三大妖怪”と呼ばれた、“先祖様の名が泣きますよ？』
「嘘ではない！！ あやつの……』

これまで高厚的な態度を取つてきた妖狐であつたが、ぬらりひよ
んと呼んだ、寮長の呆れた物言いに、どこか、その少しだけ吊り上
つた、切れ長の美しい目を焦つた様に見開かせながら、更なる言い
訳を発しようとするが……。

「妖気に長いこと晒されでは……うん？」

妖狐が耳に当てていた子機から、向こうの相手が通話を一方的に
切つたときの、寂しいというより虚しい電子音が聞こえてきた……。
しだいに、妖狐の肩が、わなわなと震え始める……。

顔を見れば、その白く艶やかな眉間に皺を寄せ、口からは、妖狐
の体内からもれ出る妖気が、青い炎となつて不気味に揺らめいてい
た。

「なんなのだ……今の会話は」

言いながら、明らかに怒の感情を露にさせている妖狐が、持つて
いた子機を、再び五行妖術の土気を用いた電気でショートさせる…
・嫌な臭いがする煙が、子機の隙間から漏れ出てくる。

「まるで、この私が、あの馬鹿“鬼”から離れたくない、ダダを

捏ねているかのよつた、情けない感じだつたではないか……」

すると今度は、妖狐の女性にしては長身の体から、無数の紫電が発生し始めた……そして。

「あのぬらりひょんのクソ坊主がああああ……！」

実は寝起きの際には不機嫌真っ盛りな妖狐が、理不尽な怒りの怒声をあげながら。再び、先ほど朝のロードワークへと出かけた男の部屋を、無数の紫電で滅茶苦茶にし始めた……。

その時、寮長室で、軽く寝なおそうと考えていた、明らかに、まだ青年にまで達していない体系の男の子“ぬらりひょん”は「ああ、また、これで僕の一日は決定するのか……」と、再び包まつた布団の中で、深いため息を吐くのであつた……。

春真っ盛りの、暖かく気持ちの良い朝……。

ここは、とある引越し準備を整え、荷物を梱包し終えたダンボールの山が築かれた、寝具以外、何もない部屋……。

カーテンを取り外された窓からは、床のフローリングに、快晴の朝の日差しが差し込んでいた。

既に、この部屋で唯一置かれた、寝具であるベットの布団には、これまで睡眠を取っていた部屋の主の姿は無い。なぜなら、部屋の主は、寝具であるベットからずり落ち、犬畜生よろしくの床寝を決め込んでいたからだ……心なしか、床が固いせいでの、寝顔が気持ち良さそうではない。

すると、このダンボールの山が築かれた部屋に、何者かが扉を開けて、ズカズカと入り込んできた。

突然の侵入者……その姿は、線の細い体に、着物と割烹着を身に纏つた、どこか、儚げな雰囲気を醸し出す女性。手には、凶器なんか……フライパンとオタマという、いかにも、これから何かをするといった装備を所有していた。

侵入者である女性が、その着物からでも分かるぐらじに“無い胸”を反らし、長くも纖細そうな黒髪を揺らしながら、ゆっくりと息を吸い込み始めた……そして。

「朝ですよー！ー！ー！ 起きなさいー！ー！」

ガンガンガンガン！ー！ー！ と、持つてゐるフライパンとオタマを叩きまくる侵入者ー

その突如、睡眠中の耳を襲つた騒音に。これまでベットがあるにも関わらず、床に身をあずけ、睡眠を取つていた部屋の主が「ぐ、空襲ですかー！？」と、時代錯誤も良いところの台詞を吐きながら、飛び上がるよう跳ね起きた。

「お、お母さんー！ 敵はどこですかー！？」

跳ね起きた部屋の主は、あたふたと周囲を忙しなく周囲を見回しながら、その乱れた浴衣を更に乱れさせていく……。

この朝一番の様子に、フライパンをオタマで殴りつけていた、線の細い女性は「はあー」と深く、それでいて呆れたようなため息を漏らす……。

「敵などいません。いふとしたら、年頃である“筈”的娘が、恥も何もへつたくれもない姿を晒すのを見て、呆れている母親だけです」

「……へ？」

言われて、年頃である“筈”的娘が、自身の姿を確認するために、視線を下に降ろすと……。

「ツー？」

顔を真っ赤にして、肌蹴たせいで、胸が丸見えになつていた浴衣の胸元を正した。

「そこだけではないわよ？ ほり、下なんてもう隠すべきないでしょ？」

さりに、年頃である“筈”的娘は、浴衣の上前と下前が完全に“後ろ”へと流れている事に気づき、急いで、それを正した。

「帶なんて、ほり

年頃である“筈”的娘の母は、むちむちベッドの方に、持つてゐた

オタマの先を向けた。

そこには、本来なら部屋の主が占領している筈であったベットが、もはや脱ぎ捨てられていた席に占領されている光景があった。

それも、年頃である“篠”の娘が、急いで回収し、正した浴衣に締めていく。

「も、もう無いよね？」

朝一番から置み掛けの、様々な事を指摘された、年頃である“篠”的娘は、心配そうな上田遣いで、母である女性に問うた。

「別に無いけど……とつあえず、速く顔を洗ってきなさい。そうしたら、すぐに朝！」はんを皆で食べるから、急ぎなさい」

「は、はい！」

「返事は確りー。」

「はーー！」

「よろしい……じゃあ急ぎなさいな。皆、アナタ待ちなのよ、鏡花」
急げと、自身の母に促された鏡花こと、阿倍鏡花は、正したばかりの浴衣と、寝癖だらけの、母と同じ黒髪を揺らしながら、ダンボールの山が築かれている部屋を出て行った。

「本当に、あの娘を修行にやつて、大丈夫なのかしら……？」

鏡花の母 安部春花は、扉の向こうの廊下から聞こえてくる、娘の騒がしい足音に、恥ましい仕草で、頬にオタマを持った方の手を当てながら、本当に不安そうな咳きを漏らした。

「うわー……ひどい顔。

私の家で、父の修行を受ける者が共同で使っている洗面台とは違
う。

私やお母さんが使つ、真っ白な汚れ一つ無い洗面台の前で、自分の寝起き顔に、思わずうなづれるような気分に陥ってしまう。

だつて、花も恥らう年頃の娘が、日脂や寝癖を盛大にアピールさせた、何の可愛げも無い寝起き顔を晒しているんだもの……うな垂れても、仕方の無いことだと思うんだ。

「どうしてこう……私って、寝相が悪いのかな？」

口から自分に対しての愚痴を零しながら、私は急いで、洗面台の棚からドライヤーや櫛を取り出し、ひどい寝癖を直していく……。

私の髪は、本来なら真っ直ぐな長い黒髪なのだけど……ああ、寝癖が全然治らない。

いくらドライヤーや櫛で、荒れに荒れた寝癖を梳いたとしても、再びヒヨコッと、髪の毛が跳ねてしまう……もう時間が無いのに！ そう考えた私は、「こうなつたら、朝シャンでも浴びようかな」と、時間に縛られない、大胆な決断をした

……。

……。

……。

……。

……。

……。

結論から言えば、気持ちよかつたです
朝一番のお湯つて、どうして、こうも人の体を覚まし、癒してくれるのでしょうか……。

ポカポカと湯上りの陽気に、暖かい気持ちになりながらも、私はすぐに、当初の目的であった、寝癖直しに取り掛かった。
ふふふ、こうなつてしまつては、あれだけ手強かつた寝癖も、私の敵ではありません。

ドライヤーのモーター音と共に、濡れた髪の毛を乾かし、櫛で梳いていく……。

別に、習慣づいたことなので、難しい事ではありません。
よし、いつも通りの出来に仕上がったぞ！

前髪は、私の眉毛辺りで、綺麗に切り揃えられ、唯一の自慢でもある、真っ直ぐに流れる、長い黒髪も、至つて綺麗にセットされてある。友達から、ハツキリとした綺麗な丸い目だねと言われた通り、

あれだけ眠そうだった目も、今はちゃんと見開かれてるし。

これなら、安部家の一人娘としてだけではなく、ようやく修行に出る一人の“見習い陰陽師”として皆の前に出ても恥ずかしくは無いね。

寝起き姿のだらしない格好を、確りと直した私は。意気揚々と、これまで寝癖を直すためにいた、風呂場の脱衣所から出ようとすると……。

引き戸の扉前まで近づくと、モザイクガラスの向こう側から、誰かの影が、引き戸を開こうとする仕草を見せていた。

すると、その影が、ガラガラと引き戸を、ノックも何も無しに開いた。

そこに現れたのは、私を、そのまま大人まで成長させたかのよくな人物。

お母さんであった。

「ごめん、お母さん。もう、準備できたから、今すぐ行くよー。」

「待ちなさい」

「へ？」

お母さんのすぐ隣を、私が通り抜けようとすると。

お母さんが、私の手を掴み、皆が待つ食堂へと行くのを静止した。そして、手を掴んだまま、私と向き合ひ、しばらくの間、じつと、真剣な表情で見つめられる。

「よし、確り寝癖も、だらしない顔も直したみたいね」

「お母さん心配しそぎ！ 私だって、もう修行に出ていいって、お父さんに許しを貰つぐらいに成長したんだよ。あまり子ども扱いしないでよ！」

本当に失礼つたらありやしない。

私だって、もう背も150後半にまで成長したし、一人でラーメン屋にだって入れるぐらいに、“大人の女性”になったのに……この扱いは無いよ！

「別に、子ども扱いはしてないわよ……。でも、アナタは変なとこ

ろで、色々抜けてるからね～

「も～酷いよ～……」

「腐らない腐らない。とにかく、食堂に行きましょ。皆、もうお腹が空いて、我慢の限界に来てるかもしれないから」

「は～い」

何か微笑ましそうに、私のことを見る、お母さんの曰く、「あ、これ分かってくれてない」と、私は内心で察した。

あ～あ……どうしてもう、お母さんは私のことナビも扱こするんだろう？

自分だって、胸が小さくせに……む、胸が小さくせに。
ははは……思いのほか、自分にもグサッとくる言葉だよね、これ。

我が家の中食堂は、まるでお寺の住職たちが、集団で食事を取るような、純和風の置が敷き詰められたお座敷だ。

そこに私は、これもお寺の様な廊下から、襖を開けて入っていく。

「おはよひ、お父さん。皆も、待たせて」「メンね」

「早く自分の場所に座りなさい、鏡花。お前のせいで、皆の朝食を遅らせてしまつていいのだからな」

「は～い」

“食堂”と呼ばれる、皆が集まっている座敷へと入ってきた私に、いきなり「機嫌斜めの声をかけてきたのは、威厳たっぷりの顔をした、まだ40代だというのに皺が目立ち始めている、私のお父さん、^{あべのだいきよひ}
^{あべのせいめい}安部大鏡。

私のお父さんは、この日本に数多く存在する、陰陽師の長で、かの有名な安部朝明の直系の子孫だと言われている……というより、国にも、そう認められているので、まず間違いない。ただ、何代目かは、いまだ不明だということらしい……理由は、どうやら文献などの記録が、あまりにも古すぎて、読み取れなくなっていたためと

が、家系図 자체、すでに、この世には無くなっていたからだ。そうなら、なぜ直系の子孫だと認定されたのかというと、どうやら、その血に混じつた“神通力”や“靈力”が、高祖父の代の頃に測つたところ。大昔に、お父さんや私のご先祖様である、安部朝明が修行したといわれる、安部文殊院から測定されたものと、一致したからだと言うからだ。

更にいえば、その時代……世界中の人間と“妖怪”が、自分達の生存のために争い、その後おどされた、世界の危機のために立ち上がり、協力した時代に、最強の陰陽師として、高祖父が名を馳せていたのが、最後の決め手となつたのだという。また、陰陽師にも、様々な家が存在するが、現在の代でも、阿部家のお父さんが、全てにおいて最強らしい。

だけど……。

「なんだ鏡花？ そんな、お父さんを残念な眼で見る前に、早く席に着いたらどうだ？」

「この、どうみても、その辺の休日中のオッサンみたいな格好をした、40代の男が、当代最強の陰陽師だとは思えないんだよな～白い無地のTシャツに、着古された甚平つて、絶対、娘に好かれる気ゼロでしょ。

「別に、何でもないよ」

でも、それでも当代最強と謳われる陰陽師で、現代の陰陽師たちを束ねる長なのだ……ついでに、私の父親もある。

この食堂に集まっている修行中の方々には、仏様にでも見えているんだろうな～……陰陽道つて、仏教とか儒教は関係ないんだけどね？

心の籠つていらない返事を返しながらも、私は、上座に座る、お父さんと、まだ来てないお母さんの席を曲がつた、修行中の方々の中でも上座に最も近い席に正座で座つた。

ふう～ようやく朝～はんだよ。

メニューは～飯に鮭にワカメと豆腐の味噌汁……そして、三枚の

海苔だ。

あ～、私も、洋風なスクランブルエッグとかで朝を迎えられるようになりたいな。

私が、毎日ヘルシーにも程がある、朝の献立にがっかりしていると、着物に割烹着を着けたままのお母さんが、この食堂に入ってきた。

「お待たせしました、お父さん」

「おお、ようやく来たか春花。ほれ、早く隣に座りなさい」「ふふふ、お弟子さんの前でしょ？ そんな嬉しそうにハシャガないの」

言葉とは裏腹に、高校生の娘をもつ一児の母とは思えない、若い微笑みを見せるお母さん。

それを見て、更に嬉しそうに、鼻の下を伸ばすお父さん。

娘として、両親が仲が良いのは嬉しいことなのだけれど……正直、毎日見せられると、鬱陶しいにも程がある。

それにほり、他の弟子の人たちも、若干『またかよ、くわ……』『みたいな顔で、苛立ちを見せてるし。迷惑だよね、本当に』

「では、皆、席に着いたようだし、朝食にするとしようか」

お母さんが、所作の正しい正座で、自分の作った朝ごはんの前に座ると、お父さんが、朝食を始める言葉を発した。

我が家家の食事は、本当に静かだ……。
もう、静かとしか言いようがないので、その辺は語ることもありません。

ですが、朝食を負え、皆が片付けに入っている最中、私は、お父さんに呼び止められてしましました。

「鏡花よ、少し待て」

「え、なに？」

自分が使つた食器類を纏めて、お母さんが中心にまわしていく、調理場の方へと行こうとしていた私に、お父さんは胡坐をかき、背を向けたままの姿勢で、真剣な声音で言葉を続けた。

「お前は、確かに“神通力”や“靈力”だけを見れば、私以上の素質を持つている」

「ふふん それはどういたしまして！」

「威張るな！ それ以外は、その辺のひよっこにも劣るくせに…」「な！ それは言わないでよ！ 私だって、努力してるんだから…！」

「努力していたとしても、占いの一つも出来ない陰陽師など、聞いた事も無いぞ！」

「う、占いなんか、現代に必要ないじゃない！」

「馬鹿もの！ 基本中の基本だらうが！ これくらいの事は、150年前の、インチキと呼ばれていた陰陽師たちでも出来たことだぞ！」

「うぐつ……！」

それを言われてしまつと、何も言い返せない……。

今の“妖怪”や西洋の“妖魔”たちが、ただの怪談話や、都市伝説の類と認識されてしまつっていた時代……私達人間が、科学では証明できない事を、頑なにつきんぐさいやり、合成写真やらと馬鹿にしていた時代。もう、今から150年も前の話なんだけど、確かに、その時代にも、小さくはあるが、陰陽師の組織は、細々と存在していた。

その時の話は、歴史の勉強とかで習つてたけど。

今の時代から考えると、信じられないぐらいに、陰陽師や靈能力者・超能力者などといった存在が、インチキに捉えられていたそう

な。

そんな時代の、国すらも認めていなかつた陰陽師たちでも、占いは出来ていたらしい。

なのに、陰陽師が国からも認められ、一端の“戦力”や“財産”

と捉えられている時代に生きる私が、占いなどといった、基本中の基本も出来ないというのは、一言でいえば“落ちこぼれ”なのだ。

「それだと言うのに、お前という奴は……自分の力の強さに溺れて、他の修行者たちと比べ、基本的な技術に対しての認識が甘すぎる！」「で、でも！ 火をバババーンて起こしたり！ 水をドバババーンて出したりするのは、私、他の人たちにも負けてないもん！」

これは、“落ちこぼれ”的私にとって、唯一の誇れる所なのだ。

“神通力”というのは、修行する事で、後天的に力を強くしていくもので、先ほど関係ないといった、仏教にある神秘的な力の事を指すらしいのだけれど……昨今の世の中では、陰陽師たちが“妖怪”たちと争っていた時に改良を加えていつたお陰で、かなり認識が変わった力のことなんだけど。六通神？ だつけ？ それが、確かにこう……色々種類があつて、超能力の様な現象とは違つた……“ごめんなさい、座学を確りと受けていなかつた私には、説明が出来ません。ただ、私に分かるのは、空をビューンて飛んだり、速く動いたり、相手の心を読んだりする能力つてだけです……うう、ごめんなさい。

そして、靈力っていうのは、“妖怪”にとっての“妖氣”や“妖力”と同じ、先天的にある、不思議な力の事で。これが大きければ大きいほど、神通力で使う能力の凄さが上がつたり、陰陽師の技術で使う技の範囲や強さ、効果が上がつたりするんだ。

この二つの能力が、私はもともと、生まれたときから強かつたみたい。

えへへ、つまり私は“落ちこぼれ”であると同時に“天才！”といふわけ……「確り制御できなければ、ただの宝の持ち腐れだ！」

「うぐ……」

この会話一度目の、それを言わると反論が出来ない……。

そう、そうなのだ……私の力は、確かに他の人に比べて“べらぼー”に強い。

だけど、力を一箇所に集束させたり、絶妙な力加減で、一箇所だ

けに力を加えるなどといった、繊細な事が出来ないのだ。

「全く……お前は、全然、今までの自分といつもの振り返つてこなかつたのだな」

「だ、だつて。なぜか私、力を制御しようとすると、変に力が入っちゃつて……」

「それは集中力が足らんからだ。お前は昔から、座禅すらもまともに出来なかつたからな」

「それは言いすぎだよ！ 私だつて、座禅“は”出来てたもん」「ふん、だが“は”だろ？ 何を言われても、本来なら言い訳など出来る立場ではないんだぞ？」

「……はい」

シヨンとする私……。

ああ、どうして私は、「う、色々抜けてるんだろう……。

お母さんは、私のことを変なところで抜けてるって言つてたけど、あれは確実に、我が子蠶殻の目線だ。

纏めた食器を手に持ちながら、落ち込んでいる私に。

相変わらず、胡坐をかき、背を向けたままのお父さんが、改めて真剣な声音で話し始めた。

「だがなあ、お前も、今日から修行のために、“妖怪たちの学園”に通わなくてはならない」

「うん、それは楽しみだよ！ 『近所以外の妖怪の人たちと触れ合うなんて、私にとっては初めての経験だから！』

「まあ、確かに、今の世の中の若者は皆、お前と同じ認識かもしれんがな」

「え、何が言いたいの？」

「お前は確かに、何も考へないで戦えば強い。それは認める……だがな、これがもし、何らかのトラブルで妖怪たちと戦う様であれば、お前は確實に苦戦する。更に相手が悪ければ、ただの“餌”にしかならん。また更に言えば、“鬼”からしたら、お前は格好の獲物だ」

「そこまで言わなくても……」

「これは事実だ。私も昔、あの学園で修行をしたが、何度も死に掛けたか……思い出そうとしても、多すぎて思い出せぬぐらいいだ」

「言ひすぎつて事は？」

「ない。確かに、今の世の中は妖怪も人間も、争いという争いをしようともしないし、差別もしない。むしろ、楽しんで共存しているぐらいだ……だがな、それは社会の眼があるからというのも、また事実。しかし、あの学園には、世界中の妖怪や妖魔が集まっていて、更に言えば、まだ、社会というものを理解していない若者たちもいる」

お父さんの言つていることは、本当のことだ。

現代社会、人間と妖怪は、比較的友好関係の中で生活している……それはもう、近所に妖怪の方が住んでますというぐらいに。

だけど、そんな社会に出ていたる妖怪たちは、学園で社会に出ていいと許可された方たちだけなのだ。

つまり、これから私が通うことになる学園は、妖怪たちに社会のルールを教える場所でもあるのだ。

「妖怪や妖魔は、お前のような高い靈力や神通力を持つた者を喰らうと、自身の力を増すことが出来る……今でこそ、そんな残忍な事は行われなくなつたが。お前が生まれる前は、週に一回は、人間同士の殺人の様に事件になつっていたのだ。当時ほど危険ではなくなつたが、そんな中に、お前は行くのだぞ？　一年は遅れているが」
真面目な、本当に真面目な話をしている最中に、このオッサンは、人の痛いところを的確に突きやがつた……もう、別に、仕方ないから遅らせただけなんだもん！

ただ、靈力や神通力以外の項目があまりにも低すぎて、修行を始められなかつただけなんだもん！

はは……私が悪いよね、うん。

だけど、私にも、お父さんには言いたい事がある。

「でも、今は、そんな悪い人はいないんでしょ？　だつたら、普通

に学園生活を満喫するだけで良いじゃん

「ふん……お前は馬鹿だな」

酷い！

“馬鹿か？”とかじやなくて、実の娘に向かつて、この親は馬鹿だなど、やんわりと断定した！

「何でよ！ 時代が違うんだから、お父さんが考えている様な人なんて、少数かいなかのどっちかだよ！」

「その少数が、お前を狙つたらどうする？ お前は、自分で自分の身を守れるというのか？ もし、相手が、大妖の息子だつたり娘だつたりすれば、お前など、一瞬で食い殺される」

「こ、怖いこと言わないでよ……不安になっちゃうじゃない」

「私は、それほど、お前が心配なんだ。眞面目に基礎に取り組んでいれば、これほど心配しなくても済んだ筈なのだ……だが、それを

お前は

「あ～もつこい！ 聞き飽きたよ、その言葉は！ とにかく、満喫するのは良いけど、しっかりと警戒だけはしておけって事でしょ！？」 そんなこと、私にだつて出来るもん！

「あ、待て！ 話は終わってないぞ！」

いつまでも、うだうだと同じ様な事を言われるのは、堪つたものじゃない……。

もう頭にきてしまった私は、お父さんとの会話を強引に切り上げて、そそくさと持つっていた食器を片付け、新しい学び舎へと登校するための仕度に向かつた。

だけど、もし、このお父さんとの会話を、もっと眞面目に私が聞けていたら……。

この後に待つていた、私の学園生活が、もう少し良いくものに変わっていたのかもしれない。

「はあ～ッ！ なぜ、私が、おぬしの馬鹿に巻き込まれなくてはならんのだ！」

「すまない……だが、お婆さんが、重い荷物を背負っていたんだ。

可能な限り持つてあげるのが、俺たち若者の……」

「“たち”を付けるな！ それで遅刻しそうになるのなら、おぬしだけでやっていればいい！」

「すまない……しかし、あの方々は、今の時代を築いてくれた、いわば“恩人”……」

「ええい！ おぬしの恩返し癖は知っているが、今は、そんな無駄話などせず、走ることに集中しろ！」

「すまない」

「こいつは、本当に……。

今、私こと九尾妖狐くお ようごと、隣を走る酒天童子しゅてん どうじは、絶賛遅刻寸前のチキンレースを慣行中だ。

原因は、隣を走る、この無駄に体がデカく厳つい木偶の坊、または“馬鹿鬼”にある。

私たちは、先ほどまで、いつも通り、かなり時間に余裕を持つて、学園まで登校している途中だった。

だが、こやつが、偶然、歩道橋を登れないでいる、重い荷物を風呂敷に包んで背負っている婆を見つけての……“大丈夫ですか？ よければ、俺が持ちます”とか抜かして、無駄な敬老精神を發揮しあつたのだ。

こやつには、昔から変な癖があつての。

一度、自分が恩を感じた相手には、全力で恩返しをするという、“鬼”にあるまじき癖があるのだ。

そのせいで、結局こやつは婆の家まで、その“婆”と“運んでい

つたという訳だ。

結果は、この通り。

せつかく、かなりの時間の余裕を持つて出たはずなのに、遅刻寸前の緊張感を味わうといった感じだ。

「本当にぬしわ！ ビーリヒに、後先のことを考えられんのだ！」
「すまない」

先ほどから、すまないの一点張りの童子に、私は悪態をつきながら、学園まで続く、道路道を走っていく。

くそ……」こういう時に、妖術や妖力を使えれば、こんな無駄に体力を使う行為など、せんで済むのに！

国家権力め……何が、有事の時以外、指定された場所以外での妖力や靈力の使用を禁ずるだ！

そんな事を、心の中で吐き捨てながら、私と童子は、なかなかに都市開発の進んだ街から、少し人里離れた様な、山道へと入っていく。まあ、山道といつても、ちゃんと舗装された道路もあるし、ゆるやかな坂を作り出すために、かの有名な“いろは坂”的に曲りくねっているのだが。

「ええい！ なぜ、こんな面倒な道を作ったのだ！」

「仕方ないだろ。当時の人たちが、自分達の生活を……」

「うるさい黙つて走つておれ！ はあ……これでは、時間に間に合わんではないか！」

曲りくねった坂道を、私と童子は馬鹿正直に走り続ける……。

確かに、私たち“妖怪”……いや、私と童子は、妖怪と人間の“混血”なのだが、それでも、普通の人間よりも強靭な肉体を有している。

証拠に、先ほどから、私達が走つているスピードは、オリンピックの短距離走での世界記録を軽く超えるスピードだ……おそらく、100mの直線の道なら、5秒とかからず走りぬいて見せるのだが。いかんせん、ついうつかり妖力を使ってしまつと、公僕の連中が出てくるので、これ以上のスピードは出せぬのだ。

更に言えば、この加速じづらご道のり……ああ、これは遅刻確定かのう。

そんな風に、私が内面だけではなく、外見からも落ち込んだ雰囲気を醸し出していると……。

「どうした妖狐？ そんな暗い顔をして……」

「おぬしのせいだらうが！ 遅刻をしたら、反省文を書かなくてはならんのだぞ！？ それも原稿用紙一枚分！」

「すまない……」

「謝るぐらいなら、この状況をなんとかしてみせろー。誰のせいで、こんな急がなくてはならなくなつたのだ！」

私が半ば、当然のハツ当たりを童子に浴びせていると。

突然、こやつのいつもは眠そうにしている表情が、真剣なものへと変わつた。

「分かつた、まかせてくれ」

「は？ て、ちょ！ 何をするのだ！？」

私が何を言つているのだ、こいつは？ といつ、呆れた表情を、後ろを走つていた童子に向けていると。いきなり、童子が走る速度を上げ、前を走つていた私のことを、その鉱石の様に頑強に鍛え上げられた両腕で抱え上げ始めた。

走つてゐる最中に、いきなり抱き上げられてしまつたがために、私は驚きの声を発してしまう。

いわゆる“お姫様抱っこ”という持ち方で、私を抱えたままの童子は、これまでとは比べ物にならないスピードで、坂を走り始めた……いやつめ、今まで変だと思つていたら、私に合わせていたな？

「少し、飛ばすから、抱まつてくれ」

「もう掴んでおるよ。というより！ 最初から、こつすれば良かつたのだな！」

あまりのスピードに、私の長い金髪が、風になびき、童子の右腕を撫でている。

いやつの太く頑丈そうな首に、私は両腕を回しながら、もはやス

ピードカメラの倍速の様に風景が流れていく様を眺めていた。

そして、ふと、こやつの顔を、抱きかかえられた状態のまま見上げる……。

ザンバラに眼にかかるぬ程度に伸ばされた、白い前髪に、刈り上げたように短い、それ以外の黒髪……。いつも眠そうにしている瞳は、今は私を遅刻させまいと真剣に見開かれており、なかなかに眼光鋭い、いい眼をしている。眉毛は黒くて少し太く、鼻はまあ、見れる程度には筋が通った、いい鼻をしている。輪郭は、体もデカイ事から、顎も頑丈そうに出来ているのだが、基本的に引き締まっているため、あまり太くは見えず、むしろ普通の輪郭の様に見える。

「うん？　どうした妖狐？　少し速すぎたか？」

そんな風に、こやつの顔を観察していると、不思議そうな視線で見下ろされてしまった。

こやつの腕の中で収まっていた私は、「別に、心地よい速度だ」と、心なしか、自然と出てきてしまつた微笑みを向ける。

まあ、強いて言えば、“お姫様抱っこ”のせいで、少し、履いている短いスカートからパンツが外に見えているのではないかと思うぐらいなのだが……妖怪である私としては、特に気にもしない事なので、あえて口には出さない。

そういうしていると、いつの間にか、童子の奴は坂を上り終え、今度は下りへと入つていた。

相変わらず、妖怪である私からみても、尋常ではない強靭な肉体を持つている童子は、下り坂であるうと、カーブであるうと、走る力を緩めず、柔軟かつバネの様に機能する足首やつま先を駆使しながら、人ではありえない速度で曲がつたり、下り坂を下つていったりしている。

童子が走り抜ける度に、周りを緑で染めている木々が揺れ、葉を散らしていく……。

「もう少しで山を越えられる、そうしたら“結界”だから、そこで一旦降ろすぞ？」

「分かつてある……はあ～面倒臭いのう。こちこち、結界を通り抜ける事で、出席を取るなど」

「そう言つた。人間側の学校では、出席は教室に集まつたときに点呼で取るわうだから、むしろ楽な方だと思つ」

「そつは言つてもな。これでは、学校をサボる事も出来ぬではないか」

「サボる？　いや、」の出席の取り方でなくとも、それは出来ない事だろう」

「分かつておらぬな、おぬしさ。世の中には、出席を取るときには、別の者に返事をさせるところ」

「そろそろ着くぞ」

他愛も無い会話を続けていると、いつの間にか、童子は山越えを果たしていた様だ。

童子に抱きかかえられたままの私の視界に、山を挟んだ隣町の“寂れた”風景が広がる……。

ここから先は、私とこやつが通つ妖怪学園の学び舎へと続く、結界の境目だ。

という訳で、童子が私の事を、ゆっくりと地面に降ろした。

「ふむ、では、行くかの」

アスファルトの地面に、学園指定のローファーで足を着けた私は、持つていた鞄を、肩に担ぐように乗せながら、視界に広がる、隣町の“寂れた”風景へと歩を進める。童子も、私の後に着いて来る。しかし、そこで私は、ある奇妙な光景を目にした……。

「なんだ、あれは？」

「うん？　うちの学園の制服を着ているみたいだが……」の匂いは

「ああ、これは人間のものだな」

それは、結界の境目付近を、不思議そうな表情で徘徊する、うちの学園指定の女子制服を着た、“人間の女”的姿であつた。

あるえ～～～～？

おかしいなあ、確かに、この辺の筈なのになあ……見渡す限り、人気の無い寂れた町にしか見えない。

転入初日の、ドキドキ感と共に、家から“ないしょ”で神通力の力を使いながら、普通の人ではなかなか歩いて行こうとは思えない距離を、ひとつ飛びしてきた私は 実際にはコントロールに手間取つて、かなり体力を使つたけど この見渡す限りの光景に、最初のドキドキ感をどこかへと置き去りにしてしまつた。その代わりにと言つてはなんだけど、転入初日に遅刻確定という、ある種のドキドキ感が、私に重く圧し掛かつてきただけ……いや、本当にマジでやばい。

何なのよも～これは！

ちゃんと、地図に書いてある方向に一直線で飛んできたし、住所もちゃんとチェックしたんだよ！？

なのに、あるのは一つの盆地を丸々使つたと言われている、巨大な学園ではなく、ただの寂れた町並み……何これ、私は、家族グルで行われたドッキリにでもばかされたのかしら。

割と本気で焦つている私は、オロオロと視線を彷徨わせながらも、必死に学園を探そうとする。

しかし、どんなに視線を巡らせてても、どんなに別の角度から見てみても、学園どころか、人っ子一人いない……は、そうか。これは、ただ私の迷う様を楽しみたいという、お父さんの悪趣味な遊び

「おい、そこの人間。何をしているのだ？」あれ、人がいたみたい。

その女性だと思われる人の声に、ある種の救いを感じた私は「はい！ 何でしうか！」という、初対面の人から見れば、馬鹿丸出しの返事を返してしまつ。

「いや、何でしうかって……私は、おぬしに何をしているのかを聞いたのだぞ？」

声の方向へと振り向き、ようやく救いが私にも訪れたと感じていた矢先……私は、眼を奪われるつて、この事なんだなと、初めて実感していた。

私が振り向いた場所には、一人の背の高い女性が立っていた……。朝の日差しを反射させる、きめ細かな長い金髪に、少しだけ吊り上った、切れ長な綺麗な瞳が特徴的な、細く整った顔立ち……まるでモデルさんの様に、しなやかに均整の取れたプロポーションでありながら、強い主張をする形の良い胸。スラっと長い足を、短く改造された学校指定のスカートで見せ付けながら、その柳腰といつても良い、細く柔軟そうな腰に片手を当てる、強気な立ち姿。そしてなによりも、女性の何ものにも染められていない白い肌が、私の眼を奪い取つていた。

ああ、こんな背が高くて、かつこいい女の人になりたかったんだ、私……。

「おい、どうした？　さっきから私の顔を、マジマジと見おつてからに……何かついているのか？」

「え！　あ、いえ、何もついてませんよ！？」

しまつた……あまりにも浮世離れした綺麗さに、見惚れすぎていたみたい。

流石に、初対面の人を、いきなりマジマジと見るなんて、相手にとつては気分の良いことじやないものね……でも、本当に綺麗な人だな。

「それで、おぬしの格好を見たところ、うちの生徒みたいだが……」
言いながら、謎の綺麗な女性の方は、私の足から視線を上げていき、再び私と目を合わせた。

そういえば、確かに、この方も、私と同じ制服を着ている……あ、学年を示す、ネクタイの色も赤で、私と同じだ。

「はい、今日転入して來たんですけど……学園が見つからなくて」「見つからない？　ああ、なるほどのう……童子、ちょっと来てくれるか？」

私がちょうど良いと、助けを求めようとしたとき、目の前の謎の綺麗な女性は、後ろに首だけを回し、童子と呼ばれる人を呼んだ……で、デカッ！？

「どうした？ 何か、問題でもあったのか？」

「いや何、どうやらこの人間。今日転入してきたばかりらしいのだ」

童子と呼ばれる、とても大きな男性は。

ザンバラに眉辺りまで伸ばした白髪の前髪に、それ以外は刈上げに近い長さの黒髪という、ちょっと目立つ髪形をした人で。顔は引き締まっているのだけど、眠そうな目や黒い眉毛などのおかげで、それほど怖くは感じられない……。だけど輪郭も整ってるから、顎とかはガツチリってほどじゃないけど、頑丈そうだし、首の筋肉も凄い筋張ってて、とても強そうな印象しか浮かばないんだけどね。

体格も、パツパツの白い無地Tシャツから浮き出る、ブロックみたいな胸の筋肉や、ゴツゴツとしている、ハツキリと六つに分かれた腹筋とか、もはや、これが本当のマッチョマンかと圧巻される程の威圧感を放つてるし。それに、厚い胸板と反比例した腹回りの細さとか、丸太みたいに太く鍛え上げられた腕とか……もう、プロの方ですかと聞きたくなるぐらいに、見事な肉体をしていた。

でも、どうやら学園の生徒では無いみたいだ。

だって、着ているのは学園指定の制服じゃなくて、セーフキモ言つた白い無地のTシャツに、上半身を脱いで、腕袖を腰で巻いたグレーのつなぎ姿だもの……。こんな格好をした人が、高校生な訳ないものね。

私が、謎の綺麗な女性に呼ばれた、童子と言ひ、190cm以上はありそうな男の人には、若干驚いていると……。

「少し、我慢してくれ

「え？」

謎の綺麗な女性との会話を終えた、その大きな男の人がある目の前まで、履いているハイネックのショーツの足音を鳴らしながら、ゆっくりと近づいてきた。

そして、私の目の前に、無意識に流れ出でているのであらう威圧感を放ちながら佇んだ。

もはや見上げるしかない、その男の人に。

「あ、あわわわわ……」

私は、眼を涙目にしながら、ガタガタと怯えるしかなかつた……だつて、すつごく怖いんだよ！？

「本当に、すぐに終わるから、ジッとしててくれ

「わわわわわ……」

言つと、童子と言つ男の人は、私の目線に合わせる様に中腰になりました。

「スンスン……」

「えツ！？」

突然、私の匂いを嗅ぎ始めた……。

「な、何してるんですか……これ？」

あまりにも理解不能な事に、私は、どう反応して良いのか分からぬといつた表情で、謎の綺麗な女性に、助けを求める。

「まあ黙つて待つておれ。すぐになつる

「は、はあ……」

どうやら、女性の方も止める気は無いようだ……。

私は取り合えず、この知らない初対面の男の人に、体の匂いを嗅がれるといった行為を、黙つて受け入れるしかなかつた……。すると。

「妖狐。やつぱり、お前の言つた通りだ。この人は、“生徒手帳”を持つていない

「そうか、やはりの」

童子と呼ばれる男の人が、私から身を引き、再び、謎の女性に向き直つた……妖狐さんって言つんだ、あの人。

「なら、話は早いの。人間」

「はい？」

今度は妖狐さんが、私の目の前まで近づいてきた。

やつぱり、近くで見ると、更に榮えるな……。

「これから、一緒に結界の中に入るから、私の手に掴まつておれ」「え、あ、はい……」

差し出された、細く、綺麗な手に、私はそつと自分の手を置く。正直、結界とか言わても、何が何だか分からない私に……あれ？ そういえば、前にお父さんから、今いる世界とは、違う空間を特殊な結界を使って作り出せる事が出来るとか、習つたことがあったかも。てことは、これから入る結界の中に、学園が存在するのかな？ そんな事を私が考えていると、妖狐さんが、掴んでいた手を引っ張りながら、廃れた町並みの風景へと歩を進めていった……すると、不思議なことが起きた。

なんと、妖狐さんが、何も無い、廃れた町並みの風景しか広がっていない空間に、まるで吸い込まれるように、もしくは体の正面から“めり込んでいく”ようにして、消えていくではないか。

「な、何これ……」

その光景に、若干気味悪がっていると。

遂には、妖狐さんと繋いでいた私の手まで、何も無い空間に入り込んでいく……何だか、何も無い空間に入り込んでいく度に、そこから向こうの部分が消えていくから、正直気味が悪い。

その現象は、すぐに私の体の正面まで訪れた。だけど、なんとなくだけ、結界の中へと入り込んだ手の感覚と、繋いでいる妖狐さんの手の感触は感じられるから、安全だと理解できた。

そして、私の体の正面や、全体が、何の問題もなく、結界の向こう側へと入り込んでいった。

「うわあ～……凄い

「ふふ、そつか？」

私は、目の前に広がる光景に、感慨の声を漏らしてしまつ。「お父さんから聞かされてはいたけど……改めて実物を見てみると、本当に凄い」

「まあ、ある意味で世界中の15から18までの世代の妖怪たちが、一箇所に詰め込まれているのだからな。人間であるおぬしに驚いてもらわねば、こちらが妖怪として困るというものだ」

まるで新入生を歓迎するかのように、真っ直ぐに続く、赤レンガの道に、その道を飾るようにして並べられている、きちんと手入れの行き届いた桜並木たち……だけど、私が驚いたのは、そこではない。

だつて、その桜並木の道を行き交う人たちには、皆、軽い“変化の術”は使っているが、所々に妖怪としての特徴が見られる、人とは違う姿をした人たちなんだもん。

あ、あれって、雪女って妖怪だ！ 新雪の様な真っ白の着物も着てるし、なにより“彼女の周りだけ、妙に白い靄が掛かっている”。多分、彼女の周りだけ、異様に温度が低いのだと思う。

今、私を追い越した人、頭にやたら立派なんだけど、先端が丸まつて一本角が生えてた……もしかして、“麒麟”っていう聖獸！？ え！ この学園って、そんな伝説級の妖怪までいるの！？

それに、さつきから、学園まで続く広い一本道の更に先。学園の向こう側に見える、山みたいな人影つて……。

「あのう……あそこに見える、山みみたいな人影つて、もしかして、人型をした山ですか？」

あまりに現実離れした大きさの人影に、私は思わず、隣にいる妖狐さんに、恐る恐るといった感じで尋ねた……。

この妖怪学園は、外界から中を見られないように張つている結界のせいで、いつも内部は少し雲がかつた曇り空になつていて、お父さんの話で聞いたことがある。だから、向こう側に見える、山のような人影が、私には“ただの山の様に見えてしまう”……というより、見えてほしい。

だけど、私の反応を見て、楽しそうに微笑んでいる妖狐さんの口から出てきた言葉は、私の常識を、軽くねじ伏せるものであつた。

「何を言つておる、あれは“でいだらぼっちの田中”だ。あやつは、

あまりにも体が大きすぎたのう。毎日、私らとは違つて、“あの辺”で授業を受けていたのだ……可哀相にのう」

「え、ええ……」

「だがのう！ 今年の新入生に、西洋の方から“サイクロプスのジヨシュ”という者が来ての！ ここ入学式からの三日間は、“あの辺”から聞いた事も無い馬鹿でかい笑い声が聞こえてくるのだ！」

「そ、それは良かつたですね」

「うむ！ やはり、学び舎には心を許せるものがいないとな！」

もの凄く嬉しそうに、同級生であろう“でいだらぼっちの田中さん”の事を話す妖狐さん……。

多分、同じ妖怪として、田中さんに、ようやく友人が出来たことが、よほど嬉しいんだと思う。妖怪の世界つて、結構人付き合いが頻繁に行われているつて、お父さんから聞いたことがあるし。

「あれ？ そういえば、童子さん……でしたっけ？ の方は、やっぱり学園には入つてこれないんですか？ 今もいませんし」

そこでふと、私は気づいたことを妖狐さんに聞いた。

すると、妖狐さんは“何を言つているの、こいつは？”という、不思議そうな表情を私に向ってきた……。

「やつぱりだと？ 何を言つてあるのだ。あやつも、列記とした私と同じ学年の生徒だぞ？」

「えつ！？」

案の定、表情と同じ事を言われてしまつたけど、私が驚いたのは、そこではない。

「だつて、あの人、制服もネクタイも着ていませんでしたよ！？ 鞄も、学園指定の物じゃなくて、私物みたいでしたし……」

「あ、ああ……それはのう」

私が、あの、どう見ても同じ学年には見えなかつた童子と呼ばれていた男の人の話をしていると、なんだか、妖狐さんが気まずそうに言葉を詰まらせ始めた……。

すると突然、妖狐さんのすぐ横から、“ぬつ”と水面に波紋を広

げる様な歪みを何も無い空間に広げながら、いま話しに上がつていた童子さんがゆっくりと“現れた”。

私も、こんな風に、突然何も無い空間から出てきたんだなーっと、結界の不思議さと凄さを、改めて実感していた。

「いや、これは朝、妖狐に制服を全て燃やされてしまつて……」

現れたばかりの童子さんは、これまでの会話が、まるで向こう側から聞こえていたかのように、私と妖狐さんの話に、その眠そうな眼のまま入ってきた。

え？ てか、燃やす？

制服を燃やすって、どういう事なのかな？

「あれは、おぬしが何をやつても起きなかつたからであろうが！ 私のせいに、するでないわ！」

「それは、素直にすまないとは思つているが……何も、部屋を丸焦げにする事は無かつたと思う」

「だつたら、おぬしが自分で起られる様になれば良いだけであろうが！ 毎日、朝早くから田覚ましの音で起こされる、私の身にもなつてみろ！」

「…………すまない」

何だか、会話の内容だけ聞いてると、この一入つて、まさか同棲とかしてゐるのかな……？

いや、でも、妖狐さんの話を聞くと、童子さんも同じ高校一年生みたいだし……いくら何でも、年頃の男女が、同じ部屋で寝食を共にするなんてありえないよ。最近、一人でラーメン屋に入れるようになった、大人な私でもしてないのに……同じ年齢の二人が、そんな進んだ関係になつてゐる訳が無いもん。

私は、こう見えて、転入前の女子高では、結構“大人に近づこう”としている可愛い女の子”とか言われて、クラスの中でも、一番

“大人に近づいていた”のだ。

「だいたいな！ おぬしは、どれだけ田覚まし時計を揃えれば気が済むのだ！」

「あれは、色々な人たちから譲り受けて……」

「もう貰つてくるな！ あれだけ大量の田覓ましが同時に鳴つても起きぬのだから、おぬしには必要は無い！」

「……それは、言い過ぎじや『どこがだ！』……すまない」

「だけど、二人の会話は、どう聞いても、寝床をお互い知りえている感じにしか聞こえない。

もしかして、本当に同棲してるの？…？」

「あ、あの！」

「うん？ なんだ人間？」

いてもたつてもいられなくなつた私は、二人の間に思わず口を挟んでしまう。

それに、妖狐さんが不思議そうな顔で振り返る。

「お一人は、その…ど、同棲しているんですか！？」

昔から、私は思ったことを“ズバッ！”と言つてしまつタイプなんだけど……今回ばかりは、流石の私でも緊張を禁じ得なかつた。だつて、同棲つて事は、もしかしたら……とか、お風呂場で洗いつことかしてゐかも知れないじゃない！？

そんな事、何の遠慮もなしに聞ける筈ないじゃない！

「別に、したらんが？ ただ、お隣さんといつだけだ

「そ、そなんですか……？」

「おう。まあ、コヤツとは、同じ布団で寝た事もある、昔からの仲だからね。普通のお隣さんよりは、まあ深い関係を持つてゐるのは確かであろう」

妖狐さんは、そう言いながら、隣に佇んでいる童子さんを親指で指す……。

そんな雑な扱いをされていても、童子さんは、顔色一つ変えないで、妖狐さんの言葉に肯定の頷きを見せた……随分と、妖狐さんに雑に扱われるのが慣れている様子が、その事から見て取れた。

多分、というか確実に、尻に敷かれているのだと思つ。

そんな会話をしていると、妖狐さんが、おもむろに、その細い左

手首に巻いていた、小くて可愛い腕時計を覗いた。

「むつ。少し、しゃべり過ぎたかの……童子に運んでもらったから」といつて、余裕を持ち過ぎてしまつた様だ

「え、もう、そんな時間なんですか？ 私でつきり、まだ時間があると思つてたんですけど」

「ほれ、見てみる。もう8時15分になる……そろそろ学園の先公どもが、校門を閉める準備に取り掛かってる頃だらう。急がねば、理不尽な叱責を受けるぞ」

確かに、妖狐さんが見せてくれた時計の針は、そろそろ8時15分を指そうとしていた。

だけど、確か学園が遅刻者を認定する時間つて、8時25分だった筈……どうして妖狐さんは、あと10分も余裕があるので急いでいるんだろう？

「理不尽な叱責……ですか？」

「そうなのだ……うちの学園の先公どもと来たら。実質20分、ギリに来ても、校門を先に閉められ『そんな心構えでは、お前は社会じや通用しない』とか偉そうにほざくのだぞ？ 信じられるか？」「それは、酷いですね……」

「そうであろう、そうである」

「うんうん……と、分かる人には分かるのだなど言外に語る様な領きをする、妖狐さん。

「いや、それは先生方が、社会に出たときの5分前行動を、俺達に教えようとして……」

「良い子ちゃんのおぬしは黙つておれ！ そして、私にこの事で意見をしたいのなら、今度から自分で起きられるよ！」

「…………すまない」

どんな事を言おうとしても、妖狐さんの理不尽な叱責に、すぐ謝つてしまつ童子さん……多分、こういうのが、頭の上がらない人と言つのだと思う。

「おつと、こんな事をしている場合ではなかつた……童子、また、

頼めるかの？」

「ああ、分かつた……」

「うん？ どうしたんだろ？……と、一人の突然のやり取りに、私が首を傾げていると。

「きやつ！？」

突然近づいてきて、目の前で屈んだ童子さんが。私のお尻に下から肩を押し付け、そのまま私を肩に担ぐと、軽々と私は持ち上げられてしまった。

当然、いきなりお尻に肩を付けられてしまった私は、びっくりした声を出す……けど、童子さんは、全く気にして無い様子で、今度は胸下で腕を組みながら待っている、妖狐さんに近づいていった。

そして、そのまま……童子さんは、その太く鍛え上げられた腕を、妖狐さんの細く引き締まっているウエストに回すと。

「お、おぬし！ もう少し、持ち方というものを考えんか！？」

まるでダンボールを抱える宅急便の方みたいに、妖狐さんをお荷物宜しく、脇腹と太い左腕で抱え始めた。

その扱いに、当然の様に抗議する妖狐さんだつたけど……。

「すまない、初対面の人には、同じ扱いは出来ないから……」

どうやら、私が小人の様に、童子さんの丸みを帯びるぐらいに発達した筋肉が特徴的な肩に腰掛けさせられているのは、初対面の方専用の、特別扱いだつた様だ。

そう考へると、悪い気は……いや、正直、私自身、こんな子供みたいな扱いは、少し嫌かもしね。

荷物みたいに抱えられている妖狐さんなんて、待遇が不満なのか、さつきから長い手足をジタバタさせてる……童子さんて、良い人みたいだけど、ちょっと、他人の扱いが不器用な人みたい。

「じゃあ、行くぞ」

「ま、待て！ おぬし、まさか、このままの体勢で、私を学園に入れるきか!? ならぬ！ ならぬぞ！ こんな姿が、あのいけ好かないヴァンパイアの小娘に見つかったら……」

必死の妖狐さんの抗議も虚しく。

「ちゃんと、掘まつていろ?」

「あ、はい!」

童子さんは、人では考えられないスピードで、目の前に広がる桜並木の道を、爆走し始めたのでした。

このあと、童子さんが出す尋常じやないスピードで発生した風の壁を耐えていたせいで、久しぶりに腹筋が筋肉痛になってしまったのは、言うまでも無い事でした……。

もはや桜並木の道に、走る事で生んだ風で桜吹雪を作つてしまつた童子さんの力強い走り。

それに、童子さんの肩に座つた体勢で、多少なりとも靈力を使つた神通力で障壁を張つたけど、耐え切れずに腹筋が筋肉痛になつてしまつた私……そして「なぜ、さつきみたいに抱えてくれんのだ……」と、不貞腐れながら、何とも無かつたかの様に、童子さんの左脇に抱えられている妖狐さん。

たかだか、転入初日の登校で、色々な事があつたけど……。

無事に、私は転入先である国立妖怪学園の校門を通過することが出来ました。

本当に、本当に……腹筋が痛いです。

「う……お腹が……」

「何をやつているか童子！　早く、私を降ろさぬか！…」

「すまない……やり過ぎた」

童子さんの脇に抱えられていた妖狐さんが、ジタバタと暴れ始めると……ああ、そんな動いちゃうと、後ろからパンツが見えちゃうよ。

私の目の前には、今、国立妖怪学園の風景が広がつてゐる……。

四階建ての白い校舎が、その何の飾り氣も無い外見を、私に見せてくれれば、校門から校舎まで続く道には、ここまでとの道同様、桜並木が広がつてゐる。

そして、さらに言えば、私たちみたいに結構危なく遅刻になりそ
うであった生徒（ようかい）たちが、童子さんからゆっくりと降ろしてもらつた
私の後ろや、妖狐さんの後ろから、ぞくぞくと校舎の方へと走り去
つていく……なかには、人間である私に、先ほどの一人みたいに氣
づいた生徒もいたようで、何度かこちらを見てくる人たちもいた。

実際、生徒が妖怪などといった、人とは違った存在でなければ、普通の高校の様に見えるなど、私は思つた……まあ、みんな、ある程度は変化の術を使つてゐるから、本当に普通の高校にしか見えないんだけどね。

「たつぐ。まあよい、行くぞ童子！ 間に合つたは良いものの、教室に遅れでは、世話無いからな」

「分かつた……ああ、えつと……」

妖狐さんに促された、童子さんが、上から困つたように、私を見下ろしてきた……。

本当に、威圧感が半端無いです。

ですが、多分、別に私に対しても威圧感を放つてゐるのではなく、自然と私が感じ取つてしまつてゐるだけだと思います……それに、童子さんが困つたような表情をしてゐるのは、違つた意味だと思ひますし。

「どうしたんですか、童子さん？」

「いや、君の名前が分からぬから……」

「あ、そつか！ すみません、私、こんなに助けて頂いたのに……」

「いや、別に構わないんだ。困つたときは、お互い様だから……」「いえいえ！ 童子さんと妖狐さんが現れなかつたら、私、結界にも気づかなかつただろうし。それに、学園まで運んできてもらちやつたし。お礼を言つのは、こちらの方ですよ！」

本当に、外見に似合わず腰の低い人だ……こんな視界にも入りそうに無い私に、ペコペコと高い位置から頭を下げ続けているし。日本人らしいといえば、らしいのかな？

そして、そういう私も、童子さんに違わず腰の低い人間なのだ……証拠に、さつきから童子さんに負けじと、頭を下げ続けている。こういうのを、社会じゃ“おじぎ合戦”というのだらう。

多分、日本人は、こんなんだから、何世紀も前から海外の映画とかで、似たような演出をされてしまうのだと思つ。

私と童子さんが、延々と続けられそうな“おじぎ合戦”を繰り広

げていると……。

「おい童子！ 馬鹿をやつてないで、急ぐぞっ！！」

いつの間にか、学園校舎の玄関口付近まで歩いていた妖狐さんが、私と童子さんが着いて来ていないのに気がついて、眼にも止まらぬ速さで、童子さんのところまで駆け寄ると、その童子さんの太い右腕を取つた。

それと同時に、“キツ！”と私のほうに、鋭い睨みを向ける……。底冷えしそうな程に、鋭く冷たい睨み……だけど、それでいて見惚れてしまいそうなほどに、白くて綺麗な顔つき。

ここまで美人だと、どんなことをやっても、絵になつてしまふのだなど、私はこのとき、見惚れてしまった妖狐さんの睨みを向けられながら感じていた。

「おぬしも早く、職員室に向かつたらどうだ？ それに、童子はこう見えても“鬼”的一族の者なのだぞ？ あまり近づき過ぎるな

「え……？」

「何を呆けた顔をしてある。童子に喰われなくなつたら、早く職員室に行く事だな」

「おい妖狐。俺は人も妖怪も喰わんぞ？」

「つるさい！ 大体、おぬしもおぬしだ！！ 人間の女なんぞに、へらへらしあつて！！」

あれ……もしかして妖狐さん、童子さんと私の“おじぎ合戦”に「嫉妬などしておらん！」 うわ！ 心を読まれた！？

「ふん！ おぬしも神通力に多少の心得はある様だがの、私にかかれば、その程度の人間の技術、本の頁を捲るよりも容易いことだ！」
「は、はあ……」

なんだか、結構自信のあつたうちの一つが、馬鹿にされたみたいで悔しい……だけど、確かに常日頃から、お父さんに『お前の神通力は、ただ力を垂れ流しているだけに過ぎん』とか言われてたから、あながち間違つても無いのかも。

「それよりもほれ！ 急ぐぞ童子！ 急がねば、SHRに遅れる！」

もう私の事など眼に入らないかの様に、妖狐さんは童子さんの太い腕を両手で綱引きの様に引っ張り続ける。しかし、童子さんの体は、地に根が張っているかのように、びくともしない……なんともシユールな絵だ。

「くそ！ なぜ動かん！ ほれ行くぞ、童子！」

「待て妖狐。たぶん、この娘は、職員室の場所も知らないと思つんだ」

「もしや、そこも案内する気なのか？」

「ああ」

「却下だ！ そんなもん、通りかかった先公にでもやらせれば良いのだ！！」

「だが、しかし……」

「おぬしの言い分など、聞いても碌な事にならん！ だから早く行くのだ！」

二人のやり取りに、他の周りにいた生徒達も、何事かと視線を集めてきた。

流石に、なんだか居た堪れなくなってきたので、私は「あ、あの……大丈夫ですよ？ 職員室ぐらいなら、なんとか辿り着いてみせますし」と、二人の間におずおずと割って入った。

私の言葉に振り向いた一人が、同時に高い視線の位置から私を見下ろす……。

正直、とっても威圧感が凄かつた……とくに、妖狐さんの“もつと早く言え”というオーラが混じつた眼が特に。

「ほれ、こやつも、こいつ言つてあるのだ。私らも、早く教室へ向かうぞ」

「本当に、大丈夫なのか？」

「は、はい。これぐらい出来ないと、これからが心配ですか？」

「そうか……なら、“気を付けてな”？」

「え、あ、はい。どうも、ありがとうございました」

そう言って、童子さんは、妖狐さんの引かれる手に従つて、校舎

の玄関まで連れ去られて行ってしまった……あの肉体を引っ張れるなんて、妖狐さんも、やっぱり妖怪なんだなあ。

一人を見送り、校舎前で一人残されてしまった私は、そんな事を考えながらも、とりあえず、一人で職員室を探そうと、歩を進めるのでした。

特に代わり映えのない玄関に下駄箱……特に代わり映えのしない校舎一階の廊下。

床はワックスがかけられているのか、廊下の明かりを反射させるぐらいに、ぴけぴかに磨かれ、その明かりである蛍光灯も、全て新品の様に白光を放っている。生徒達の教室は全て、二階以降にあるので、一階には教員の雑用を任されている数人の生徒達しかいない……しかし、それでいて、上の階から聞こえてくる生徒達の笑い声や話し声は、鏡花が過ごしていた人間の学校と大差ないくらいに騒がしい。まあ、たまに『これは人なのだろうか?』と思うような奇声も聞こえてくるには聞こえてくるのだが。

そんな中を、鏡花は、下駄箱に常備されている外来者用の借り物スリッパを履きながら、キヨロキヨロと視線を彷徨わせながら歩いていた。

(本当に、妖怪の方たちが生徒つていう以外は、普通の学校なんだなあ……まあ、これならすぐに職員室も見つけられそうだし、楽で良いんだけどね)

鏡花は、一階のやたら長い廊下を、スリッパと地面を擦らせる音を鳴らしながら、歩いていく。

パタパタではなく、ス……スつと、静かに響く、その足音は、鏡花の歩き方が、摺り足である事を教えている。

(えっと、職員室、職員室……あ、これは保健室か)

普通、職員室って、校舎の中心辺りにあるもんじゃないの?

そんな疑問を抱きながら、鏡花が職員室を探していくと……。

「うん……こりやあ、人間の匂いか？」

「え？」

鏡花の後ろから、掠れた様な男の声が聞こえてきた……それに驚き、鏡花が振り向くと。

「おお、やつぱり人間か。通りで美味そうな匂いが漂つてる訳だ」「……な、何か用ですか？」

そこには、黒の長髪を肩まで伸ばした、細長い男子生徒が立っていた……ネクタイの色を見るからに、青だったので一年生の様だ。しかし、彼の常にニヤけている表情や、ふらふらとした佇まいが、女性である鏡花の警戒心を煽る。

「いやなに。見たところ一年みたいだけよ……確か、今の学園に人間ってのは一年と二年合わせて“一人”しかいない筈なんだあ」「は、はあ……」

「それなのに、一年の人間が、スリッパ履きながら、こんなところをウロチョロしてやがる……おまけに、美味そうな匂いと、魅力的な靈力を垂れ流しながらなあ」

言いながら、細長い男子生徒は、少し怯え始めた鏡花へと歩み寄ってきた。

その虚ろな瞳と、ニヤけた表情が、とても不気味だ……。

歩み寄ってきた男子生徒は、鏡花の前へと立つと、その長いストレートロングの黒髪の一房を、長く骨々とした右手の指で、愛でる様に掴み始めた。

「ふん……髪の毛に艶もあって、健康そのものじゃねえか」

「な、何を……？」

あまりの氣味悪さに、鏡花は身動きしながらも、男の手から髪の毛を放す。

そして、当然の様に距離を取った。

「眼も丸く見開かれていて、唇も、細い首も、柔らかそうな体も……本当に美味そうだな、お前？」

「さつきから、何を言つてゐんですかーー？」

鏡花の声音が、思わず強くなる……。

当たり前だ、初対面の男に、美味そつだやう何やら言われたら、流石に体を守るよつにして、後ずさりせざる負えない。

そんな鏡花の反応を楽しむかのように、細い男子生徒は、その口端をいやらしく吊り上げる。

「この妖怪学園つてな？ 基本的に自己責任で、色々まかり通つてるわけよ……」

「…………」

警戒心を緩めない鏡花が、男をその綺麗に見開かれた目で睨みつける……だが、全く持つて威圧感が無い。むしろ、小動物の威嚇を見ている様な感覚に陥つてくる。

「まあ俺も、まだ入学したばかりだけよお。話に聞く限りじや、年々、この学園じや妖怪同士の喧嘩やらなんやらで、死者が出てるらしいじやねえか……」

「…………そ、そうなんですか？」

男の話に、冷や汗を垂らしながら、聞き返してしまつた鏡花……。

「ああ……それに、これは三年に一度とかのペースらしいが、修行目的で入学した人間が、他の妖怪に喰われるつて事件も起きてるらしいんだ。危ないよなあ？ なあ？」

（ま、まじですか……）

「そんな危ねえところに……アンタみたいな、美味そうな匂いや靈力を垂れ流した人間が、何の用心もなしにうろついてやがる」

「こ、これはもしや、私、目をつけられた？」

背筋に、嫌な寒気がしたのを鏡花が感じ取つた……。

どう見ても、どう解釈しても、目の前の一年の男子生徒は、私を狙つている……。

お父さんから危ない危ないとは聞かされてたけど、いきなりですか！？

そう警戒心を高めながら、鏡花が、自分の身を守るために、身に

纏う靈力を高め、神通力で、体の表面に障壁を構築しようとした、
その瞬間……。

「……そんなんだから、いきなりこんな田に合づんだ！」

「えつ！？」

目の前の一年の男子生徒が、視界から突然姿を消した……そう気づいた瞬間には、鏡花の後ろから、突風に似た、鋭い風が吹きすぎんだ。

鏡花は、その突風に吹かれる髪の毛を必死に押さえながら、後ろへと振り返った。
そこには……。

「ちつ！ なに邪魔してんだ、こらーーー！」

「邪魔するもなにも、女子の後ろから、いきなり仕掛けてくる様な奴に、返す言葉なんてねえよ」

今しがた、自身の前から姿を消した男子生徒が、鏡花を守るかのように目の前に立ち塞がっていた。

その体の表面からは、何か鋭利な刃物で切りつけられたかのように、赤い切り傷を作っている。

「だ、大丈夫ですか！？」

男子生徒の怪我に鏡花は狼狽するも、修行中の身ではあるが己も陰陽師の端くれど、鞄から数枚の札を取り出し、助けてくれた男の前に出ようとするが……それは、目の前に立つ男子生徒が腕で制した。

「これぐらいは大丈夫だ！ とにかく、今は後ろに隠れてろー！」

「で、ですが！」

「いいから隠れてろ！ 切り刻まれたいのかー！？」

「つー？」

鏡花を守る男子生徒が声を張り上げると同時に、再び、突風にいた鋭い風が、廊下に吹きすさんだ。

「ちつ！？」

その鋭い風を、体の正面で腕をクロスさせながら受けた男子生徒

は、制服を切り刻まれ、その奥にある肉体にも、鋭い裂傷を付けられていた。

後ろにいた、鏡花の顔に、男子生徒から飛び出た赤い血が、風に乗つて付着した。

それを指でなぞつて、驚きに顔を染める。

「こ、これって……っ！？」

「アンタは、そのまま後ろに向かつて逃げろ！ 正直邪魔だ！」

男子生徒が、正面を見据えたまま叫ぶ。

赤い血を見て、狼狽を隠せない鏡花であつたが、この血が何が原因で出たのかを確かめようと、男子生徒の向こう側を覗いた。そこには、両腕の前腕に、半円を描いたような鋭利な刃物を“生やした”、外見 자체は人間だが、とても人とは思えない姿をした、妖怪の姿があつた。

あの前腕の外側に生えた刃物……もしかして、あの人は“かまいたち”！？

「どけよ、そこの男！…」

「早く！」

鏡花が、そうこうしていると、“かまいたち”の男子生徒が、その両腕に生えた半円の刃物を構えながら、こちらに突貫しようと、後ろ足で廊下の地面を蹴りだした。瞬間、猛烈な突風が起ころる廊下。この突風に、廊下のガラスというガラスは割れ、鏡花の長い黒髪は、押さえなければ痛いぐらいに揺らされていた。

あまりの風の強さに、鏡花が目を瞑つてしまふ。

しかし、そんな鏡花を置いて、二人の妖怪の闘いは始まった。

いつの間にか、鏡花を守っていた男の前に現れた“かまいたち”は、その右腕に生えている刃物で、男を切る付けようと、上から振り降ろすように、その右腕を、男に向かつて振り抜いた。

男から見て、左斜め上から、斜めに振り下ろされる刃物……それを男は、後ろにいる鏡花の事を庇う様に、右の前腕と左の前腕をクロスすることで受け止めた。

クロスする前腕と前腕の間に挟まれ、捉えられてしまった“かまいたち”の右の刃……しかし、そのせいで、刃を止めた男の前腕からは、骨が削られる痛みと赤い鮮血が飛び散った。

「つつ！？」

「てめえには、用はねえんだよ！！」

刃を止めるために両腕を使つてしまつた男の腹に、“かまいたち”的膝を抱え込むようにしてから放つた右の前蹴りが突き刺さる……その前蹴りの爪先からは、上履きを貫いて、鋭く尖つた“かまいたち”的爪が生えていた。

ザクリと……深く男の右脇腹に突き刺さる“かまいたち”的爪先。

「ふぐっ！？」

前蹴りの威力に、肺から空氣を吐き出され、鋭い爪先に刺された痛みで、右の脇腹に熱い感覚を感じた男は、思わず“かまいたち”的刃を放してしまう。

「死ね！！」

開放された右腕ではなく“かまいたち”は、今度は反対の左腕を、前蹴りを引いくと同時に生まれた腰の回転を利用しながら、ひるんだ男の首を切り落とそうと、真っ直ぐに突き出した。

前腕の外側に生えていることで、普通に拳で相手を殴る様に前へと突き出せば、まるでギロチンの様に真っ直ぐに飛んでくる“かまいたち”的刃は、寸分違わず、ひるんだ男の右の首筋へと迫つていく。

その時、異変が起こつた……。

ガキンッ！！　金属と金属が衝突したかのような、鋭い衝突音が、廊下に響き渡つた。

「ちつ！？」

「な、何してやがる！？」

「私だって、戦えます！」

“かまいたち”的刃は、男の首には届かず、間に割つて入つた鏡

花が両手で前に出して構えている“術札”によつて、阻まれていた。打撃戦の間合いというのは、ひとり一人、入れるかどうかという狭い場合もあるので、本当にギリギリのタイミングであった。

鏡花の神通力によつて強化された“術札”は、“かまいたち”的左の刃を、触れるか触れないかの距離で“押し留め”、相手の攻撃を防いでいた。

“術札”……これは、陰陽師などが好んで使う、言わば商売道具の様な物で、材質は問わず、ただ術者が特殊な文字を書くことで、その効果を發揮する。といつても、主な効果は、術者が“こうなつて欲しい”と念じたものを具現化する能力で、例えば、今の様に“相手の刃を防ぐ物になつて欲しい”と念じれば、紙の周囲に術者の神通力を使用した鋼鉄の障壁を作り出し、一つの防御として使用出来るようになるといった、大変便利な代物なのだ。しかし、防御になるといつても、相手の攻撃の威力に、持つている術札を放さないぐらいの実力がないと意味も無いのだが……その辺は、陰陽師は自身の体を神通力で強化する事によつて補つているのだ。

「陰陽師が！ その程度で！！」

「つ！？」

左の刃を、鏡花の術札で止められていた“かまいたちは”。

その刃を引くと同時に、今度は再び、それによつて生まれた体の動きを柔軟に使って、右足による、“爪先を立てた”上段廻し蹴りを、鏡花の側頭部……とりわけ、左米神に向けて蹴り放つた。

三日月蹴りと呼ばれる、この爪先による廻し蹴りは、両手で“かまいたち”的攻撃を防いでいた鏡花の左肩を悠々と越えて、まるで鎌の様に弧を描いた軌道で迫る。

しかし、またしても“かまいたち”的攻撃は、鏡花が体に張つていた神通力の障壁によつて、左米神に刺さるか刺さらないかの位置で防がれてしまう。

苦虫を噛み潰した様な顔をしながら、蹴り出した右足を引き、一旦距離を取る“かまいたち”……。

「てめえ……ただものじゃねえな？」

術札すら使用しないで、障壁だけで相手の攻撃を防いだ鏡花に、“かまいたち”は警戒の眼差しを向ける……鏡花も、“かまいたち”から視線を外さぬよう、相手の“首下”を見続けてはいたのだが。（お父さんの嘘つき！　何が接近戦に持ち込まれた時は、相手の“首下”を見ろよ！？　全く相手の胸の動きも腰の動きも腕の動きも……何にも見えないじやない！…）

“かまいたち”的動きの早さに、目が追いつかなかつたせいでも、とても対峙者としての威圧感は感じられなかつた……これがもし、ただの稽古だったのなら、鏡花は情けなく大泣きしていたところであろう。

実際、格闘技などでは、相手の全体を見れるように、人によつて、どこに視点を置くかなどがあるのだが、どうやら鏡花には、“首下”の視点は合わなかつた様だ。

「つ！　おい、アンタ大丈夫か！？」

すると、鏡花の後ろから、あまりのダメージに膝をついてしまつた男の驚きの声が聞こえてきた。

「え、なに？」　その声に反応した鏡花が、後ろへと意識を向けようとすると。

「うん？　へへ……なるほどな、別に、完璧に防いだつて訳じやねえようだな」

鏡花の左の米神辺りから、一筋の赤い血が、ツーッと垂れてきた

……。

その光景に、対峙している“かまいたち”は、自身の有利は、まだこちらにある事を確信する。

「代われ！　アンタじや、もう無理だ！」

「何ですか！？　私より、アナタの方が……」

「左の米神を触つてみろ！　攻撃が通つてるじやねえか！」

「え、あ！　ほ、本当だ！？　ど、どどどどしそう！？」

男の言つとおり、鏡花は米神の血を確認した瞬間、あたふたと動

揺をし始める。

「だから代われつて言つてんだ！ 大体アンタ、相手の動きが全く見えてなかつたろ！？」

「うつ！？ それは言わないでよ！ バレてなかつたかもしれないのに！！」

「あんだけ、相手の動きに何一つ動かなけりや、誰だつて気づくぞ！？」

確かに、鏡花は相手の攻撃に、ある意味で、何一つ微動だにしなかつた……最初の男を庇つたときの動きですら、ほぼ偶然に近い、直感による飛び出しで成功させたものだつた。

しかし、だからといって、こんな重症の人間を、また自分のために戦わせる訳にはいかない。

「でも、アナタだつて、全然相手になつてなかつたんですから、大人しく、後ろにいてください！」

「言うに事欠いて、何言つてんだ、お前！？」

「おい……てめえら、俺のこと忘れてないか？」

距離を取り、構えを取り直した“かまいたち”を置いて、言い合いを始めた二人。“かまいたち”は、微妙に困った様な顔をしながら、自己の存在を主張する。

すると、ここで……この一階での騒ぎを聞きつけた、他の生徒たちや、職員室から出てきた教員たちが、ゾロゾロと集まってきた。

「ち……ギャラリーが増えちまつたな」

「そこの三人！ 職員室の前で、なに喧嘩をしているのだ！？」

人が集まってきた事に、舌打をした“かまいたち”の後ろから、一人の教員が駆け寄ってきた。

「直ちに喧嘩をやめろ！ そろそろ授業が始まることだぞ！」

教員の声に、鏡花が気づいた。

やつた、やつと助けの人が来てくれた！

そう思い、鏡花が助けてくれと、声を張り上げようとすると。

「先生違います！ 僕と、その男で“序列戦”をしていたのに、

急に、そここの女が割つて入つてきたんです！」

鏡花が声を張り上げる前に、“かまいたち”が割つて入つてきた。その“かまいたち”的説明に、駆けつけてきた教員は「何？」と、明らかに怒ったような表情をし始めた。

何のことやら、さつぱり分からぬ鏡花であつたが、とにかく助けを求めようと、再び声を張り上げようとするが……。

「こここの女子生徒！！ 生徒同士の“序列戦”に助太刀、または妨害をすることは、硬く禁じられていると、生徒手帳に書いてある筈だぞ！？」

「へ？ え？ 何で、私が怒られるの？」

いきなりの叱責に、鏡花は訳が分からぬといつた、困った顔をするが……。

「野郎……パチ扱きやがつたな」

状況を理解していた、鏡花の後ろに膝をついていた男が、苛ついた感情を露にしながら、奥歯を噛み締めた。

「どういう事なんですか？」

「たぶん、転入したてのアンタには分からぬと思うが。うちの学校には、“序列戦”つてのがあつてな……」

言いながら、男は少し辛そうな表情で立ち上がった。

「こいつは、生徒間での強さの位を決める戦いなんだ……」「強さの位？」

「ああ……うちの学校は、表向きは妖怪が社会進出するのを目標としているが。“裏側”は……」

「おい！ その女生徒は早くどきなさい！ いい加減に言つ！」とを聞かないようなら、罰則を「えるぞ！？」

男が話を続けようとすると、教員が、その男の言葉を遮る……。

「ちつ……話す暇も「えてくれねえのか……すまないな、全部話せなくて」

「いえ……でも、それより、アナタはもう、戦えるような体じやつ

！」

「妖怪を舐めるなつて……これぐらい、放つておけば治る」
明らかに虚勢だと分かる態度……しかし男は、そのまま辛そうに
しながらも、前にいた鏡花を片手でどかし、“かまいたち”と再び
対峙した。

鏡花は、その男の真剣な表情と瞳に、言葉を失つてしまつ……。
(なんなの、この学校は……最初に襲つてきたのは、あつちなのに、
どうして、こつちが悪いみたいになつてるのよ)

いくら経緯を知らないとはいゝ、悪いほうの相手の言葉を鵜呑み
にする教員……それに対し、意味の分からぬ理由で、反論もせ
ずに受け入れる、目の前の男子生徒。

例え、人間と妖怪の価値観が違うといえど、この状況に、鏡花は
理不尽を覚えずに入られなかつた。

「さつきは女の邪魔で仕留めそとなつたが、もう、その心配もない。
大人しく、首を切られろよ」

「そりや、こつちも同じだ……」それで、女の心配なんて、せずに済
むからな

「へつ、言つてろよ。どつちにしづ、てめえみたいな雑魚には、用
は無いからな」

そんな鏡花など関係ないかのように、二人は再び対峙する……。

距離は、最初と同じで、接近戦を仕掛けられるような間合いでは
ない……しかし、男の刺し傷から、既にボロボロの制服を染め上げ
る程の赤い血が滲み出ている。

傍目から見たつて、男に勝ち目は無い。

だが、そんな時であつた……。

男と“かまいたち”の間の“天井”から、蜘蛛の巣状の裂け目が
入つたのは……。

本当に、それは突然でした……。

私たちを襲つた“かまいたち”の生徒と、助けてくれた男子生徒の間を別つ様に、一階廊下の天井が、まるで陥没するかのように落下してきたのは。

「な、何だ！？」

「天井が崩れたぞ！？」

「おい！ 卷き込まれた生徒はいないか！？ すぐに周りで確認し合いなさい！」

視界を遮るほどの埃と、廊下の地面にもの凄い衝突音を轟かせながら、周囲に破片を飛び散らせる、一階の天井だつたコンクリートの塊たち……その光景は、まさに混乱の極みを生み出し、周囲に集まってきた人たちが右往左往し始めていた。

だけど、そんな中で、私の目の前にいた、助けてくれた男子生徒は、崩れ落ちてきた瓦礫の上を、ワナワナと震えながら見つめていた。

次第に、最初に割れた窓ガラスのお陰で、視界を遮っていた埃が晴れていく……。

男子生徒が見つめていた場所を、私も埃が入らないように細めていた目を向ける。
そこには……。

「童子さん！？ それに妖狐さんまで！？」

先ほど、私と別れて教室へと向かつていた筈の一人が。瓦礫の上に、まるで下々の者達を見下ろす王者の様に、悠々と佇んでいた。

立ち上る埃が薄れしていくのと同時に、鏡花の声が、瓦礫の上に立つ二人に届いた。

「ふむ。まあ、無事だつたようだな……流石に、転校初日の転入生に死なれては。最後に見送った立場として、目覚めが悪くなるから

のう」

「ああ、良かつた」

その声を聞いて、二人は互いに安心する……。

「しかし、まあ……いざれは襲われるのは思つてはいたが、職員室に向かうだけで襲われているとはのう。流石に予想外だつたわ」
妖怪にとって、人間……ましてや靈力の強い者を食することは、己の力を底上げする効果を持ち、非常に美味しい獲物として見られることが多い。故に妖狐は、最初に見たときから『ああ、こいつはトラブルの元になりそうだ』と予想を付けていたのだが、流石にトラブルに巻き込まれるのが速すぎると、ある意味で驚嘆を覚えていた。
「済まないが、妖狐。虎熊こくまを見ていてくれないか？ アイツは怪我をしている、匂いで分かる」

「そんなもん、おぬしが“三階から床をぶち抜く”前から知つておるわ。舐めるでない」

「そうか、頼んだぞ」

「任せておけ」

仕方ない奴め……胸中で、そう呟きながら、妖狐は晴れかけている埃煙を突き抜けて、鏡花と、童子に虎熊と呼ばれた男がいる場所へと、瓦礫の小山から飛び降りていった。

童子は、それも見送らずに、“かまいたち”的方へと、視線を向け続けていた。

「すまぬ、来るのが遅れた」

埃煙を突き抜けて、瓦礫の前にいた鏡花と虎熊のもとへと下りてきた妖狐は、開口一番、あまり心の籠つていない謝辞を入れた。

「よ、妖狐さん……あつ」

妖狐の姿を見て、これまで“かまいたち”的危機に晒されていた鏡花が、ペタンと腰を廊下の地面に落してしまった。おそらく、先ほどまで感じていた理不尽から開放され、安心したのか、腰が抜けてしまった様であった。

「妖狐様……」

虎熊も、妖狐の姿を確認した瞬間、気の抜けた声を、思わず出してしまった。

そんな二人の姿を見て、妖狐は呆れたように前髪を搔き揚げながら……。

「はあ～日本最強の鬼とも謳われる、天下の大妖怪、酒天童子の配下である四天王の一人が。たかだか“かまいたち”程度に、この様とは、童子も苦労が絶えぬの……同情すら覚えるわ」

「申し訳御座いません……」

深いため息混じりに、ボロボロの虎熊を罵る妖狐……。

妖狐の言葉に、虎熊は奥歯を噛み締め、拳を思わず固めてしまつほどの悔しみを露にする。

その様子に、腰を抜かしながら安心しきっていた鏡花が、吐き出してしまつた様に反論する。

「そ、そんな！？ この人は、私を助けるために！」

「おぬしにとつては、そうかもしけぬがの……」ヤツは、毎度毎度、こうやって調子に乗つては、大怪我をして童子に尻拭いをさせてしまっているのだ。大方、今回も相手の力量も測らずに、格好を付けて、西洋の騎士ナイトでも気取りたかったのである。もし相手の力量が測れていたのなら、最初から、娘を連れ去つて逃げていれば済んだのだからな

「で、でも！」

「はい、仰る通りです。申し訳御座いません……」

鏡花が反論を続けようとするも、それを虎熊が震える声で遮る……。

それを、虎熊よりも背の高い妖狐が、見下すように見つめながら、軽く聞き流した……どうやら、虎熊とは、もつ話す口は持つていない様であった。

「ところで、さつきは聞き忘れていたのだが、おぬしの名は何と言うのだ？」

虎熊から、視線を地面に腰を抜かしている鏡花に向けると、妖狐

は、特に興味も無いといった様子の軽い口調で、名を尋ねた。

突然話題を変えられた鏡花は、一瞬納得が行かないといった表情をするも、取りあえずは名乗つとかないと、今後の会話が続かなそうだったので、名乗る事にした。

「えっと、あべ安部鏡花きょうかです……鏡花って呼んでいただいて結構です」

「安部？ おぬしは陰陽師であつたな？ さつき感じた靈力や靈気、神通力からして、私は、そう予想していたのだが……」

これまで鏡花に、特に特別な興味は示していなかつた妖狐であったが。鏡花の名字を聞いた瞬間、表情が一変し、真剣なものへと変わつた。

「はい、一応陰陽師としての修行として、この妖怪学園に一年遅れで転入させられたんですけど……それが、どうかしましたか？」

「なるほどのう……」

鏡花のキヨトンとした顔のまま発せられた答えに、妖狐は興味深そうに頷き、目の前で悔しそうに表情を俯かせていた虎熊に視線を戻した。

「虎熊よ、面を上げよ」

「……はい」

「良くやつた、私直々に褒めてやる。確り喜びを噛み締めるが良い」

「……は？」

突然の対応の変化に、言われた通り面を上げた虎熊も、鏡花同様、キヨトンとした顔をする。

「ふふふ……いつまで経つても、私たちの学年に修行に来る人間の陰陽師が来ないと思つたら。なるほど、これは思わぬサプライズだわ。これから楽しくなるぞ……ふふふ」

いきなり含み笑いを漏らしながら、意味深な言葉を口にする妖狐に、二人は顔を見合せながら、首を傾げる……。

そんな二人を無視しながら、妖狐は、「さて、朝の余興も、これで終わる。後はゆっくり、童子の部下の尻拭いを見学するとしようではないか、なあ？ 一人とも」と言って、その場から振り返り、

既に立ち込めていた埃が晴れた、瓦礫の方へと視線を向けた。

立ち込める埃が収まつたころ、童子は、瓦礫の上から己が部下を傷つけた相手を見据えていた。

体は細く引き締まつていて、身長は大体170後半、両腕に生えている半円を描いた弧の字型の刃と、爪先から上履きを貫いて伸びている鋭い爪が武器……顎は細く、目も細い。

「なにジロジロ見てんだよ……人の“序列戦”を邪魔しやがつて。ただで済むと思つてんのか！？」

おそらく、これでも変化の術は解いていないのであるうが……ほぼ解けかけている状態であり、これが全力に近い実力と見て間違いない。

「何か喋れよ！　おい！　聞いてんのか！　この木偶の坊！…」

感じ取れる妖力と妖氣は、問題ではない……あえて問題を挙げる
とすれば、重心が真つ直ぐに落ち着いているところだろうか？

おそらく、なんらかの格闘技に通じているのであろう。

「ちつ！　いけすかねえな……テメエ！」

「おい、君……流石に“彼は止めておいた方が良い”」

「あん！　外野は黙つてろ！　こつちは獲物も相手も逃がすわで、
苛ついてんだよ！…」

先ほどまで“かまいたち”的“序列戦”を認めていた教員が、恐る恐る“かまいたち”に注意を呼びかけるも、頭に血が上つた“かまいたち”には、聞き入れてもらえなかつた……教員が去り際に放つた“どうなつても知らないぞ”という小さな咳きも、“かまいたち”には届かなかつた。

そんな中でも、童子は眠そうな眼のまま、“かまいたち”を静かに見下ろし続ける。

「おい！　降りて来いよ！…」「なきや、こいつから行くぜ！…」

瓦礫の上で、静かに佇んでいた童子に、“かまいたち”が右腕を振りぬき、次いで左腕を振り抜いた。

どう考へても間合いの外からの“素振り”、だが、その“かまい”の素振りは、鋭い風の刃となつて、童子の肉体へと迫り狂う。眼に見えない風の刃が、突風に紛れて、童子の肉体へと迫り、その厚く鍛え上げられた胸板へと衝突した……刹那。

バシュウ 銳利な刃物で肉体を切り裂く音ではなく、空気を霧散させる氣の抜けた音を発しながら、風の刃は、その刃を散らしていく。“かまいたち”の起こした風の刃は、童子の着ていた無地のTシャツを切り裂き、ザンバラに伸びていた白髪の前髪を揺らすだけに被害を留めてしまった。

「な、何……っ？」

この状況が信じられないのか、“かまいたち”は不思議そうに瓦礫の上に立っている童子を見つめる……。

確かに当たったはずだ……なのに、なんで、あの肉体に傷がついていない？

おかしい、さつきの奴は、全身を浅く切り刻まれるぐらいには傷を作っていた筈なのに。

起こつている事態を受け入れられぬかの様に、“かまいたち”は再度、両腕の刃を立てながら、童子に向けて素振りをする。同時に起こる、突風と風の刃。

しかし、それでも……。

バシュウ 先ほどと同様、氣の抜けた音を発しながら、童子の無地のTシャツを切り裂く程度にしか、効果を發揮しなかつた。“な、何でだよ！？ くそつ！！”
再び、“かまいたち”は童子に向けて、両腕の刃を立てながら、何度も素振りを繰り返す。

もはや吹き止まぬ突風、もはや連續で飛んでくる風の刃……。

だが、それでも童子の肉体に、一つとして裂傷を引くことは出来なかつた。

(い、意味わかんねえ……どうして、アイツは何の障壁も張つて無いのに、俺の“風斬り”を防げるんだ！？)

何度も何度も繰り返すうちに、次第に“かまいたち”的息は乱れ、ついには両腕の刃を振り回すのも止めてしまう。……。
はあ……はあ……と、肩で息をする“かまいたち”。

既に、自身の刃の重みも億劫なのか、両腕を垂れ下げている。

「てめえ……どんな小細工してやがんだ！」

声を張り上げるも、いまだ瓦礫の上から一歩も動いていない童子に反応はない。

ここまで相手に何も出来なかつたのは、初めてだ……相手の損害といつたら、来ていたTシャツが切り刻まれて、すでに無くなっている事ぐらいだ。

どうなつてゐる……本当に、何がどうなつてゐるんだ！？

“かまいたち”的脳裏に、延々と同じ言葉が流れ続ける……しかし、答えなど見つからない。

そこでふと、“かまいたち”は瓦礫の上で佇む、童子の肉体に眼が奪われた。

厚い鉄板を一枚並べた様な大胸筋に、小さな鉄球を積み重ねた様にハツキリと筋別れた腹筋群……太く鍛え上げられた首に更なる補強を与えるために、もはや丸みを帯びる程に鍛え上げられた僧帽筋に、それに連なつて太い腕を支えている、見事な三角を描いた三角筋……岩石の様に屈強な両腕もそうだが、それよりも、下から見てもハツキリと分かるほどに、胸周りと腹回りが反比例している逆三角形の上半身。

まさか、な……まさか、あの“肉体のみ”で防いだつてことは、ねえよな。

童子の上半身を改めて確認した“かまいたち”的脳裏に、もしも真実だとしたら最悪な考えが浮かび始める。

(ありえねえ……そんなの、絶対にありえねえ！！)

胸中で必死に否定しながらも、他の要因が見つからぬ“かまいたち”。

障壁を張つてゐるような妖氣も妖力も感じられない……おまけに、

「 いまだ身動き一つしていない。」

「 なら何だ、なぜ、目の前の瓦礫の小山で佇む、あの木偶の坊は、俺の風の刃を無傷で防げる！？」

己が実力に、余程の自信を持つていたのである！……“ かまいたち ” の男は、そんな疑心暗鬼を振り払つかのように、もはや考え無しの特攻を、童子に仕掛けた。

特攻のために、後ろ足であつた左足を蹴り出すだけで、周囲に突風を巻き起こす“ かまいたち ” の踏み込みは、一瞬とも言える速度で、瓦礫の小山で佇んでいた童子の前へと迫り着いた。

もはや、既に振りかぶっていた左の刃を、相手の首へと突き出せる間合い……しかし、それは、相手も同じであつた。

いつの間にか、これまで身動き一つ取つていなかつた童子が、その大きく拳廻けんだこの目立つ岩石の様な右拳を、左肩を前に出しながら、肘を曲げた状態で、右の肩甲骨を使って振り絞つてゐるではないか。（こいつ、俺のスピードに反応してきやがつたつ！？）

驚きに“ かまいたち ” が眼を見開くも、もづ振りかぶつていた左の刃は止まらない。

左の腕に生えた刃を立てながら、“ かまいたち ” が童子の右首筋目掛けて、振りかぶつていた体勢を開放した。

刃が、真つ直ぐに刃を立てながら、童子の首筋に迫つていぐ……しかし、あと首筋まで拳二つ分と迫つた所で

ガシャアアアンッ！……！

“ かまいたち ” の左の刃が、童子の眼にも止まらぬ速さで足先や膝、腰や胸まで連動させて振り抜かれた、右のショートフックで、まるで飴細工の様に碎かれてしまった……。

「 は？」

そして、童子の右ショートフックの威力と勢いは、刃だけでは飽き足らず“ かまいたち ” の左前腕まで、“ くの字 ” に折碎いていた

……。

あまりの出来事に、折られた左腕を振り抜いた体勢のまま、思考を停止させる“かまいたち”の男、……そこに、更なる暴力が襲い掛かる。

右のショートフックを振り抜いていた童子は、左に捻転していた体の捻りを最大限にまで活かして、足の爪先を、今度は反対の右方向へと回し、それに膝を運動させ、力の流れを作り出し、腿、股関節と力が流れたところで、腰を同じく右方向に切る事で、更なる力を流れに加えていき……腹、右の肩甲骨を右方向に切った瞬間に、返す刀の左フックを、飛び込んできた“かまいたち”の右の横つ面に叩き込んだ。

グシャツ！……と、相手の顎を己が拳が碎く、鈍く生々しい打撃音が、周囲に響き渡る。

童子の拳をもろに受けた“かまいたち”は、打ち抜かれた方向に頭や首を弾き飛ばし、そのままの勢いで、体丸ごと、横の壁に吹き飛ばされた。

壁へと蜘蛛の巣状のひび割れを作りながら叩きつけられた“かまいたち”は一瞬、そこで叩き潰された蚊の様に壁に張り付いていたが、そのままズルズルと、血のラインを引きながら、一階の廊下へとずり落ちていった。

瓦礫が散乱する、一階の廊下へと意識を沈めていった“かまいたち”の男の首は、痛々しい“突起”を作りながら折れ曲がり、顎を砕かれた口からは大量の血を吐き出させ、更には殴られた衝撃で少しだけ飛び出てしまつた眼球が、彼の細かつた瞼を大きく見開かせていた。

そんな自らが仕留めた相手を、一瞥する事も無く、童子はそのまま瓦礫の小山から降り、妖狐のもとへと向かった。

周囲の妖怪である筈の生徒や教員たちは、この、あまりに単純な暴力が生み出した光景に、ただただ、眼を見開き、驚愕するしかなかつた……。

「圧倒的だった……。

この言葉しか、童子さんの“戦い”とも呼べなかつた出来事に述べる感想は浮かばなかつた。

あれ程、私と虎熊さんが手も足も出なかつた相手を、たつたの一撃……いや、やろうと思えば、多分一撃で倒せていたと思う。

といづより、本当に童子さんが、一発だけしか攻撃をしなかつたのかも、分からなかつた。

どうして一発と判断したのかと聞かれれば、それは私には一回だけ、打撃音だと思われる音が聞こえてきたからだ……。だけど実際に、その一発の音も、全く間髪が無かつたので、自信は無いのだけど。

「妖狐。その娘と、虎熊の様子はどうだ？」

あまりの出来事に、事態が飲み込みきれていた私の目に、上半身裸の童子さんが、瓦礫の小山から降りてくる姿が映つた。

「虎熊は少し危ないが、大した事は無い。鏡花は、可愛らしい顔の左米神にちょっとした傷がついているぐらいだ」

“かまいたち”的男を圧倒し、相変わらずの眠そうな眼をした童子さんを、妖狐さんは、何事も無かつたかの様に迎えた。

童子さんは、そのまま私の前まで歩いてくると、腰を抜かした私の視線にあわせる様にして膝を地面に着いた。

「すまなかつた……やはり、俺が職員室まで着いていけばよかつた」小さく頭を下げながら、私に本当に気にした様子で謝つてくる童子さん……。

そんな、別に童子さんは悪くないのに……。

「いえ、その……別に気になさらなくても良いですよ。実際、助けてもらつたのは事実なんですし」

そう言いつつ、私は蜘蛛の巣状のひび割れを起こした壁の付近で転がっている、童子さんが倒した“かまいたち”的男の人へと視線

を向けた。

左腕に生えていた刃は、前腕ごと破壊され、首はありません方向に折れ曲がり、頸にいたつては力なくだれ下がっている……目も少しだけ眼球が外に飛び出た状態で、仰向けて天井を仰ぐようにして倒れている。あれって、生きてるのかな？

昔、修行中に現れた妖怪を、お父さんが倒した時は、もうちょっと綺麗に倒していた気がする。

そんな風に、私が“かまいたち”的の人を見ていると。

「鏡花。そんなに妖怪が倒れた姿が珍しいか？」

「え？」

妖狐さんが、少し楽しそうな聲音で、私に聞いてきた……あれ、なんだか機嫌が良くなってる？

「安心しろ、妖怪は、あんなつても、治癒してくれる者が優秀なら、死にはせん」

「それって、本当なんですか？」

正直信じられないといった表情で、私は見上げる妖狐さんに返す。だつて、あんなになっている状態で、生きているなんて……正直考えられないんだもん。

「本當だ、証拠に、ほれ……先公どもが、落ち着いているだろ？本当に死人が出れば、どう世間に知られないように揉み消すか、てんやわんやしている筈だからのう」

「揉み消す……ですか？」

「ああ。實際、この学校では毎年死者が出でる……原因は様々だが、取り分け、今回の様なトラブルや、“序列戦”での事故が多い」また、“序列戦”……さつきも、虎熊さんと呼ばれている、私を助けてくれた人が言っていたワード。

本当に気になっていた私は、自然と口に出してしまっていた。

「あの、“序列戦”って、何なんですか？こんな事が起きても、他の人たちからの助けがないなんて……」

「異常か？それは、おぬしの価値観であろう？私たちにとっては、

「ごく当たり前の事だよ。生徒間同士で戦い、相手より自分が強いと証明した者が、序列を上げ、妖怪社会のピラミッドの一段上へと登る……それは、遙か昔から行われてきた、妖怪たちの風俗と言つても良い。いいか？　“序列戦”とはな、これを学園のみで行つ、妖怪社会の縮図の様な制度なのだ」

妖怪とは、人間と交流を始めた今でも、独自の文化を守り抜きながら生きている……昔、お父さんから聞かされた言葉を、私は今、ふと思い出した。

「まあ今回は、あぬしが狙われたのは“序列戦”とは関係の無いトラブルだったみたいだがのう。覚えておくといい……おぬしも学園に籍を置く限りは、この制度からは逃れられない。次も、私や童子、そこの虎熊の様な助けが入るとは思わぬ事だな。まあ、巻き込まれたくないのなら、強くなれというだけの話だが」

脅かすように、片眉を上げながら、私を見てくる妖狐さん……すると、今まで黙っていた童子さんが、スッと、膝を着けていた廊下の地面から立ち上がった。

「妖狐。俺は、先生方に天井を壊した事と、この騒ぎの事について謝つてくる。だから、二人を頼めないか？」

「おう、好きにしろ」

「分かつた、なら、行つて来る」

「ああ、さつきは格好よかつたぞ」

そう言つて、立ち去ろうとする童子さんに、妖狐さんは思い出したかのように微笑みながら、賛辞の言葉を送つた。それに童子さんは、軽く片手を擧げる事で答えて、先生たちのもとへと歩いていった。

この様子を見て、私は何だか妖狐さんの機嫌の良さが、少しだけ理解できた気がした……多分、仲のいい人の、自分の好きな姿を見れて上機嫌になっているのだと思う。

「さて……頼まれたからには、私も何かせんとな」

童子さんを見送つた妖狐さんが、私へと歩み寄つて来る……。

「ほれ、顔を上げてみい」

「え、あ、はい」

私の顎を、妖狐さんは、その白く細い指で“くいっ”と、軽く持ち上げると、なにやらマジマジと私の顔を観察し始めた……。

わわ！　顔が、顔が近いよ！

「ふむ……やはり、怪我は米神のところだけかのう。これなら、薬でも塗つておけば治るな」

「薬、ですか？」

妖狐さんの顔が近い事に、必死になつて動搖を隠していた私だけ、たぶん、両頬が熱い事から、相当顔が真つ赤になつていたと思う。

「妖怪には、色々な薬草を調合して、薬として売るのを商売にしている種族もいてな。それから譲り受けたものなら……」

言いながら、妖狐さんはスカートのポケットをガサゴソと弄る…

…「お、あつたあつた」

スカートのポケットから取り出されたのは、ラベルに“塗り薬つす”と書かれた、絵の具の様な形をしたチューブ式の塗り薬だった……今時チューブなんて、珍しいなあ。

「“人間には試したことは無いが”、まあ大丈夫だろうからな。我慢しろよ？」

「え？」

今、確實に、妖狐さんは不穏な事を言つた……。

人間に試したことがない？

そういうえば、妖怪と人間の体つて、頑丈さに比べ物にならない程の差があつて、肌も例外ではないって、ＴＶで聞いたことがある……そんな妖怪が使う塗り薬を、人間である私に使う？

これつて、もしかして、少し危険なんじゃないかな？

「こうやって、指に塗り薬をちょっとだけ出して……」

私が頭の中でＴＶで言つていた事を思い出していると、すでに妖

狐さんは、その右の細指に、キャップを外したチューブの中身を、

「」飯粒程度の小ささで出していた。

そして、全く躊躇することなく、私の左の米神辺りに出来ていた傷に、薬を塗りつけようとする……けど、させない！

「むつ？」

妖狐さんの、薬の付いた右人差し指が、私の米神に迫った瞬間。私は、眼を瞑るほど力みながら、首を横に振つて、薬が付くのを避けた……その様子に、少しだけ目が細まる妖狐さん。

だけど妖狐さんは、細まつた視線を私に向けたまま、再び、右の人差し指に付いた薬を、私の米神に塗ろうと手を伸ばす……けど、やらせない！！

「むむつ？」

嫌々と唇が震えるほど噛み締めながら、私はまた、妖狐さんの薬を避けた。

妖狐さんは片眉を吊り上げた……。

そして再度、私の米神に薬を塗りつけようと、右人差し指を近づける……後生だから…… ガシッ！ ああ！？

「うー！ うー！」

「ええい！ 逃げるな、この小娘！！」

妖狐さんは持っていたチューインガムを、その辺に捨てる。

何度も薬から逃げようとする、私の顎を、反対の左手で鷲づかみにする……そして、そのまま、私は抵抗虚しく、妖怪御用達の塗り薬を、左の米神にぬりぬりされてしまった。

あれ……なんだかスーっとする。

「ふふ、気持ち良いのか？ 抵抗する力が無くなってきたおるぞ？」「ふあ～……」

鷲づかみにされてしまつているせいで、ひょっこりみたいに開きっぱなしの私の口から無意識に、しまりの無い、だらしないため息が漏れ出てしまう……。

だって、しようがないじゃん……こつ、一気に傷口から熱が抜けしていく感覚が、スーっとしてて気持ち良いんだもん。

「抵抗しなければ、可愛いものじゃないか……食べてしまいたいぐらいだぞ？」

「ほへえ～」

傷口を触れるか触れないかの絶妙な触れ方で、くじくじと円を描くように、優しく塗つてくれる妖狐さんの神がかつた手つき……これに、このスーっと感覚が合わさつたとき、だらしない顔をしない人間なんて、いないと思うんだ。

そうこうしていると、妖狐さんは、私に薬を塗り終わつたみたいで……。

「あっ……」

「何だ？ 名残惜しい顔なんてしあつて。そんなに気持ち良かつたのか？」

終わつた途端に、余韻に浸ることなく離される妖狐さんの指に、私は思わず声を漏らしてしまつた。

それに“仕方の無いやつめ”といつた表情で、私を見下ろしてくれる妖狐さん……。

私は、もじもじと恥ずかしげながらも「は、はい……気持ち良かつたです」と素直に答えた。

「どうか。薬を塗つてやつただけで、ここまで喜んでくれるなら、私も嬉しいよ」

優しげに微笑みながら、そう言つて、私から離れていく妖狐さん……。

どうやら、私の治療は、もう終わりで、今度は重症の虎熊さんの治療に移る様だつた。

「さて、問題はおぬしだが……どうするかの？ 私は治療系の術は使えるのだ。放置で良いか？」

「「ええつー？」」

然もあらんと、軽い声音で発せられた妖狐さんの言葉に、私と虎熊さんは思わず驚きの声を挙げてしまつ……だけど、そんな私と虎熊さんの反応を心外に感じたのか、妖狐さんが、その形の良い大き

な胸を張りながら、両手を腰に当てるところとした姿勢を取つた。

「何を驚いておる？ 私は妖怪だぞ？ 人や治癒系の術が得意な種族ならまだしも、私は他人を治す様な便利な術など覚えてはおらん。覚えておるのは、敵を焼き飛ばし、蹂躪する様な、ド派手な術だけだ。見ぐびるでない！」

「いや、見ぐびってはいないと感じますが……」

さつき、頼まれたからには何とかしないと、とか言つてたじょん！？

私は、喉の途中まで上り詰めていた、この言葉を、何とか抑えながら、取りあえずは困ったような声を出すことで、その場をしのいだ。

さつきの塗り薬の件もあるし、妖狐さんに逆らいのは止めておいた方がいいと、無意識の内に理解していたのかも知れない……。

いや、そんな事は、どうでもよかつたんだ。

それじゃあ、お腹とか刺されてしまつた虎熊さんの怪我は、どうすれば良いの？

そんな事を考えていた私は、自分で助けてくれた虎熊さんの事を、いつの間にか心配そうな眼差しで見つめていた。

“かまいたち”的男の人に切られた制服や体には、無数の裂傷がみられ、右の脇腹には、あの鋭い爪先で刺された傷跡が、痛々しく、今も血を流し続けている……氣丈に黙つて妖狐さんの前で、気を付けの姿勢で立つてゐるけど、多分、相当辛いのだと思う。

ジーッと、虎熊さんの横顔を、腰を抜かしたままの体勢で見つめていると、妖狐さんが、私の視線に気付いたみたいだ。

「おい鏡花？ 何を虎熊の横顔を、マジマジと見ておるのだ……ハッ！ まさか、おぬし、たつた一回助けてもらつただけで、心を許してしまつたのではあるまいなー？ やめておけ。こやつを思つたところで、苦労するのは田に見えておる……おぬしなり、もつと良い男を見つけられる筈だ」

私が虎熊さんを見ている事に気がつくと、妖狐さんは焦ったように、私の両肩を掴み、諭す声音で、真剣な眼差しを向けてきた。

わざわざ膝をついてまで、全力で私を諭そうとする妖狐さん……

何も、本人がいる前で、そんな事を言わなくて良いのに。

「べ、別に、そんなんぢやないですよ？　ただ、傷が酷いですし、

早く治さないとつて思つただけです」

「そつか……ふう~。若者は、すぐに氣の迷いを起こして、どうでも良い男に惚れたりするからね。おぬしも氣をつけるのだぞ？」

そう言って、妖狐さんは、額の汗を拭う仕草をとる……別に、汗一つ搔いても無いのに。

でも実際、惚れたりはしないにしても、恩は感じているのは確かだ。

何とか、この恩を返す事は出来ないかな~っと、考えていた私に「そついえば」という考えが浮かんだ。

「うん？　なんだ、急に思い出したかのような声を出して？」

「え、ああ、ちょっと、思い出した事がありまして」

どうやら急に浮かんできてしまつた事で、声に出てしまつていた様で、妖狐さんが訝しげな表情で私を見る。

だけど、そんな視線を向けられても、今は良く思い出したと、自分が褒めてやりたい気分なのです。

「何を思い出したのだ？　昨日の晩飯か？」

「そんなどうでも良いことを思い出したぐらいで、嬉しそうに声に出すような人に見えます、私って？」

「いや、外見なら、なかなかに可愛らしくて魅力的だぞ、おぬしは？　それに、靈力も神通力も高いし、何より“家柄”が……つと。とにかく、おぬしは愛でたいほどに可愛らしこそだ」

なんだろう……途中、聞き取りづらことに気が附つたけど。

まあ、今は良いや。

とにかく、妖狐さんの褒め言葉は「しゃばゆ」けど、今は早く、思い出した事を実行しないと。

「えっと、なんだか、そんなに言わると嬉しいんで恐縮ですけど……そんな事より、思い出したんですよー。」

「何をだ？」

「私、治癒系の術が使えるんですよー。」

瞬間、この場の空気が凍りつく……。

うん、分かつてますよ……こんな空氣と視線を向けられれば、誰だって、相手が何を言いたいのか気付くつてものですよね。

「そ、その……あまり、そんな目で見ないでください。私だって、忘れてた事に驚いてるんですから」

「いや、まさか、自分が使える術を忘れるような奴がいたとは……

流石に、驚いてしまってのう」

気まずそうに、私から視線を逸らす妖狐さん……私は忘れない、さつき、場の空気が変わった瞬間、妖狐さんが、可哀想な者を見る目で、私を見ていたことを。そして、一瞬、虎熊さんが、吹き出しそうになっていた事も……いつか、見返してやるんだから。

「そ、そんな事より！ 私、ちゃんと想い出しましたから、早く虎熊さんを治してしまいましょうよー！」

場の空気を変えるために、私は胸の前で“パン”と両手を叩くと、努めて明るい声音で、二人に言った。

「そ、そうだな。とりあえず、今は応急処置ぐらの術で十分だから、頼めるかのう？」

「は、はい！ 任せてくださいー！」

そう言って、私は元気よく立ち上がるとするのだけれど……。

「あ、あれ……？ た、立てない」

どうやら、まだ腰が抜けていたみたいですが……つ、情け無いにも程があるよ。

「仕方ないのう……虎熊。治してもうれるのだから、おぬしから動かぬか」

「はー……」

妖狐さんの指示で、虎熊さんが、お尻すら床から上げられない、

私の前に近づいてくれた。

「あのう……手が届かないの、もう少し届んでくれませんか？」
だけど、目の前で立たれると、私の手が、虎熊さんの傷口に届かなかつたので、なるべく上目遣いでお願ひする……この辺は、前に友達から教えてもらつた“男に自分の言つことを聞かせる3つの方法”が活きたみたいで、虎熊さんは、素直に指示に従つてくれた。上目遣い様々だ。

「とりあえず、上着を脱いでください」

「分かつた」

服の上からだと、治癒術をかける相手の肉体が意識しづらいから、邪魔だつたので脱いでもらう。

すると、そこから露となつたのが、年頃の男の子の体……。

うわあ、腹筋つて、本来は、こんな風に割れてるんだ……胸も硬そう。

「何を頬を赤らめているのだ？」

「え、あ、はい！？　すぐに治します、はい！」

いけないいけない……ついつい、初めて見る、年頃の男の子の上半身を凝視してしまつた。

え、童子さんはつて？

あれは何だか、もはや一つの作品を見てるみたいだつたから、恥ずかしいって感じは無かつたかな。

「えつと……まずは、この一番酷いところからですね」

邪念を振り払つよつて、私は、これから行つ治療術に集中する事にした。

改めて傷口を確認すると、結構深いところまで刺さつていた事が分かつた……こんな怪我をしてても、辛そうだつたけど立つていらるるなんて、やっぱり人の姿に変わつても、妖怪なんだなつて、しみじみ思う。

指された箇所は右の脇腹……そこからは、いまだ血が流れ続けていて、綺麗に刺された傷跡が、生々しく赤い血液の通つた肉を大気

に晒していた。

正直、あまり直視はしたくないほど、気持ち悪い光景だけど、そうも言つてられない……」これで、少しでも恩を返すんだから。

「目を瞑つて、気を落ち着けてください……今から、始めますね」「……分かった」

そう言つて、虎熊さんは、静かに目を瞑つた……。

私は、ゆっくりと一度、気を落ち着かせるために、意識を集中させると、虎熊さんの右脇腹の刺し傷に、両掌をかざす様に近づけた。そして、私も虎熊さん同様、静かに眼を瞑る……。

（集中して……そう、相手の体温と鼓動を感じるように、靈力で相手を包み込む）

すると、私の体から、淡い青色をした、光の様な靈気が発せられ始める……これは、私が先天的に持つている靈力の色。神通力の様な、修行で得るような力ではなく、生まれたときから人自身が持つ、一種の命の色の様なものだ。

その種類はいっぱいあって、青は水、赤は火、緑は木、黄色は土、金は白といった、五行に沿つて色分けされたものが主流なんだけど、実際には混在ブレンドもあるから、本当に数え切れないほどあるらしい。その中でも、青の水は、人の大半を構成している水分を感じ取れる、または操れるために、治療術に最も適した色だと言われている。

私から発せられた、淡い青色の靈気が、目の前にいる虎熊さんの全身を、私がかざしていた両掌を通じて、まるで蚕の繭の様に包み込んだ後、次第に、全身のラインをかたどる様に凝縮されていく。（体温は、やつぱり少し下がつてると、問題は無いみたい……鼓動も焦るほどのものじゃない。凄い、これが妖怪の体なんだ……）

虎熊さんの体を包み込んだ靈気を通じて、私に、彼の血液の流れや様々な情報などが流れ込んでくる……これをやつてている時は、対象者の体温を全身で感じるため、とても暖かい気持ちになるのだけれど。今は、少し虎熊さんの体温が下がっているみたいで、通常よりも暖かくない気がする。だけど、それでも鼓動に異常はないのだから

らと、私は改めて、妖怪の生命力に驚いた。

（心臓から血液の流れを感じながら、傷がどれだけ深いのか、血管や内臓・筋肉の損傷具合を探る……やっぱり酷い）

胸中で、さつき思い出したばかりの治癒術の基本を復唱しながら、虎熊さんの傷を確認する……どうやら、右脇腹を深く刺されたことで、肝臓に穴が開いてしまっていた様だ。

そこからは大量の血が出ていたけれど、虎熊さんは、それを妖力を使って、塞き止めていたみたいだった。多分これは、以前お父さんが言っていた、妖怪の自己防衛本能が働いた結果だと、私は当たりを付けた。

（よし、刺し傷の具合は確認したから、後は治すだけだね……）

実際、私にとって難しいのは、ここまでの大怪我の具合を把握する作業なんだ……理由は、ただ靈力の使い方が大雑把ってだけならしいのだけど。正直、どんなに集中しても、いつのだけば、何故か得意になれない。

まあ、そんな事はどうかく、ちゃっちゃと傷を治しちゃいましょうか。

そう考えた私は、まずは穴を開いた肝臓に、私の水に特化した靈力を注ぎ込む……すると、血管の流れをコントロールされ、水気の靈力を得た肝臓は、みるみる内に、穴を開いた箇所を塞ぎ始めていく。これは、内臓にも筋肉があることが理由の現象で、水氣の靈力を流し込まれた筋肉の細胞が、急激に活性化し、その自己再生機能を極限までに高めるのが原因みたいだけど……細かい事は、私には分かりません。

だって、細かい事を考えながらやると、私って失敗しちゃうから、結構感覚でやつてる部分が多いんだ……人に言つと、お前頭悪いなとか言わるので、悲しくなるから絶対に言わないけど。

何の問題も無く肝臓の穴を塞いだ私は、この後、同じ要領で、虎熊さんの全ての怪我を治していくのでした……。

(これほどとは……驚いたな)

田の前で、行われている鏡花の治癒術を見て、妖狐は思わず胸中で驚きの声を漏らしてしまう。

青い靈氣で包まれた二人……その一方の、虎熊が負っていた全ての傷が、みるみる内に元に戻っていく。
(靈力の使い方は、雑にも程があるが。それにしても、この治癒能力は、凄まじいな……流石は安部家の者、腐つても鯛とは、まさにこの事か)

鏡花の高い靈力と、もともと水に特化している才能によつて、細かい技術こそ無いものの、半ばごり押しで進められていく治癒術であつたが……結果は一目瞭然、既に虎熊が負っていた傷は、完治寸前今まで来ていた。

心なしか、鏡花の靈気に包まれている虎熊の表情が心地良さそうになつてゐる……。

そんな光景を眺めつつ、妖狐が腕を組みながら黙して立つてゐる

と。

「すまない妖狐。俺はこれから、この壊した天井を直す作業を手伝わないといけないらしいから、先に教室に向かつてくれ」

先ほどまで教員に、今回のトラブルの事と、天井の事について謝りに行つていた童子が戻ってきた。

「……はい、終わりました」

同時に、鏡花の治癒術も終わつた様であつた。
ゆっくりと、虎熊が閉じていた瞼を開ける……。

「……凄い。全部治つてやがる」

自らの体を直に触れながら、さつきまで肝臓に穴が開くほどの深い刺し傷があつた右の脇腹を確認した虎熊は、鏡花の治癒術の凄まじさに、思わず驚きの声を漏らしてしまつ。

「これ、虎熊よ。まずは礼だろうに」

「あ、すみません妖狐さま……その、ありがとよ、治してくれて」腕を胸下で組んでいる妖狐が、驚きに呆然としていた虎熊に礼を述べるようつに注意すると。虎熊は、素直に田の前で、いまだ廊下の地面にお尻をつけていた鏡花に頭を下げる。

「そんな、私こそ、ありがとうございます。虎熊さんが、あの時、庇つてくれなかつたら、私、もしかしたら死んでいたかもしれませんから」

頭を下げてきた虎熊に、鏡花も同様に頭を下げる。

「安部さん、俺からも礼を言わせてくれ

「え？」

すると、そんな二人のやり取りに、突然、いまだ上半身裸の童子が、真剣な面持ちで割つて入つてきた……心なしか、眠たげにしていた目が、少しだけ開いている様な気がする。

「君が虎熊を守ろうとしてくれた事は、さつき先生から聞かされた。それに、怪我まで治してもらつては、虎熊の主である俺からも、礼を言わなければ、君に失礼というものだ」

「そ、そんな……別に良いですよ、私だつて助けてもらつた身ですし」

「いや、そういう訳にはいかない……」

童子は首を振つて、鏡花の遠慮を退ける……この時、童子の隣にいた妖狐が「ああ……また悪い癖が出あつた」と、ため息を吐きながら疲れたように呴いていた。

「相手に何かしらの恩義を感じたとき、それを返すのは当然のことだ。もし返さなかつたのなら、そいつは恩知らずと言つ事になつてしまつ」

「いや、その理屈は……」

「だから、何か困つたことがあつたのなら、その時は俺に言つてくれ。護衛だろうと荷物運びだろうと、何だつてやつてみせる」

「は、はあ……」

困つたよつに生返事を返すことしか出来ない鏡花に、童子は何か

を勘違いした様子で満足そうな顔をすると、今度は傷が癒えたばかりの虎熊へと視線を向けた。

「虎熊」

「はっ！」

童子の呼びかけに、短く返事を返しながら居すまいを正す虎熊……。

その光景に鏡花は、さつきの妖狐の話通り、二人が何らかの主従関係の間柄にある事を、漠然としながらも理解する。

「今回は相手方の妄言という事で、先生に納得してもらえたし、まだ俺が、お前に“序列戦”に参加することを認めていないという事も伝えた……だから、安心しろ」

「はっ！　お手を煩わせてしまい、まことに申し訳ございませんでした！」

「別に、そんなに畏まらなくてもいい。俺はただ、お前が無事だったことだけで十分なんだ。今後は、もう無茶はするなよ？」

「はっ！」

一人の妙に仰々しいやり取りに、鏡花は面を騒らつた様な気持ちになる。

すると、そんな鏡花に、妖狐が、静かに耳打ちをしてきた。

（さつきも言ったが、童子は虎熊の主でな。その関係は、あやつらの祖先から続いている関係なのだ……）

（そうなんですか？）

耳打ちで小声の妖狐に合わせ、鏡花も小声で話し始める。

（ああ、本当だ。というより、おぬしも陰陽師なのであるつ、そのくらいは知つておけ）

（は、はあ……）

よく分からぬといつた様子で返事を返す鏡花に、少し呆れ顔をするも、妖狐は説明を続ける。

（で、だ……この妖怪学園では、規則として“序列戦”を挑む場合、相手の了承を得た後に始めるというのがあるのだが。これは、ま

あ妖怪のプライドからして、殆ど断らないのが当たり前での、有つて無いようなものなのだ

(それが、童子さんと虎熊さんの話に、どんな関係があるんですか？)

(この規則には、一つの例外があるのだ)

(例外？)

(そう、例外だ……簡単に言つてしまえば、主従関係にある妖怪で、従者として主人の支配下に入っている妖怪は、主人の許可無く、“序列戦”に参加してはならんというものなのだが……これには理由があつての。もし、従者が勝手に“序列戦”を受け、主人に黙つて死んでしまつた場合、そこから新たに従者を殺めた相手と主人の争いが始まつてしまつ。それが妖怪社会で大きな権力を持つ主人なら、下手をすれば、大小問わない戦争が起こつても可笑しくはないのだ)

(戦争……ですか？)

(そうだ)

ゴクリと、鏡花は息を呑んだ……。

昨今の人間と妖怪が交わつてゐる社会では、こと争いという概念が希薄になつては來ていると、“表の情報では”謳われてはいるが、鏡花のような、妖怪たちと争う力を持った者達の間では、小さなざこざから、大きないざこざまで、様々なトラブルが起つてゐることは周知の事実なのだ。

その事は、まだ修行中の身とはいえ、鏡花も父親である大鏡から聞かされ、ある程度は理解している。しかし、鏡花の場合は、ただ聞かされただけであつて、事實を垣間見たことすらない……それが、今回の命の危険があつたトラブルや、身内ではなく他者からの言葉によつて、急に現実味を帶びてきた。

人間と妖怪は、一世紀以上前から、ある大きな出来事が切欠で交流を深めてきた。これにより、現在では、妖怪側の戦力も相まって、非常に対等な関係を築けている……鏡花にも、実家の近所には、妖怪や混血ハーフの友人が何人かいるくらいだ。だが、争いがあるのも、ま

た事実。

現実というものを理解し始めた鏡花の胸中を察してか、妖狐が、小声ではあるが、少しだけ、気が紛れるような微笑ましい声音で、話を続けた。

（まあ、それも今では殆ど起きてはおらんから、安心しろ……）
最近、起こった荒事といったら。去年に起つた、いけ好かぬ小娘、ヴァンパイアが、学園中に夜行人ナイトウォーカーの出来損ないを放つた事ぐらいだ（それって、普通に危ないじゃないですか……何が原因で、そんな事になつたんですか？）

こちらの事を察してくれた妖狐の声音に、少しだけ気が紛れる思いをするも、鏡花は苦笑を禁じ得なかつた。

しかし、鏡花に原因を聞かれた妖狐は、何かを思い出したのか……その白面とも言える、美しく整つた顔立ちを、怒りに歪ませながら、震える声音で口を開いた。

（いやなに……原因は些細な事だつたのだ）

（妖狐さん、顔が怖いです……）

（あの糞小娘が、身の程も弁えずに『童子が欲しい』とほざき始めての……ルーマニアの由緒ある貴族の出らしいが、自身より格上の妖怪を欲しいなどと……片腹痛いを通り越して、腸が煮えくり返つたわ）

もはや、耳打ちはしているが、鏡花を見ていない妖狐の鋭い目は、冗談ではなく人を殺せそうな程にぎらついていた ああ、多分、この原因の途中を聞く限り、妖狐さんと、そのヴァンパイアの娘がトラブルの発端だつたんだろうな と、鏡花は珍しく察しのいい答えに自然と行き着いた。

「何しているんだ？」

「……うん？ おお、童子か、もう話は済んだのか？」

そうこうしていると、虎熊との話が終わつたのか、童子が不思議そうな視線で、何やらコソコソとしていた二人を見下ろしていた。かけられた声に気付いた妖狐は、先程までの怒りに歪んだ表情を

治めながら、耳打ちしていた鏡花から立ち上がって、童子に向き直つた。

「ああ。もう話も終わって、アイツは教室に戻した」

「そうか、なら、私も行くとするかの」

「いや、俺はここ修繕を手伝わないといけないというから、先に行つてくれ」

「ふん……生真面目なやつめ」

言いながら、童子も含めた、この場にいた三人が、廊下に小山を作るほどの鉄骨やらコンクリートの瓦礫の塊に視線を向けた……。これの修繕つて……上は三階までの吹き抜けになっちゃつてるのでくらい掛かるんだろう?

「なんだ? 呆けたように天井なんて見おつて」

「え? いや、これを直すんですか?」

腰を抜かした状態で、吹き抜けになつてしまつた一部の天井をホケ~と眺めていた鏡花に、瓦礫の小山から視線を外した妖狐は、締まりの無い彼女の顔を指摘するかのように声をかけた。

それに、鏡花は“こんなもの、学生に直せるの?”といつてユアンスを乗せながら尋ねた。

「まあ、直すとは言つても、童子は手伝いだけであろうからな。主にやつてくれるのは、用務員の“ぬりかべ”さんだ」

「“ぬりかべ”さんですか……」

「そうだ、“ぬりかべ”さんだ」

もう、何から今まで妖怪っぽくしの学校なんだないと、改めて身に染みたのを感じ、ははは……と、乾いた笑みを浮かべる鏡花。

「では、ほれ、行くぞ鏡花」

「え?」

そんな乾いた笑みを浮かべていると、妖狐が少しだけ身を屈め、腰を抜かした状態の鏡花に手を差し伸べた。

「どっちにしろ、そんな状態では、職員室にも一人で行けぬであろう? 今日はどうせ、朝のSHRは遅れるだろうから、私が連れて

行つてやる。感謝するのだな」

そう言つて、妖狐はニッ「リと微笑む……。

その微笑に、自然と安心感を覚えた鏡花は、廊下の地面にお尻を着いたままであつたが、ゆっくりと差し出された手を取つた……妖狐と鏡花の掌が重なつた瞬間、腰を抜かしていた鏡花が“グイ！”と体ごと引き上げられた。

「まだ、自分で立てぬか？」

「はい……すみません」

「そうか、なら私が抱えてやる！」

「え？ うわっ！？」

立ち上げられたものは良いが、口口口と覚束ない足取りの鏡花の様子を見て。妖狐は、その細腕からは考えられない力強さで、鏡花の膝裏と背中に手を回し、いわゆるお姫様抱っこで、人ひとりを楽々と抱え上げて見せた。

それに驚きの声を上げる鏡花……心なしか、頬が紅潮しているようにも見える。

「まずは職員室に行つて、おぬしが在籍するクラスの担任を見つける。そうしたら、後はその担任に任せれば良いからな」

「は、はい！」

同性ではあるが、抱えられた状態で見上げる妖狐の顔立ちや、体に当たつてくる豊満な胸は、鏡花の思考を停止寸前までに追い込むには十分な威力を誇つており、思わず可笑しな返事を返してしまふ。しかし、それに妖狐は特に気に入った様子は見せず、お姫様抱っこで鏡花を抱えたまま、この瓦礫が小山になつた廊下を悠然とした歩調で立ち去つていつた。

妖怪たちの学び舎（後書き）

この小説は、これまで作者が書いてきたようなノープランな感じではなく、確りとプロットを建てて書いていこうと考えているので、かなり遅い更新になると思いますが、何とぞ、ご理解の方をお願いします。

不運の転入初日

転入初日、SHRでの挨拶！

新しいクラスメイトとの初顔合わせ！！
ご近所以外の、妖怪の方々との初めての交流！！！
さつき起こつたトラブルなんて、なんのその！！！！
ワクワクが止まらない、新たな環境への変化と修行への始まりに、
私は胸を高鳴らせ……。

そして、見事に玉砕されました……ええ、既に挫折しそうです。

「え、それでは、お前らの新しい仲間から自己紹介があるから……」
そう言って、無事、転入を果たしたクラス担任の先生が、教段の
下に立っている私に、視線を向けてくる……これは、私に自己紹介
をしろと促しているのだろうけど、まずは、このクラスの状況を見
渡してから言つて欲しいよ、本当に。

「えっと……私立聖上女子高等学校から転校してきました、安部鏡花」と言います。実家が陰陽師の家系で、この学校には修行のために
きました。これから残りの一年間、よろしくお願ひします」

私は、なるべく元気良く自己紹介を述べながら、45に上半身
を傾ける理想的な一礼を、目の前にいる29人の新しいクラスメイ
トの人たちに向ける……そして、ゆっくりと長い黒髪を揺らしながら
頭を上げると。

『おい、見ろよ……』

『ああ、美味そうな肉付きをしてやがる』

『可愛いなあ……特に、あの“眼が美味そうだ”』

『へえ……ねえ？ あの娘って、“じつちの世界”に興味ありそ

うかな?』

『さあ? でも、それっぽい雰囲気はあるから、一回押し倒してみれば?』

自分達とは異なる種族である、私に対して、様々な会話のやり取りが行なわれていました。

その男子生徒、明らかに蛇みたいに一股に別れた舌で、私を見ながら舌なめずりするのは止めてください……本当に背筋に悪寒が走ったから。

窓際のボーイッシュな赤髪をした女人、眼とか言わないで、私を食べても、絶対に美味しく無いよ。だって、ジャンクフードとか大好きだから、きっと体に悪い老廃物とか溜まつてるだろ? から。えつと、その……廊下側の最後列のお二人、というより“お姉様がた”。私を、そんな眼で見ないでください。なんだか、恥ずかしくなつてくるので……てか、あなた方、隠す気も無さそうな尻尾の先が“ハート型”だから、サキュバスですよね? サキュバスって、普通逆の趣向に旺盛な種族なんじゃないですか? なんなんですか“こっちの世界”つて!? 私、それっぽい雰囲気なんて、これっぽっちもありませんから!!

「じゃあ安部の席は、そうだなあ?」

私の自己紹介が終わつたと見ると、『ぐく一般的な机や椅子が並べられた、三十人学級によくあるクラスの風景を、担任の先生が教卓に両手をつき、教段の上から見渡す。すると、窓際最後尾の机と椅子に座る、一人の女子生徒が、プラプラとダルそうに“ここだ”と自分の存在を主張しながら手を挙げ始めた。

「うん? どうした九尾?」

どうやら、その自己主張が先生に届いたようで。聞かれた女生徒、九尾妖狐さんは、何やら良い事を思いついたかのような笑みをニヤリと浮かべながら、黒板の前に立つ私に視線を向けた。

その少しだけ吊り上つた、切れ長の綺麗な瞳と眼が合つた瞬間、私の胸の鼓動に、ドクンと跳ね上がるような感覚が襲つた……心な

しか、両頬が熱い。

「鏡花とは、さつき知り合つた仲での。席ならうつぶ、私の隣が空いてるから、そこに座らせればよい」

先生とは眼を合わせず、私に視線を向けたまま軽い声音で、そんな事を言う妖狐さん……。

きめ細かでガラス細工の様なストレートロングの金髪に、細く整った顔立ちと輪郭、モデルを思わせるスレンダーかつ、出るところは出ている背の高いプロポーションは、とても同年代とは思えない、大人びた雰囲気を醸し出していて……だけど、ふんぞり返つて座っている姿で、その辺は±〇といった所に落ち着いていた。でも、それでも、本当に綺麗な人だなあ……。

「そうなのか、なら安部。あそこで手を振つている、横柄な奴の隣に座つてくれ」

「……あ、はい、分かりました！」

「うん？ なにを、そんなに驚いたような声を出しているんだ」

「いえ、別に何でも無いです、えへへへ……」

「まだ眼を合わせ続けている妖狐さんに、いつの間にか目を奪われていたのか。

私は、先生から掛けられた声に、一拍の間を開けた、ちょっとだけ上ずつてしまつた返事を返してしまつ……なんだか、今日は色々と調子が狂うことばかりだよ。

やつぱり、新しい環境つて、無意識の内に緊張しちゃうのかな……さつきから、朝もそうだつたけど命の危険だつて感じてるし。

そんな事を考えながら、私は妖狐さんと眼を合わせたまま、高鳴る鼓動を抑えながら、先生に指定された席へと歩いていく……あれ？ なんで私、妖狐さんから“眼が離せない”んだろう。それに、近づく毎に、胸の高鳴りが抑えられなくなつてくる……体が、火照つたように熱い。

「ほれほれ、早く、ここに来るので……」

私の様子を知つてか知らずか、妖狐さんは、そう言って、妖艶な

微笑みを浮かべながら手招きをしてくる。……それに、つらわれるように吸い寄せられていく、私の意識と体。

窓際の列と、その次の列の間を歩きながら、私が何だかぼへつとしていると……。

パンツ！！

「うわッ！？ ……あれ？」

先生に促された席まで、あと数歩と言つといひひで、突然、私の耳に誰かが手を叩く音が響いた。

その短くも頭にまで響いた音に、これまでぼへつとしていた、私の意識がハツキリと覚醒する……言つなれば、ちょっととした眠りから覚めたような、そんな感覚でした。

私の意識がハツキリとして、体の火照りも何もかも正常に戻ると、何やら視線の先で、さつきまで私の事を手招きしていた妖狐さんが「ちッ！」といった、忌々しそうな舌打をしていました。

「悔しがるのも勝手ですが、少々お遊びが“下卑にも程がある”のではないでしょうか？ 尻軽狐さん？」

「はんっ！ おぬしには言われたくないわ！ この色情魔の小娘ヴァンパイアが！」

私のちょうど後ろ辺りから、どこか透き通る様な少女の声が聞こえてきた……そして、窓際最後尾に座っていた妖狐さんが、その白面の眉間に皺を寄せながら、これまでふんぞり返っていた体勢から、机に手を付き、前のめりになつてまで、声の聞こえてきた方向に妖気が漏れ出すほどの睨みを向ける。

「色情魔ですって……っ」

意識が覚醒し、正常な判断が出来るようになつた私は、流石に妖狐さんが、これほどの睨みを向ける相手が気になつたので、後ろを振り返る……すると、ちょうど教室の半分辺りの窓際の席に座りながら、こちらに首だけを向けていた、一人の“少女”と目が合つた。

「オ、オホンッ！ ベ、別に何と言われようと、このヴラド家の娘である私が、アナタみたいな、年中盛りきつた品性の欠片も無い振る舞いしか出来ない下賤な女に、人並みの興味を抱くことなんてございませんので……そんなに睨んだところで、アナタ自身の底が浅くなつていくというものですわ」

私と目が合つた瞬間、まるでフランス人形の様な少女は、何かを誤魔化すかのように咳払いをしながら、睨みつけてくる妖狐さんに、冷めた視線を送る……だけど、その色白で小さな体全体から出る禍々しい妖気は、妖狐さんから漏れ出ている妖気と比べても、ほとんど差が無い程に強力なものだった。

それに、この妖気の感じ……日本の妖怪とは異なつた感覚だから、多分というより、容姿から見ても海外の妖怪、つまり“妖魔”的のだと断言できる。

「ほお……この私が、年中盛りきつてる品性の欠片も無い女とはのう。まさか、おぬしにそれを言われるとは……いやはや、世の中分からぬものだのう」

「な、何が言いたいんですの？」

妖狐さんは違つた、軽いウェーブのかかった長いブロンドヘア一が特徴的な少女は、どこか含みのある妖狐さんの口調に、努めて動搖を隠すように視線を流し目で妖狐さんから外していく……何この娘、私にすら動搖を見抜かれるなんて、凄く正直者で可愛い。

そんな少女の様子に“してやつたり”と感じたのか、妖狐さんが、いやらしい微笑みを浮かべながら口を開いた。

「おぬし……昨日、童子の部屋を覗いていただろ？」

「なつ！？ なんの事かしら、私にはアナタが何を言つていいのか理解できませんわ。ちゃんと、現代人にも分かる言語を話してくださいらない？」

「あまり私を舐めるなよ？ おぬしが一昨日の夜、童子の部屋を使いのコウモリを通して覗いていた事など、とつて氣付いているのだぞ？」

「な、ななな何のことかしらー。わ、私にはサッパリですわ！」

「あれだけコウモリに、おぬしの妖気がこびり付いていれば、誰だつて分かるものだがのう……それで、ばれてなかつたと思つていた辺り、やはり、おぬしは救いようも無い小娘だ」

「い、言つに事欠いて、救いようも無い“ペッタンコ”な小娘ですつてえ……」

ガタリと、私と同じ制服を着た、背の低い少女が、そのアーモンド形にハツキリと見開かれた、コバルトブルーの瞳を“血の様なワインレッド”に変色させながら、机の椅子から立ち上がった。

その細い四肢と白い肌は、本当に華奢な雰囲気を醸し出していて、身長や容姿だけを見れば、とても15・6歳とは思えない幼い印象を、周囲に与えていたのだけど……さつきよりも、全身から溢れ出している妖気が、更に強力になつていて、見る限り、並みの妖怪なんて、少女がその気になれば一瞬で消されてしまうだろう。だけど、今の一人の言い合いを見ていれば、なんだか危険な感じは一切しない……むしろ、微笑ましいと思つてしまふぐらいだ。

「別に“ペッタンコ”とは言つておらんだろう……まあ“絶壁”なのはフォローしようが無いがのう」

呆れたように言いつつも、表情は勝ち誇りながら、自分の胸に手を添える妖狐さん……。

「ぜ、絶壁……っ」

それに文字通り絶句する、お人形さんの様な少女……。

確かに、あれ程の胸を見せびらかせられると、戦力の差を痛感せざる終えない……分かる、分かるよ、その気持ち。

だけど、少女は違つた……その小さくとも、魅力的な膨らみのある唇を震わせながら、何とか反撃のために口を動かした。

「ま……まあ、胸の大きさは、この際、置いておくとして」

「それは仕方ない事だ。“勝てない勝負”をする程、時間の無駄は無いからのう」

「……」

ぐぬぬぬぬ……と、親の仇でも見るかのよつな目で、妖狐さんを睨み続ける少女。

頑張れ、負けるな！　君が奮い立てば、同じ胸の無い人たち（特に私）の希望になる！！

「先ほど、年中盛りきつた尻軽狐女と、私は言いましたよね？」

「…………うむ」

両腕を胸下で組みながら、その鋭い視線を更に強める妖狐さん……。

しかし、それに構わず、少女は話を続ける。

「それを、アナタは否定しましたけど……なら、さつきのは、どう説明なさるのです？」

「さつきのだと？」

「ええ、アナタ……さつき、この転入生の安部さんに、私たちヴァンパイアが得意とする“魅惑”^{チャーム}を掛けようとしていたのでしょうか？」「む……流石に、バレておったか」

「…………魅惑^{チャーム}？”

「聞きなれない単語…………。

私が頭の天辺に、クエッショングマークを三つぐらい浮かべていると。少女がそれに気付いたのか、私に、少しだけ優しげな視線を向けてくれた……正面から見ると、本当に可憐で可愛いといった雰囲気を持つ少女だ。

「人間であると同時に、日本の陰陽師であるアナタには聞きなれない言葉でしょうが。“魅惑”^{チャーム}というのは、我々ヴァンパイアが得意とする術の一つです」

「はあ…………」

良く分からないので、氣の無い返事を返しても、少女は何一つ嫌な顔もせずに、親切に説明をしてくれた……。

「この術の効力は、文字通り、術に掛けた相手を、術者の虜にするもの……つまり、アナタは先ほど、もう少しで、そこの年中盛りに盛りきつた雌狐に、手籠めにされる所でしたのよ」

少女の“気の毒に……”とでも言いたそうな表情を向けられた私は、ゆっくりと、少しだけ怒った様な表情を浮かべながら、ニヤニヤと悪戯娘の笑みを浮かべた妖狐さんに振り向いたのだけど。

「まあ、おぬしも満更でも無かつたのであるつ？ 即興で真似たものとはいえ、あの術は、心に少しでも、そういう隙が無い限りは効果がでんからのう」

「で、ですが。まだ今日の朝に会つたばかりなのに……い、いきなり、そんな術を掛けるなんて、ひどいにも程があるじゃないですか！」

人を手籠めにするような術を掛けておいて、何一つ反省の無い妖狐さんに、私は珍しく、少々の怒氣を孕ませた声を張る……た、確かに、妖狐さんって、綺麗な人だなあ～とか思つてたけど、それとこれとは話が別だと思う。

「そう怒るでない。私も、おぬしと早く仲良くなつただけなのだ……確かに、やり過ぎてしまつたとは思う、すまなかつた」

「あ、謝つたつて……」

「そうか……謝るだけでは足りぬと申すか」

流石に、簡単には許そつとはしない私に、突然妖狐さんが、シュンと表情を俯かせる……たぶん、頭の上に動物の耳とかあつたら、もの凄い感じに垂れていた事だろう。

だけど、こんなに落ち込むなんて……朝からの振る舞いを見るに、妖狐さんって、子供っぽいところもあれば、ちょっとだけ落ち着いたような、大人びた性格の持ち主だと思つてたのだけど。やっぱり、私と同い年の女の子なんだ。多分、これまで妖怪同士だけの交流が当たり前だったに違ひない。だから、慣れない人間である私に対しても、自信が無いから“魅惑”^{チャーム}なんて術に頼つてしまつたんだ。

なんだ、可愛いところもあるじゃない……それだったら、これだけ反省した様子を見せてくれているのだから、許してあげないこともな

「なら、私のファーストキスを、おぬしに捧げよう……」

「なつ！？ なにを言つてるんですか！？」

突然、何を言い出すの！？ 妖狐さん！？

あまりの突拍子も無い妖狐さんの発言に、私は頬に熱を帯びさせながら、後ろへと後ずさる。

だつて、いきなり女の子同士で、キスをするとか言い出したんだよ！？

そりや、誰だつて身を引くと思ひ。

「いや、良いのだ……それだけの事を、私はおぬしにしてしまったのだ」

ガタリと、窓際最後尾の席から、椅子をどかして立ち上がる妖狐さん……心なしか、瞳が潤んでいる様に見えるし、頬も恥ずかしそうに赤らめている。

そしてそのまま、妖狐さんは、私に視線を合わせないまま近づいてきた。

「よ、妖狐さん！？ お、落ち着きましょうー 私は怒つてなんかいませんから！ ね！？」

身長差が10？以上もあるので、私は妖狐さんを見上げるようになしながら、とにかく彼女を落ち着かせようと/or>しているのだけれど……一向に、その紅潮させた、恥ずかしそうな表情を落ち着かせることが無く、私の目の前までたどり着いてしまった。

「遠慮などしなくて良い……妖怪の世界では、人の世の様な、同性同士の行為など気にしないのでな」

「遠慮なんかしてませんからー とにかく、一旦落ち着きましょう！」

何とかして、妖狐さんを止めようと、必死に焦る私……。

だけど、そんな願いもかなわず、妖狐さんは、私の両肩をガツシリと掴んでしまう。

「不慣れなうえ、少しだけ粗相をするやもしれぬが……」

私の顔に息が吹きかかるぐらいに近い距離で、囁くように告げられた、その言葉に、なぜか私は、体を硬直させ、唇を必死に紡ぐ事

しか出来なくなってしまった。

「精一杯この初めての接吻を、おぬしに捧げる……だから、多少の事は、目を瞑つてくれ」

もはや感じられるのは、緊張に見開かれた、私の眼に飛び込んでくる、頬を赤らめ、目を艶かしく細めている妖狐さんの姿だけ……。

次第に、ゆっくりと近づいてくる妖狐さんの唇……。

白い肌と自然に調和を取つてゐる、ちょっとだけ桃色に見える、魅力的な唇……。

ああ……私、これは流されちゃうかなあ。

そうやつて、私が人生で初めてのキスを、同性相手に諦めかけた、その時

「すみません、おそくなりました」

教室の前の扉を開く音と共に、そんな男らしい低い声が、私と妖狐さんの行為で少しだけ騒がしくなった教室に、不思議と響いてきた。

その声を聴いた瞬間、妖狐さんが近づけていた顔を“バツ！”と離し、私を拘束していた手も同時に離した。

「童子、もう廊下の修繕は……『童子様――――ツ……』

既に どうやつたのか分からぬけど 赤らめいでいた頬を治め、さつきまでの白面に戻つた表情を、ドア枠よりも大きな体のせいで顔が見えない童子さんに向けた妖狐さんが、言葉を発しようとすると……。

突然、あのフランス人形みたいなヴァンパイアの娘が、椅子を弾き飛ばすような勢いで、童子さんの方へと走り始めた。

童子さんの方へと駆ける彼女は、西洋の妖怪、つまり妖魔の身体能力を駆使して、履いている制服のスカートや、そのブロンドの髪を靡かせながら、狭い教室の机並びを信じられないぐらいのスピードと小回りの良さを効かせながら、疾風の様に突き進み……そして。

「おはよウジヤエモす——！ 童子様……！」

“キュルン”とかいう効果音が付きそうな、甘ったるい声を出しながら、童子さんの代えのシャツを着た腹部にタックルをかました。

表情や外見、仕草は可愛らしかったのに、そのタックルを童子さんの腹部にかました瞬間、教室中に“ドン——”という衝撃波が発するほどの音が、一瞬にして周囲に爆ぜた。

同時に、教室中のクラスメイトたちが、机の上に乗っている物が衝撃波に飛ばされないように、必死に抑えていた姿も見られた……私？ 私は、あまりにも唐突なことだったから、バランスを崩して尻餅を付きそうになっちゃつたけど、田の前にいた妖狐さんに抱きとめてもらひちゃつたよ。うん、とても良い匂いがするよ……。

「今日はどうなされたのですか S H R に童子様の姿がお田見えにならないから、このコリア・ワラキア・チペシユ・ド・グラード・ドラキュラ。胸が焦れてしまいそうでした」

教室中に広がった衝撃波の影響など、明らかに一般的ではない長い名前を名乗った彼女には眼中にもないようだ……童子さんの腰に抱きつきながら、可愛らしい子供の様な笑みを浮かべている。

そんな、彼女の愛らしい仕草を向けられつつも、童子さんは「すまない、まだ、先生に報告しないんだ」と言つて、腰に抱きついていた彼女を、片手で引き離した……引き離された彼女は「あ、童子様！」と言つて、最愛のものと引き剥がされてしまった悲劇のヒロインの様な絶望に満ちた表情をしていた。

「遅れて申し訳ございません、先生」

「おう、別に構わないが、廊下の修繕は終わつたのか？」

やたら長い名前の少女……コリアで良いかな？

コリアさんを引き離した童子さんは、そのまま 190cm を超える体格の歩幅で、教段の上に立つて いる先生に向かつて、深々と一例をした。

「いいえ。どうやら資材が足りないようで、今日一日は手を付けら

れないと、用務員の“ぬりかべ”さんが仰っていました

「そうか……で、授業は普通にやつても良いんだよな？」

礼の姿勢を取っていた状態から、ゆっくりと頭を元に戻していく

ながら、先生の質問に答えていく童子さん。

「それについては、現在、学年主任の方々が集まって話し合っているそうです」

「なるほど……それで？　お前に対するペナルティとかはあったのか？　原因全体を聞けば、ある程度は軽くなっているとは思うが」
先生と童子さんの会話を、私は妖狐さんに体を支えられたまま聞いていたのだけど……そのペナルティというワードが出てきた瞬間。一瞬だけ、妖狐さんが私を支えている手に力を込めた。

どこか、童子さんの様子を心配しているかのようだ。

「最初は、近くで見ていた先生が、ペナルティは無しでも良いと仰っていたのですが。校舎を破壊したことには変わりは無いので、自分から申し出させて頂きました」

「ほつ……まあ、社会で生きていくなら、それくらいの責任感は持つてもらわないと困るからな。先生は嬉しいぞ、お前の様な生徒がクラスにしてくれて」

「ありがとうございます。自分も、先生のクラスに在籍できた事を、誇りに思っています」

「そうかそうか。そう言って貰えると、先生も教師冥利に尽きるつてもんだ……どつかの誰かさんは、先生である俺に対して、ため口どじりか横柄な態度を取っているからな」

「言いながら、先生は私の後ろにいる妖狐さんに視線を向ける……。
「ふん……私に敬語を使って欲しいのなら、それなりのものになることだな」

妖狐さんは、さう面白くもなさそうに言いながら。先生から童子さんへと目を向ける。

「それで童子よ。結局、おぬしが申し出たペナルティは、どうなったのだ？」

「それも今、学年主任の方々が話し合ってくれている」

言葉遣いだと、何んまいだとかは、確りとしているのに……やつぱりどこか、童子さんの眼は眠そうで、喋る口調もゆっくりとしたものなんだけど、周りの人は、それについて一切気にして無いようだつたから、多分、朝から今までの間も踏まえて、これが童子さんの普通の話し方なんだろうと、私は当たりを付けた。

ま、今はどうでも良いことなんだけね。

「良いといわれた罰を、自分で受けれるか……どこまで馬鹿なのだ、おぬしさ」

「すまない」

「すまないではない！ おぬしが罰を受けると言つ事は、どばっちりが私にも来るかもしだれぬということなのだぞ！」

「ちょっと妖狐さん！ あまり童子様を悪く言わないでもらえます！」

妖狐さんが童子さんに声を張り上げると、いつのまにか、先ほど引き離されたユリアさんが、再び童子さんの腰元に引っ付くようになって、一人の会話に割り込んできた。

「うん、この状況は、私でなくとも分かるよ……確實に、話がややこしくなるね。

「おぬしには関係ないことだ、今は引っ込んでいてくれぬか？ これは、私と童子という“バティ”の問題だ」

「あらそうでしょ？ 今回の元々の原因は、最初にアナタが、そここの安部さんを職員室まで一人にしてしまったことが原因でしょ？ うん……。副委員長である私にとつては、転入早々、トラブルに見舞われてしまつたクラスメイトをサポートするのは義務とも言える事ですので……その諸悪の根源に指導を教えるのは当然のことだと思いますが？」

童子さんの腰元で虎の威を借りているユリアさん……。

そのこちらを見下す視線は、意外に勝ち誇っているかの様で……。

といつより、どうして、私たちの朝の様子を知っていたのだろう

か？

あ、そうか。さつき言っていた、コウモリが何とかって話しか。

「ふん！ 副委員長だらうが何だらうが、おぬしは“ここのルール”も忘れたのか？ 序列で自身よりも上位の存在に意見するとは……ヴァンパイアだけに、命など捨てるほどあるということか？」

鼻で笑いつつも、明らかに殺氣立ち始めた妖狐さんの妖気の流れ

。 その妖気から感じられる妖力の強大さに、教室中の人たちが緊張に息を呑む。

妖怪というのは、お父さんが言うには、限りなく野生に近い本能と感性を持っているらしい……多分、今も妖狐さんの妖気に触れて、本能的に危険を察知しているのだと思う。だけど中には、その強大な妖気の中でも平氣そうな顔をしている人たちがいる。

それは常に眠そうな顔をしている童子さんに……その腰元で威を借りているユリアさん……更には先生に、意外と靈力だけは強い私の……そして、最後に。

「その辺にして頂けませんか、妖狐さん？ ユリアも悪氣があつた訳ではないのです。だから、ここは妖気を收めてはくれませんか？」

突如、妖狐さんとユリアさんの間に割つて入ってきた、この長身の男性。

眼にかかるない程度に伸ばされたブロンドの髪に、全てを見透かしたような赤く鋭い瞳。細く整った顎や鼻などのパーツは、本当に絵に描いたような完璧な造形をしていて、美男子とは、こういう事を言つんだなと、この時、私は始めて理解した。また、長身といつても、別に細くひょろ長いという訳ではなく、筋肉が引き締まつた、いわゆるソフトな体系をしている……なぜ分かつたのかと聞かれれば、それは、この男性の人がなぜか、ワイシャツにネクタイを着けておらず、第四ボタンぐらいまで肌蹴させているからだ。

だけど、そんな事よりも気になつたのが、この人の現れ方だつた。「妖狐さん……今、あの人、“いきなり現れました”」

あまりに不思議な出来事だったので、私はつい、いまだ絶賛妖氣漏れ出し中の妖狐に尋ねてしまう。

しかし、当の妖狐さんは、さもあらんといった表情で答えて見せた。

「あれは、あやつらヴァンパイアの種族が、長年かけて作り上げた“透明化”^{インビジブル}というやつでのう。光の屈折を特殊な妖気の膜でコントロールし、いわゆる透明人間になる。主に変態が好んで使う術だ」

「妖狐さん、流石に訂正させてください。初対面の安部さんが、完全に引いていますから」

そりゃ引きたくもなると思うんだ……だって、透明人間だよ？
いくらカツ「よくて背も高くて美形な感じの人が、なつている人だとしても。そんないやらしい術を会得してると、女性である私は身を守らないといけないと思うんだ。

故に私は、妖氣をまだ出し続けている妖狐さんの背中に隠れた。

「おお、そうだ。怪しげな術を使う変態からは、確りと身を守らねばならんからの。安心しろ、そこにいれば、一先ず私が、おぬしを守ってみせる」

「妖狐さん、悪乗りしないでくれないかな？ 僕のこの術は、もともと力の弱いヴァンパイアが日の光から自分を守るために作り出したものですし、決して痴漢行為を働くために会得したものではありません」

「ああいう風に、爽やかな笑みを浮かべながら言つところが、また怪しいでの。騙されるでないぞ鏡花」

「はい、分かりました妖狐さん」

爽やか……というより、どこか困ったように身の潔白を証明しようと、胸元をわざと開くようにワイヤーシャツを着崩しているヴァンパイアの男の人。

確かに、初対面で、こんな風に、いきなり爽やかな笑みを浮かべるなんて、何か考え合つてのことかもしれないから、油断は出来ない。というより、まず透明人間となつて現れた辺りから怪しい。

そんなイケメンだけど怪しい男の人を、横目でみながらヒソヒソと会話をする、私と妖狐さん……すると、そこに、これまで童子さんの威を借りていたユリアさんが、ちょっと怒った顔で割って入ってきた。

「ちょっとお兄様！仲介役を買つて出るのは結構ですが、その鼻に着くような“香水”的匂いを撒き散らすのは、やめてください！」匂いを嗅がないために鼻を摘みながらユリアさんに言われてしまつた、美形な変態さん……もとい、ユリアさんのお兄さんらしいヴァンパイアの人は、焦つたようにして、自分の体、とりわけ、服についている匂いを嗅ぐ……。

「……しまつた」

「……しまつた、ではありません！また、どこの女と遊んでいたのでしょうか……！お兄様が、こんなセンスの無い香水をつけるはずがありませんからね！」

普段はまだ会つて、數十分ぐらいだけ落ち着いた雰囲気を醸し出すユリアさんだけど、意外と怒つたら、子供っぽいというか、結構捲くし立てるような喋り方をするんだなあ。

そんな事を、ぼんやりと考えていたのだけれど……やはり、流石に朝の学校としての忙しい時間に、ここまで騒ぐのは拙かつたのだろう。

「お前らしい加減にしろ！！そして席に着け！！それから次の授業の準備をしとけ！！今の時間を何だと思つてやがるんだよ！」あん！？

酒焼けしたような渋い声をがらせながら、これまで黙つて事の成り行きを静観していた先生が、出席簿を教卓に叩きつけながら、私たちを怒鳴りつけた。

その大きな声に、私は“ビクン！”と体を跳ねさせてしまう……だって、大人の男の人が本氣で怒鳴るのって、凄いビッククリするだよ？

「童子を見ろ！！ギャーギャー煩いお前らと違つて、もうちゃん

と席に着いてるんだぞ！！」

先生がビシッと指をさしたところを見れば、最前列ど真ん中を陣取るかのように、すでにツナギと無地のTシャツ姿の童子さんが、姿勢正しく次の授業の教科書などを机に並べながら待機していた。「だというのに、クラス委員長である奴が、女との朝帰りを誤魔化しながらの登校！ 副委員長である奴が、周囲の事も考えずに、自分のためだけに行動する！！ 上位序列者である奴なんて、もはや勉強を受ける気すらない」というより、基本的に学園を舐めてやがる！！！ それと転入生！ お前も、転入早々クラスに馴染むのはいいが、他の奴らの妨害になる事だけはするな！！！」

「先生！ 僕は別に、女性と朝帰りなど……」

「なら、その懷に入っている“昨晩のお楽しみ”の写真と、服に“吹きかけられた”香水の匂いは、どう説明するつもりだ？ うん？」

「コラエ君？」

先生の指摘に、慌てて懐を弄るコリアさんのお兄さん、一二コラエさん……すると、何かを見つけたのか。もともと色白の白い顔を、もはや蒼白にさせながら“まずい”といった表情をし始める。

「女と遊ぶのは構わんが、ほどほどにしないと、今日みたいに痛い目に合うぞ？」

「……は、はい、肝に免じておきます」

そんなやり取りを見ていた私たたけど、さつき先生に怒られた面子の中に、確実に私が入っていたことに“今気が付いた”的だけれど……今は、大人しくしたほうが良さそうだと、私は“大人の女性”らしい、落ち着いた状況判断で、この場を乗り切った。

S H Rも終わり、朝の騒動が嘘かの様に、皆席に着いて、次の授業に備えていた頃……。

皆にとつては朗報、転入初日の私にとつては、何ともいえない情

報がクラスに飛び込んできた。

いわく

『今日の授業は全面中止、これから生徒達は規律正しく下校の徒に付くよ』

とのことです……。

この情報が飛び込んできたとき、思わず休日の到来に喜ぶ生徒達が大半を占めていたけど、私は喜ぶに喜べない心境でした。

だって、せっかく転入初日の、あの質問攻めだとか、新しい環境での授業だとかを期待して、完璧なまでの受け答えを用意してきたのにだよ？ これは、流石に虚しいよ……。

そんな風に、妖狐さんの隣の席でダレていたら、理由を知った童子さんに、本気の“土下座”をかまされた。

これには私も驚き、すぐに頭を上げるように言ったのだけど、頑として童子さんは頭を上げようとはしなかった。

なぜ、ここまで頑なに謝つてくれると聞けば『君がクラスに馴染む折角のチャンスを、自分は潰してしまった』だと『下の者を救つてくれた恩人に、自分のせいで不快な思いをさせてしまった』だとか……本当に真摯に謝つてくれていたのだけど、流石に教室で、そんなことをやられてしまつた日には、私が何だか悪党に見られてしまふし、それに、今まで別に重要な事でもなかつたから、なおの事困つた状況に陥つていた。

だけど、それを救つてくれたのは妖狐さんだつた……。

彼女は大胆にも、土下座をする童子さんの後頭部に向けて、踵を打点とした振り下ろしの“踵落し”を決めると、そのまま童子さんの頭を踏みつけながら、こう言つてくれた。

『将来、鬼の一族を背負つて立つ男が、そのように易々と他者に頭を下げるでない！！ みつともないにも程があるだろ？』――

うん……相手の頭を踏みつけながら言つ口詞では無いんだと思ひんだ。

だつて、この時の一人の様子は、さながら女王様と奴隸を髪髪とさせる力関係だったもの……見てるにつちが、童子さんを気の毒に思つちやつたよ。

ちなみに、またコリアさんと童子さん絡みで揉めるのかなとか思つていたら、実はクラス委員長と副委員長は、今田の中止の穴埋めをするために、今後の日程を決めるための会議に参加していたので、特に新しい揉め事とかは起つらなかつた……まあ、起つたら起つたで、困るんだけどね。

そんなこんなで、私の転入初日は、SHRを終えただけで幕を閉じてしましました……。

非常に悲しい限りです。

さて、ところ変わつて、いま私は、引越し先の学生寮の前に立つてゐます。

どうやら、この学生寮には、学園の序列上位者とかいう人たちのみが住んでいるらしく、私の隣には、童子さんや妖狐さんが、同じく学生寮を前にして立つています。

だけど、どうすれば、こうなるのか……？

広い土地に建てられた、二階建ての白く清潔感漂つ学生寮……もとい、一階一番左隅の一室屋に刻まれた、なにやら爆発でもあつたのではないかと疑う、破壊跡。

周辺には、背の高い木々が風に揺られて、気持ちの良い葉が擦れる音を発しているのにも関わらず、一階一番左隅の一室屋のベランダは、黒く焦げていた……。

「なんだ、まだ直しておらんのか、あやつは」

「寮長も忙しいお人だから、仕方ないと思うが？」

「あやつの力をを使えば、十分もかからんだろうに……さては一度寝

をしてあるな」

そんな寮の光景に、妖狐さんと童子さんの二人は、特に気にした様子もなく、普通のやり取りを交わしている……そうか、たぶん、こんなのは日常茶飯事なんだ。朝だってイキナリ襲われて、学校の廊下があんなになつちゃったんだし、これくらいは当たり前の事なんだ。

現実逃避をしようにも、結局は、これから私に降りかかりそうな危険を考える事になつてしまつ。

何だかもう、あのお母さんがフライパンとオタマで起こしに来てくれる実家に帰りたい気分になつてきました。

「何をしてある！ 早く寮に帰るぞ！」

「え？ あ、はい！ 待つてください！」

軽く現実に悲観していると、いつの間にか一人が寮の入り口で私の事を待つていた。

妖狐さんの声で、現実へと視点を戻した私は、白いコンクリートの地面を蹴り出し、これからお世話になる妖怪学園学生寮へと走り出した。

なんだか無駄に豪華な両開きの扉を開くと、そこには田の壁紙や、大理石で出来たピカピカな地面が、ほとんど高級マンションの様な清潔感を漂わせ。意外に広い玄関の天井や、正面に見える、吹き抜けの螺旋階段……そして入り口すぐ横にある、寮の受付でもある力 ウンターには、インテリア調の、骨董品の様なダイアル式の電話が置いてあり、その近くのベン立てには、お高そうな万年筆が立てられていた。

何この高級感……そして、何この外見とは全く反比例した広さ。

「驚いたか、鏡花？」

およそ学生寮とは思えない早々の光景に、私がほけゝとしている

と、鞄を片手で肩に担いでいる妖狐さんが、どこか自慢げに聞いてきた。

「はい……その、これも何かの妖術なんですか？ 外の感じと、全く広さが違うから」

「ああ、その通りだ。ここには外からの認識を誤認させる、ある種の“幻覚”を生み出す術が施されていてな。これが解けると、この内装同様、豪華な学生寮が外からも拝めることが出来るのだが……」

そういうて、どこか口を濁す妖狐さん……。

「出来るのだが……？」

「まあ、何だ……おぬしも知つておらう。確かに、妖怪学園は国立として成り立つてゐる場所だが、こんな贅沢は本来許されておらんのだ。実際に、ここの大装が外に漏れ、他者の口づてに広まつてみろ……世間からはいわれの無い批判を浴びるに違ひない。“税金の無駄遣いだ”だとかのう」

「そうなんですか、童子さん？」

妖狐さんの話の内容を確認するために、私は童子さんに小首を傾げながら聞いた。

童子さんは長身なので、上目遣い気味に見ることになつてゐる。「大体その通りらしいが……俺は分からない。やはり、そういうた事は、妖狐に聞くのが一番いい」

いや、私、その妖狐さんの話の確認をするために、他の関係者である童子さんに聞いたんだけど……。

そんな私の戸惑いを察知したのか、妖狐さんが「そやつに聞くだけ無駄だよ。何たつて、基本的に何も考えておらんからの」……と、呆れたように“ しようがない ”といつた視線を向けていた。

「ま、とりあえず、そんな嘆いてもしょうがない事を語るよりも、おぬしを寮長である“ ぬらりひょん ”に会わせるのが先だろ？ ほれ、行くぞ」

私と童子さんに、そう言い放つと、妖狐さんはローファーで大理石の地面をツカツカと鳴らしながら、真っ直ぐに歩を進めていつて

しまつ。

これに、無言で付いていく童子さん……。

「あ、ちょっと待ってくださいよ～！」

歩幅の違う二人の歩みに遅れた私は、置いてかれまいと、焦った
ように小走りで駆けはじめた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9446u/>

狐と鬼と私の妖怪学園

2011年8月15日03時19分発行